松江市文化財調査報告書　第109集

八雲村児童福祉センター建設工事
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

禅定寺遺跡

平成18(2006)年12月

島根県松江市教育委員会

八雲村児童福祉センター建設工事
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

禅定寺遺跡

平成18(2006)年12月

島根県松江市教育委員会

例　　言

1．本書は、八雲村保健福祉課の依頼を受けて、八雲村教育委員会が平成10年度（1998年）に実施した八雲村児童福祉センター建設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査の成果を取りまとめたものである。報告書の作成にあたっては、松江市と合併する以前の平成15年度に作成し、印刷については合併後の平成18年度に行った。従って、本文の一部に合併前の内容の記述があることをお断りしておく。

2．本書で扱う遺跡の所在地及び調査面積は次のとおりである。

禅定寺遺跡　島根県松江市八雲町東岩坂111－5　　本調査面積　366m²

3．現地調査期間と費用は次のとおりである。

確 認 調 査　　平成10年4月13日～4月17日

本　調　査　　平成10年5月25日～7月3日

現地調査費用　2,401（千円）

4．調査組織は以下のとおりである。

［平成10年度］　現地調査

調 査 主 体　　八雲村教育委員会　　教育長　佐原通司

調査指導者　　守岡正司（島根県教育庁文化財課）

事　務　局　　長島幸夫（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者　　川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員　　田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

作　業　員　　安部直義、安部当子、安部益子、石倉恒雄、石倉睦子、石原君子、石原政子
石原幸恵、近藤仁一、下川久就、高尾万里子、藤原秀子、山根隆、山根利子

遺 物 整 理　　武田裕子

［平成15年度］　報告書作成

調 査 主 体　　八雲村教育委員会　教育長　泉和夫

調査指導者　　池淵俊一（島根県埋蔵文化財調査センター）

事　務　局　　三好淳（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者　　川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員　　田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

遺 物 整 理　　高尾万里子

5．発掘調査及び報告書の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略。所属は平成15年当時。）

高橋照彦（大阪大学大学院文学研究科）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）
東森市良（八雲村文化財保護審議委員）、三宅博士（安来市和鋼博物館）
平尾政幸（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、廣江耕史（島根県教育庁文化財課）
西尾克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、内田律雄（同）、椿　真治（同）、林　建亮（同）
丹羽野裕（島根県古代文化センター）、團正雄（勝央町教育委員会）

6．本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら調査員が協議して行った。

7．本書で使用した方位は磁北を示す。

8．本書に掲載した「第１図：八雲町位置図（1:400,000)」は島根県松江土木建築事務所の管内図を浄書して使用し、「第２図：位置と周辺の遺跡（1:25,000)」は「八雲町管内図」を使用した。

9．「第２図：位置と周辺の遺跡（1:25,000)」の遺跡番号は島根県教育委員会発行の『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ』（出雲・隠岐編）2003年３月と対応している。

10．土壌および遺物の色調には農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1996年版を参考にした。

11．本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

SB…掘立柱建物跡　　PT…掘立柱建物跡に伴うピット　　P…ピット　　SK…土坑

SD…溝　　T…トレンチ

12．本遺跡出土遺物及び調査記録は松江市教育委員会で保管している。

本　文　目　次

第１章　位置と環境 …… 1

第２章　調査に至る経緯 …… 7

第３章　調査の経過 …… 7

第４章　遺跡の概要 …… 8

第１節　第１遺構面の調査 …… 10

１．SB－01 …… 10　　２．SB－02 …… 12

３．SB－03 …… 12　　４．SB－04 …… 16

５．SK－01 …… 19　　６．SK－02 …… 20

７．SK－03 …… 22　　８．SK－04 …… 23

９．SK－05 …… 24　　10．SK－06 …… 25

11．ピット内出土遺物 …… 25　　12．遺構外出土遺物 …… 26

第２節　第２遺構面の調査 …… 42

１．SK－07 …… 42　　２．SD－01 …… 42

３．SD－02 …… 42　　４．SD－03 …… 42

５．SD－04 …… 42　　６．整地層出土遺物 …… 44

第５章　まとめ …… 47

第６章　自然科学的分析

禅定寺遺跡出土木製品の樹種調査結果 …… 63

第７章　追　補（昭和58年度調査の禅定寺遺跡） …… 65

第１節　調査に至る経緯 …… 69

第２節　調査の経過 …… 69

第３節　遺跡の概要 …… 70
１．A区の調査 …… 71
１．SB01 …… 72　２．SB02 …… 72
３．SB03 …… 72　４．A区出土遺物 …… 72
２．B・C区の調査 …… 75
１．第１加工段 …… 75　２．第２加工段 …… 83
３．第３加工段 …… 83　４．第４加工段 …… 85
５．第５加工段 …… 87　６．その他の遺構 …… 87
７．B・C区出土遺物 …… 89
３．出土地点不明遺物 …… 91

第４節　まとめ …… 94

第１章　位置と環境

八雲村は島根県の東部、松江市の南にあたり、北と西を松江市（北：旧大庭村・西：旧忌部村)、南西部は雲南市大東町（旧海潮村)、南東部は安来市広瀬町（旧山佐村・旧広瀬町)、北東部は八束郡東出雲町（旧意東村・旧出雲郷村）に囲まれている。松江駅よりバスを利用して約26分で八雲村役場に、34分で熊野大社前に到着する。松江市街地への利便性に恵まれ、そのベッドタウンとして近年急速に宅地化が進み、県下市町村の中で高い人口増加率を示す村である。

村の規模は東西８km・南北10km・面積約55.41km^{2}で、総面積の80％以上が山林で占められている。この山間に谷が形成されているが、これらはすべて意宇川本支流の浸食堆積作用によるものである。大きな谷に意宇川、桑並川、東岩坂川、川原川が形成した谷がある。その谷筋の沖積地には余すところなく水田が開かれている。平野はあまり発達をみせず、川が合流する村の北側（意宇川の中流域）部分に盆地状に展開している。

遺跡はこの谷と平野を取り囲む部分に集中し、下流に向かうほど密集している。今回調査を行った禅定寺遺跡もこの平野の南東部に位置する。以下、調査遺跡の報告にあたり、周辺の代表的な遺跡について時代毎に概略を記す。

旧石器時代の遺跡としては、空山遺跡（F62）[註1]が熊野空山山頂に位置する。1971年に実施された学術調査により、前期旧石器時代と考えられる握槌、握斧、盤状石器、削器が出土した。しかし、これら石器の剥離痕が自然に生じる破砕痕とする意見もあり、この石器が果たして人為的に加工されたものなのか、自然石であるのかの結論は出ていない。この他、真ノ谷遺跡（106）や折原上堤東遺跡（88）からも旧石器時代にさかのぼる可能性のある石器が出土している。

縄文時代になると遺跡の調査例は増加するが、遺構に伴うものは少ない。その中にあって、西ノ谷遺跡（F73）からはサヌカイト製ポイント形石器、黒曜石の二次加工のある剥片石器とともに82個のピット状の落ち込みが検出されている。これらのうち、Ｐ－１～Ｐ－15は長軸５m、短軸3.5mを測る楕円を描き、その中央にＰ－16～Ｐ－20が方形に配置され、上屋構造を推定することも可能である。また、前田遺跡（97）では、川辺から晩期のドングリの貯蔵穴が見つかっている。実際にドングリが出土した土坑は４個であったが、立地や規模から貯蔵穴と考えられる土坑が多数検出されている。この他、底部中央に小さなピットをもつ土坑も発見された。遺物は出土していないが、形態などから縄文時代の落とし穴と思われるものであり、折原上堤東遺跡、折原峠遺跡（101)、青木遺跡（98)、谷ノ奥遺跡（36)、恩部遺跡（63)、真ノ谷遺跡からも同様の土坑が検出されている。

弥生時代の遺跡は縄文時代に比べると少なく、各遺跡から出土する遺物の量も僅かである。前期の遺物としては、前田遺跡から壷と甕の破片が数点出土している。但し、河川堆積層からの出土であり、遺構は見つかっていない。後期の遺跡としては折原峠遺跡が存在する。後世の掘削により大部分が失われているが、第２加工段の床面から後期前葉～中葉の草田２期[註2]に含まれる甕が出土している。また、同丘陵上には折原上堤東遺跡（第Ⅱ調査区）が位置し、弥生時代後期後葉から古墳時代前期初頭の竪穴住居跡５棟が見つかっている。この他、村内からは熊野大社々地出土と伝えられている銅鐸がある。しかし、正確な出土場所は特定できていない。外縁付紐式に属するものであり、現存する高さ19.9cm（身高16.4cm、鈕高3.5cm)、鋳厚２～３mm、重量648gを測る。文様は

全体に不鮮明であるが、紐は綾杉文、鰭は鋸歯文、身は４区画となる袈裟襷文（四区袈裟襷文）で飾られている。

古墳時代になると、遺跡数が増加し、７割以上がこの時期のもので占められる。前期の古墳としては、３基の方墳からなる小屋谷古墳群（22）が存在する。埋葬主体は箱式石棺と壷棺及び組合式木棺であり、副葬品としては３号墳の組合式木棺内から刀子１本と四蛇鏡１面が出土している。

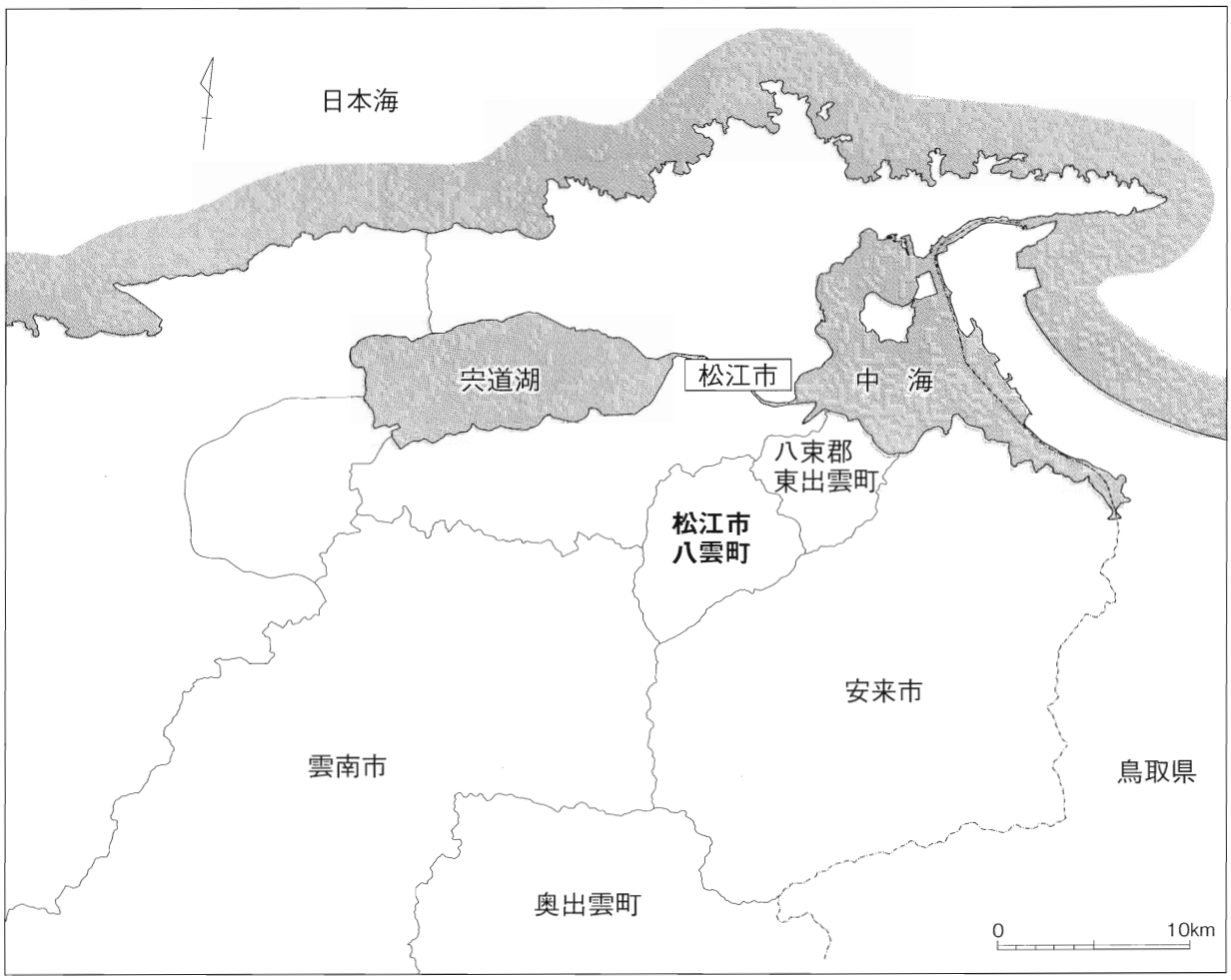
中期以降になると、小規模な古墳群が丘陵上に造られるようになる。谷ノ奥遺跡の北東には、増福寺古墳群（42）・土井古墳群（19）・増福寺裏山古墳群（41）が分布している。増福寺古墳群は一辺6.0～14.5mの方墳26基によって構成されている。特筆すべきは、20号墳から出土した須恵器子持瑕の親壷と、前田遺跡から出土した子壷とが接合できたことである。本来は親壷の肩部に４個の子壷が取り付けられていたものであり、このうちの１個が前田遺跡の河川内から、もう１個が親壷と一緒に20号墳の西裾平坦面からつぶされた状態で出土している。残る２個の子壷は発見されていない。土井古墳群は、増福寺古墳群の北側に位置する古墳群で、一辺7.0～11.0mの方墳13基によって構成されている。増福寺裏山古墳群は土井古墳群と同じ丘陵に立地し、一辺10m前後の方墳８基からなる。これらは尾根により便宜上３つに分けられているものの、本来は同一の群と考えられる。総数47基を数えるこれらの古墳群は、密集度において、松江市大草町にある西百塚山古墳群と同一の群をなしていたと考えられる八雲西百塚山古墳群（21）に次ぐものである。この２つの古墳群が村内では密集度の高いものである。この時期の住居跡には、折原上堤東遺跡（第Ⅰ調査区）があげられる。方形の竪穴住居跡４棟が見つかり、このうちSI－03からは多数の土師器に混じり住居内祭祀に用いられた泥岩製有孔円板４点が出土している。

古墳時代後期に入ると、出雲地方東部に多い石棺式石室をもつ池ノ尻古墳（５）、雨乞山古墳（１）が築かれる。池ノ尻古墳は東岩坂川が造り出した谷の水田中に位置する。墳丘は水田耕作の際に削られ、現在では石室がむき出しになっている。原位置から動いている石材もあるが、現状での石室の規模は内法で幅1.9m、奥行き1.3m、高さ1.6mを測る。雨乞山古墳は平野北東にそびえる雨乞山南麓に築かれたものである。墳丘は現状で一辺7.5×8.0m、高さ2.5mを測り、方墳と考えられる。意宇川下流域の古墳の影響を受けたこの古墳は八雲村最大規模の石室を有し、この地域の有力な豪族の存在を想定させる。一方、同時期の横穴墓は丘陵斜面に数基から十数基の単位で営まれている。密集度の高いものに四歩市横穴墓群（３）がある。増福寺古墳群の南側の丘陵山腹に分布するものであり、確認できる横穴だけで28穴を数える。玄室の平面プランは、大部分が方形で天井は丸天井形をなしているが、非常に丁寧な四注式正整家形のものも数穴見られる。この他、後期の遺構として前田遺跡から検出された貼石遺構がある。川辺に自然石を並べたものであり、遺構周辺からは、勾玉、切子玉、土鈴、手捏ね土器、木製の琴、臼玉が入った須恵器の壷、赤色顔料が塗布された土師器の高坏、瓢箪、多量の桃核等が出土している。また、付近の河川内からは頭椎式の木製刀把装具や木製刀形、赤色顔料により優美な文様が描かれた木片などが出土していることから、有力首長を中心に行われた川辺の祭祀遺跡と考えられる。

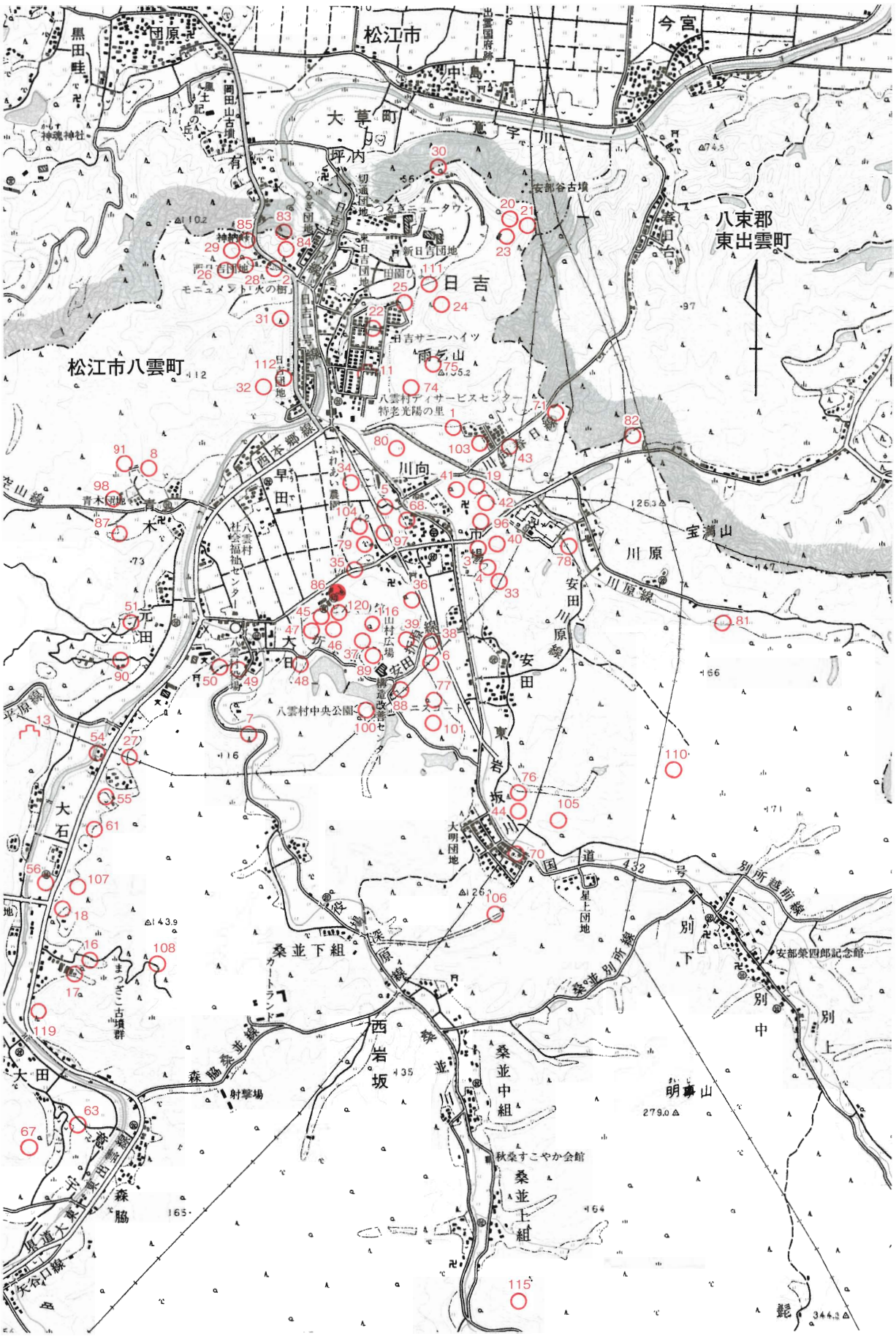
奈良時代の遺跡としては青木遺跡があげられる。第Ⅰ調査区で発掘された掘立柱建物跡の床面からは須恵器の坏蓋内面に「社辺」と刻まれたヘラ書土器（転用硯）が出土している。付近からは須恵器の灯明皿、「林」と書かれた墨書土器２点なども見つかり、注目される。八雲村は、733年に編纂された『出雲国風土記』によると、出雲国庁や意宇郡家が置かれていた「意宇郡大草郷」に含ま

れ、八雲村域だけで１つの郷を形成し得ないほど人口は希薄だったようである。それでも当地域には中央の神祇官の神名帳に登録されている官社が10社（熊野大社・久米社・布吾彌社・宇流布社・前社・田中社・詔門社・楯井社・速玉社・石坂社）、出雲国庁で登録されている国社７社（毛弥社・那富乃夜社・国原社・田村社・河原社・笠柄社・志多備社）が存在していた。このことは、村域の各地に集落が形成され、それぞれが祭祀を行っていたことを裏付けている。

中世以降の遺跡の調査例は僅かである。熊野大社近くにある叶ザコ遺跡（F58）からは瓷器系の甕を使用した鎌倉時代の墓が見つかっている。また、墳頂部より五輪塔の基壇が検出された中山２号墳（35）や、多数の火葬墓が検出された谷ノ奥遺跡が存在する。谷ノ奥遺跡の古墓群は低丘陵上に位置し、25基以上の五輪塔が発見されている。この他にも、村内各所には多くの五輪塔が点在している。本村は尼子氏の居城月山富田城のあった広瀬町と接し、中海・宍道湖が近いという地理的条件から要衝には山城が築かれ、熊野の地には尼子十旗の中に数えられる熊野城跡（F12）が存在する。戦国時代頃の伝承・文化財が数多く残り、今後中世の遺跡の増加と重要な遺構の発見も予想される。



第１図　八雲町位置図（1:400,000）



第２図　位置と周辺の遺跡（1:25,000）

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	名　　称	種　別	概　　要	番号	名　　称	種　別	概　　要
1	雨乞山古墳	古墳	方墳、石棺式石室、一部調査	54	雲場古墳	古墳	
2	岩坂陵墓参考地	古墳	円墳、古墳周辺一部調査	55	掛合遺跡	散布地	須恵器
3	四歩市横穴墓群	横穴墓群	28穴確認、須恵器	56	田中社跡	神社跡	
4	高丸横穴墓群	横穴墓群	４穴確認	61	大石窯跡	窯跡	須恵器
5	池ノ尻古墳	古墳	石棺式石室、須恵器	63	恩部遺跡	散布地	一部調査･保存、中世陶磁器、五輪塔
6	安田横穴墓群	横穴墓群	２穴、平天井型	67	恩部山横穴墓群	横穴墓群	
7	岩屋口横穴墓群	横穴墓群	８穴（２穴消滅、１穴調査）	68	紙屋遺跡	散布地	磨製石斧
8	青木横穴墓群	横穴墓群	２穴確認	70	鈩谷遺跡	散布地	消滅、現在の大明団地
11	東岩坂要害山城跡	城跡	山城、石垣、消滅	71	穴田遺跡	散布地	円筒埴輪、土師器
13	大石城跡	城跡	山城、郭、腰郭、通称じゃ山城跡	74	雨乞山古墳群	古墳群	方墳２基
16	松廻古墳群	古墳群	方墳４基以上、2・3号発掘調査	75	雨乞山遺跡	祭祀遺跡	土師器
17	松廻横穴墓群	横穴墓群	８穴以上、1・4号発掘調査	76	細田古墳群	古墳群	方墳２基確認
18	高野横穴墓群	横穴墓群	2号発掘調査･直刀、鉄鏃、斧他	77	松ノ前古墳	古墳	方墳
19	土井古墳群	古墳群	方墳13基、13号発掘調査	78	浜井場遺跡	散布地	須恵器、土師器
20	大円寺上古墳群	古墳群	円墳２基	79	中山五輪塔群	古墓	五輪塔、石塔は原位置移動
21	八雲西百塚山古墳群	古墳群	方墳47基	80	戸波遺跡	住居跡他	一部調査･埋没、須恵器、陶磁器、漆器
22	小屋谷古墳群	古墳群	方墳３基、発掘調査･消滅	81	屋敷谷五輪塔群	古墓	五輪塔
23	大円寺遺跡	散布地	土師器	82	善三郎谷横穴墓群	横穴墓群	８穴
24	大谷古墳群	古墳群	方墳２基、子持壷	83	落井古墳群	古墳群	方墳10基
25	御崎谷遺跡	散布地	須恵器、土師器、発掘調査･一部埋没	84	落井東横穴墓群	横穴墓	１穴開口
26	神納遺跡	散布地	須恵器、土師器	85	落井西横穴墓群	横穴墓群	11穴以上
27	桧廻遺跡	散布地	須恵器、土師器他	86	禅定寺遺跡	住居跡	陶磁器、須恵器、石帯
28	神納横穴墓	横穴墓		87	青木谷遺跡	散布地	須恵器、土師器、黒曜石
29	神納古墳群	古墳群	５基	88	折原上堤東遺跡	住居跡	一部調査･消滅、竪穴住居、掘立柱建物跡
30	和田平横穴墓群	横穴墓群	３穴、埋没	89	折原中堤北遺跡	散布地	須恵器
31	岩海古墳群	古墳群	方墳１基、円墳１基	90	上元田遺跡	散布地	須恵器、土師器、黒曜石
32	勝負谷古墳群	古墳群	方墳２基、円墳２基、1号発掘調査･消滅	91	椎木谷遺跡	散布地	須恵器、土師器
33	高丸古墳群	古墳群	円墳２基	96	増福寺横穴墓群	横穴墓群	２穴確認、法面に玄室の一部が残存
34	山崎遺跡	散布地	一部発掘調査･埋没、須恵器、打製石斧	97	前田遺跡	祭祀遺跡	調査･埋没、自然河川跡、木製琴
35	中山古墳群	古墳群	方墳５基、２号発掘調査･消滅	98	青木遺跡	住居跡	一部調査･消滅、竪穴住居、掘立柱建物跡
36	谷ノ奥遺跡	古墳･古墓群	方墳３基、円墳１基、火葬墓、一部調査	100	折原中堤遺跡	住居跡	一部調査･消滅、竪穴住居跡、土師器
37	北折原遺跡	古墳他	方墳１基、横穴２穴、一部調査･消滅	101	折原峠遺跡	住居跡	一部調査･消滅、竪穴住居跡、弥生土器
38	安田古墳群	古墳群	円墳２基、１号調査･消滅	103	赤坂遺跡	散布地	須恵器、土師器
39	外輪谷横穴墓群	横穴墓群	13穴、12号調査･消滅･鉄鎌他	104	中山遺跡	散布地	須恵器、土馬
40	四歩市古墳群	古墳群	方墳６基	105	宮谷遺跡	生産遺跡	調査・消滅、製炭跡
41	増福寺裏山古墳群	古墳群	方墳８基	106	真ノ谷遺跡	住居跡	調査･消滅、加工段、落とし穴
42	増福寺古墳群	古墳群	方墳26基、一部調査･消滅	107	反田遺跡	散布地	須恵器
43	原ノ前横穴墓群	横穴墓群	調査･消滅、須恵器、鉄鏃、刀子	108	瀧谷奥遺跡	散布地	土師器
44	細田横穴墓群	横穴墓群	平入家形	110	鑪溝遺跡	住居跡？	一部調査･消滅、須恵器、磨製石斧
45	禅定寺横穴墓群	横穴墓群	６穴	111	大谷遺跡	散布地	一部調査･埋没、旧河川、須恵器、土師器
46	禅定寺古墳群	古墳群	方墳10基	112	勝負谷遺跡	散布地	須恵器、土師器、石錘
47	折原横穴墓群	横穴墓群	３穴	115	桑並城跡	城跡	
48	折原下堤遺跡	散布地	須恵器、土師器	116	禅定寺城跡	城跡	郭、土塁、堀切、連続竪堀
49	大日堂横穴墓群	横穴墓群	４穴確認、須恵器	119	大田山神社跡	神社跡	調査･消滅、加工段、社殿の基壇
50	岩坂神社横穴墓群	横穴墓群	須恵器	120	禅定寺五輪塔群	古墓	凝灰岩製の五輪塔群が多数散在
51	古城遺跡	散布地	一部調査･消滅、須恵器、縄文土器				

［註］

註１　『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ』（出雲・隠岐編）島根県教育委員会　2003年３月（Ｐ－１）

註２　赤澤秀則「1.出土遺物・時期」『南講武草田遺跡　講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５』鹿島町教育委員会　1992年３月（Ｐ－１）

［参考文献］

・八雲村文化財調査報告１　『空山遺跡発掘調査概報』八雲村教育委員会　1972年３月

・八雲村文化財調査報告３　『八雲村の遺跡』八雲村教育委員会　1978年３月

・八雲村文化財調査報告４　宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う『土井13号墳発掘調査報告書』八雲村教育委員会　1979年３月

・八雲村文化財調査報告７　昭和55年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う『増福寺古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会　1981年３月

・八雲村文化財調査報告８　日吉台サニーハイツ造成工事に伴う『御崎谷遺跡・小屋谷古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会　1981年３月

・八雲村文化財調査報告10　昭和56年度宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う『増福寺古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会　1982年３月

・八雲村文化財調査報告11　県道大東・東出雲線改良工事に伴う『中山２号墳・中山五輪塔群』八雲村教育委員会　1982年３月

・八雲村文化財調査報告13　新山村振興農林漁業対策事業に伴う『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』八雲村教育委員会　1994年３月

・八雲村文化財調査報告16　「一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ」『山崎遺跡・前田遺跡（第Ⅰ調査区）発掘調査報告書』八雲村教育委員会　1999年12月

・八雲村文化財調査報告17　西岩坂地区一般農道整備事業に伴う『真ノ谷遺跡発掘調査報告書』八雲村教育委員会　2000年３月

・八雲村文化財調査報告19　「一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ」『前田遺跡（第Ⅱ調査区）発掘調査報告書』八雲村教育委員会　2001年３月

・八雲村文化財調査報告20　「一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ」『谷ノ奥遺跡発掘調査報告書』八雲村教育委員会　2002年３月

・八雲村文化財調査報告22　『折原峠遺跡・折原中堤遺跡・古城遺跡』八雲村教育委員会　2003年３月

・『青木遺跡第Ⅰ調査区終了報告』八雲村教育委員会　1996年８月

・『八雲村誌』八雲村　1998年12月

・『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会　1987年10月

・『神々の国　悠久の遺産』－古代出雲文化展－　島根県教育委員会　1998年３月

・『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』（西の谷遺跡）島根県教育委員会　1987年３月

・勝部　昭「出雲・隠岐発見の青銅器」『古文化談叢８』1981年

・宮本徳昭「八雲村・叶ザコ遺跡出土の常滑甕」『松江考古第８号』松江考古学談話会　1992年12月

第２章　調査に至る経緯

近年、核家族化や少子化の進行、地域の結びつきの希薄化などにより、子育てに対する不安や孤立化が増大している。また、子どもたちは仲間遊びの不足などによる心身の未発達が問題になりつつある。このような状況下、八雲村では社会福祉センターの一室で子育て相談を行うとともに、施設の一部を遊び場として解放しているが、他の施設利用者との関係もあり十分な対応ができているとはいえない。また、放課後自宅に帰っても誰もいない、いわゆる放課後児童の増加が予想されている中、放課後児童クラブを既存のプレハブ施設で実施しているが、老朽化のため施設及び環境面の改善が必要となってきた。

八雲村では、これら子育てに関するニーズを把握するため、平成７年度に実態調査を行い、子育て中の家族の現状と意向をふまえ、平成８年度にエンゼルプランを策定した。この中で、子どもの遊びを通した体力増進の場、異年齢間児童の交流の場、情操を育む場として、また、児童の健全育成活動のネットワークの中心となる施設の必要性が示された。こうして、八雲村保健福祉課では、この方針に基づいて八雲村児童福祉センターの建設を行うこととなった。建設場所としては、児童福祉ゾーンとしての整備を図るため、八雲幼稚園と保育園に挟まれた水田が選定された。

この事業に先立ち、平成９年12月24日、八雲村保健福祉課から八雲村教育委員会あてに八雲村児童福祉センター建設工事予定地内における埋蔵文化財有無についての照会がなされた。工事予定地内には禅定寺遺跡が存在していたことから計画変更が可能かどうかの協議を行ったが、福祉ゾーンとして体系的な整備を行う関係もあり、ここ以外の場所では計画自体が成り立たなくなるとの結論に達し、八雲村教育委員会が主体となり調査を行うこととなった。

第３章　調査の経過

調査はまず、遺跡の範囲と性格を把握し、本調査に備える意味での試掘調査を実施することとした。工事用基準杭を利用して直線を設け、これと直交するように５×５ｍのグリッド組み、グリッド毎に２×２ｍトレンチを設定した。平成10年４月14日から掘削作業に取りかかり、随時遺構の精査を行った。必要が認められた場合は試掘トレンチを拡幅、増設し、最終的には14個のトレンチを設定している。この後、４月17日に全体写真の撮影とトレンチの配置図を作成し、試掘調査を終了した。調査により、開発予定地の約半分にあたる350m^{2}の範囲で遺物の散布と柱穴等の遺構が確認されたため、引き続き八雲村教育委員会が主体となり本調査を実施することとなった。

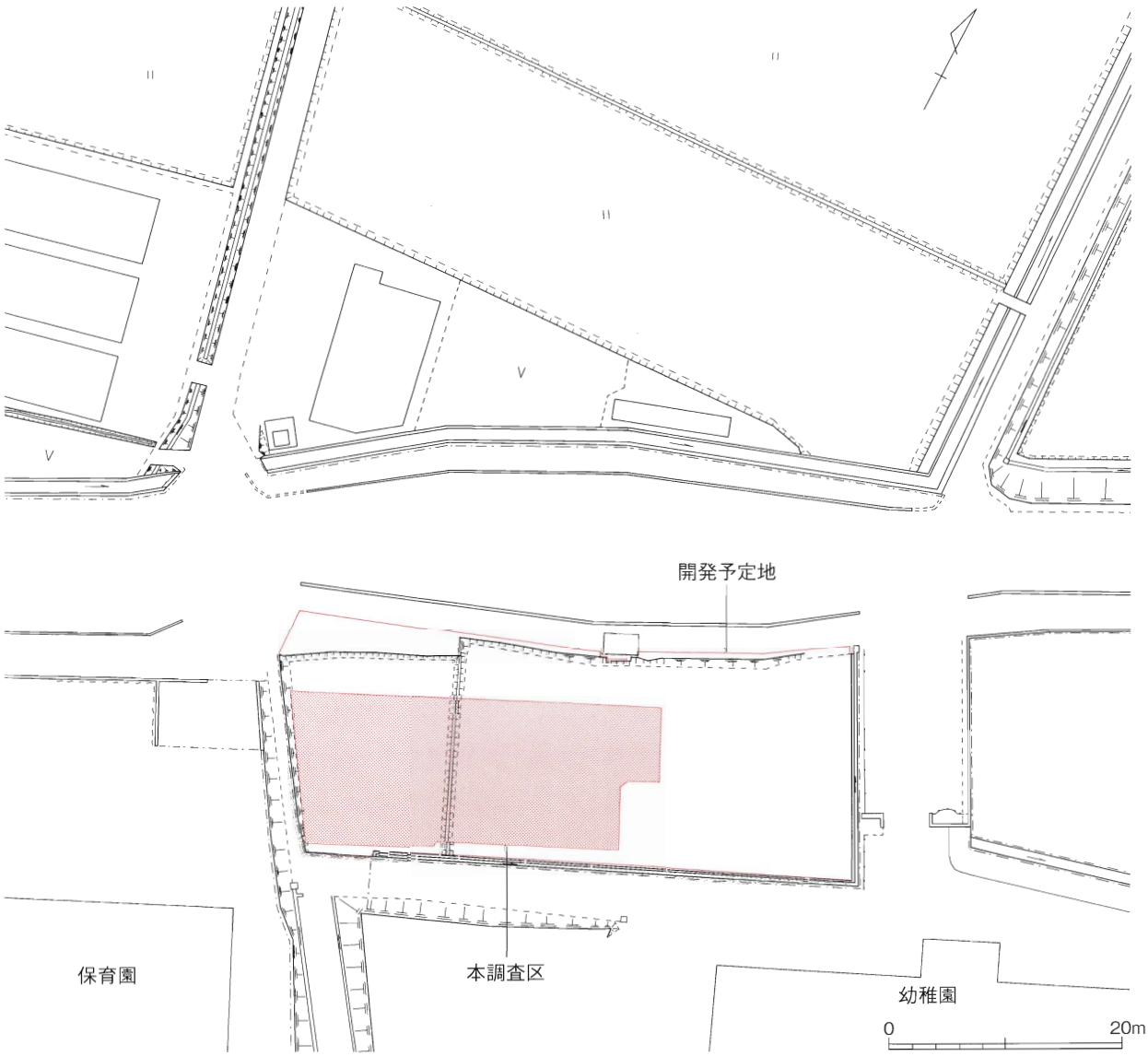
本発掘調査は試掘調査結果を基に調査区を設定し、平成10年５月25日から耕作土層を重機により除去することから始めた。この後、５月27日より手掘りによる掘削作業を開始し、随時遺構の精査、写真撮影を行った。７月１日に全体写真の撮影、７月２日に地形測量、７月３日に撤収作業を行い現地での調査を終了した。工期の関係等で現地説明会は行わなかったが、調査期間中に幼稚園・保育園児の送迎に来られる保護者を対象として出土遺物の展示、説明会を開催した。限られた短い時間ではあったが、沢山の方に見学していただけたのは成果であった。

第４章　遺跡の概要

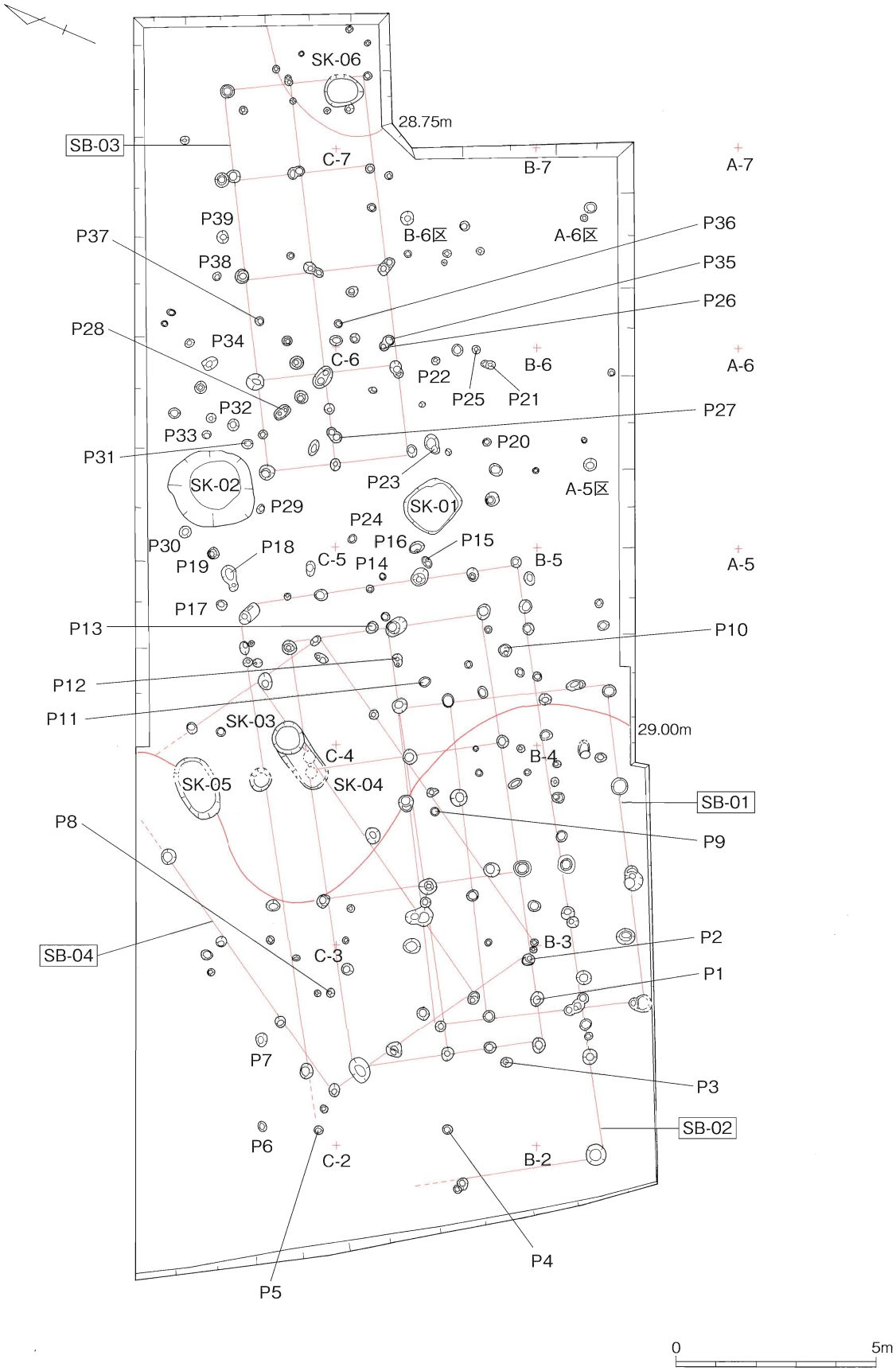
今回調査を行った禅定寺遺跡は標高29.00～29.50mを測る水田中に位置する。遺跡の北西には八雲第一の早田平野が展開しており、県道を挟んだこの水田との比高差は約1.5mを測る。早田平野の耕作土下からは拳大の礫層が検出されるのに対し、調査地からこのような礫層は検出されていない。このことから調査地は、早田平野を北流する意宇川の浸食堆積作用を受けない場所であったと考えられる。南から東側にかけては平野に舌状に突き出した丘陵が伸びる。ここは非常に見晴らしが良い場所であり、遺跡の密集地帯として知られている。特に、南東の山頂は『雲陽誌』にも記載があり、意宇郡東岩坂の条に「古城山　城主年暦しれす俚民此山を禅定寺といふ」と記されている。

今回の調査では、第１遺構面から掘立柱建物跡４棟（SB－01～04）、土坑６個（SK－01～06）と多数のピットを検出した。また、第１遺構面を更に掘り下げた第２遺構面からは土坑１個（SK－07）と溝４本（SD－01～04）を検出している。

以下、第１遺構面と第２遺構面に分け遺跡の概略を記す。



第３図　調査区配置図（S＝1:600）



第４図　第１遺構面遺構位置図（S＝1/150）

第１節　第１遺構面の調査

耕作土層の直下には遺物を多量に含んだ褐灰色土層が堆積していた。この土層は開発予定地の南側部分で確認したが、東側と北側からは検出していない。表土層と水平に10～15cmの厚さで堆積するものであり、これを取り除くと多数の柱穴と土坑を検出することができた。この遺構検出面を便宜的に第１遺構面と呼んでいる。

第１遺構面では、多数の柱穴が遺構の主体をなしており、掘立柱建物跡４棟を復元することができた。切り合い関係にある建物跡やピットもみられ、建て替えも行われていたと考えられる。これらの建物跡は基本的に後述の第２遺構面を埋め立てた整地層の上に作られていた。

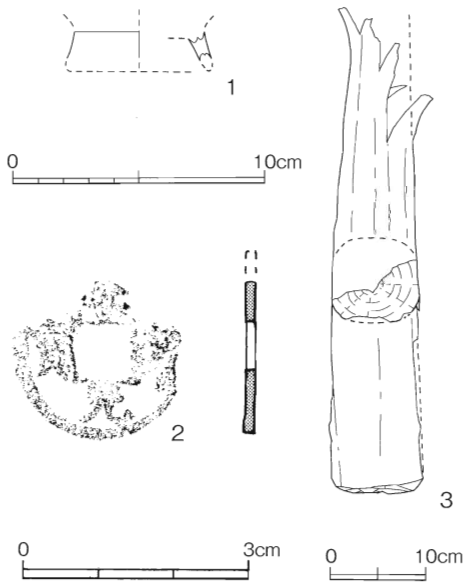
遺物は包含層である褐灰色土層の他、遺構内からも多数出土している。建物を構成するピット内出土の遺物については、それぞれの掘立柱建物跡の項に記載した。また、建物を復元することのできなかったピット内出土遺物については「11.ピット内出土遺物」の項にまとめて掲載している。なお、包含層から出土した遺物については「12.遺構外出土遺物」として記載した。

１．SB－01（第６図、第８・９表）

調査区の標高28.75～29.25mを測る場所で検出された掘立柱建物跡である。梁間２間×桁行３間であるが、北東の梁間中央の柱はやや片寄った場所に位置する。建物の規模は梁間長3.82mと3.96m、桁行長7.84mと7.95mを測る。柱間距離は梁間が1.58～2.40m、桁行が2.15～3.30mである。北西側の桁行には1.19～1.33mの幅で庇か縁状の張り出しが付設されている。南東側にも同様の施設が付随する可能性もあるが、開発予定地外となるため調査を行っていない。建物部分のピットの規模はPT14が最小で26×26cm、PT９が最大で44×47cm、深さはPT７が最も浅く11.9cm、PT９が最も深く62.4cmを測る。張り出し部分のピットはPT16が最小で26×27cm、PT19が最大で35×39cm、深さはPT18が最も浅く16.7cm、PT19が最も深く49.2cmを測る。後述のSB－02・04と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。主軸はSB－03と同じN－60.5°－Eであり、SB－02ともほぼ同方向である。遺物としてはピット内から縄文土器１点、土師器16点、須恵器４点、土師質土器[註1]２点、陶器（瓷器系）１点、石器（石鏃）１個、銭貨１枚、柱根１本が出土した。

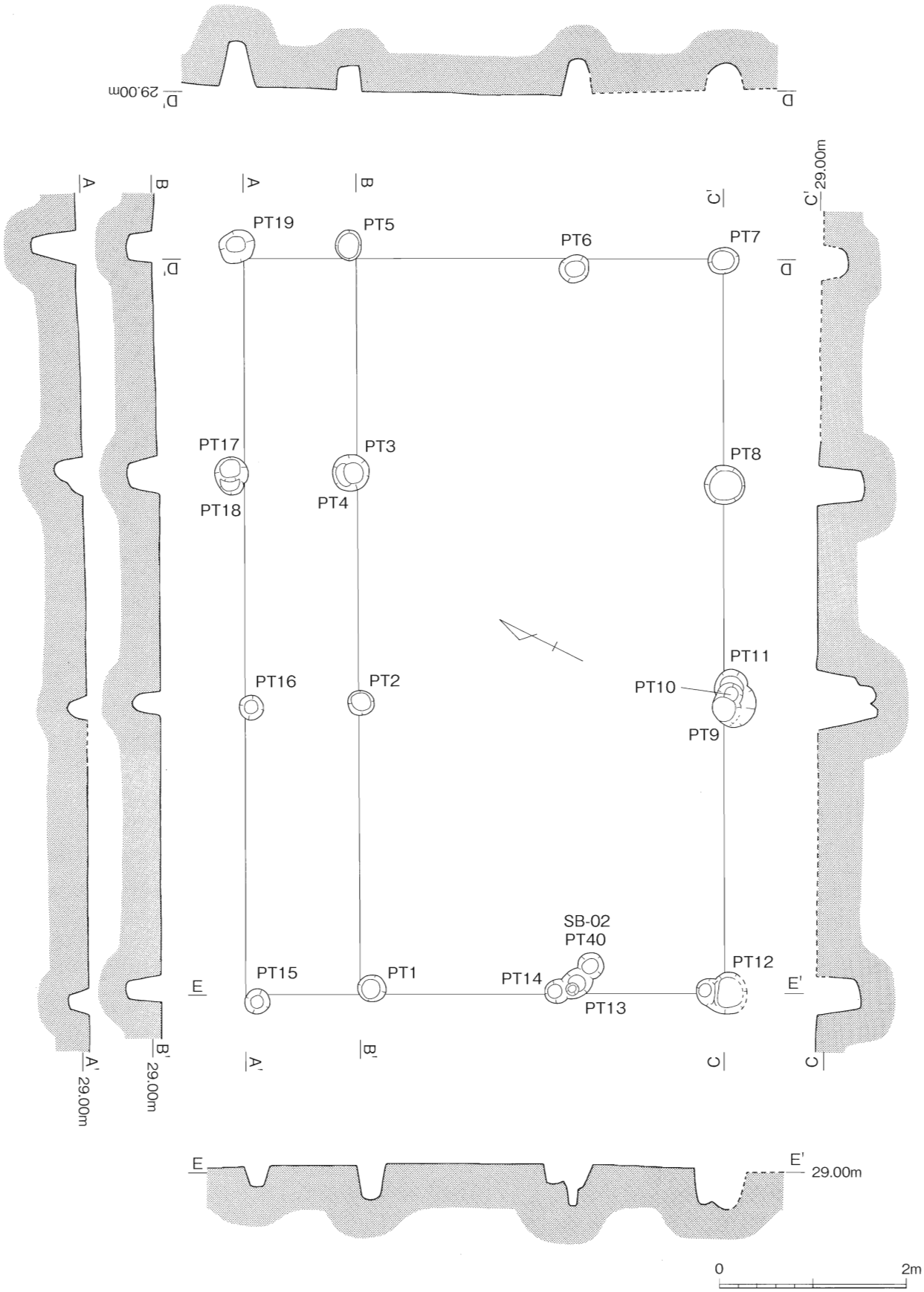
SB－01ピット内出土遺物（第５図１～３）

１は高台をもつ土師質土器底部の破片である。径の復元は小片のため不正確であるが、高台径６cm前後のものである。PT３・４より出土した。２は銭貨である。錆化のため判然としないが、1068年初鋳の熙寧元寳と考えられる。銭径2.35mm、銭厚1.30mm、残存重量1.4gを測る。１の土師質土器と同じPT３・４から出土しており、出雲市の渡橋沖遺跡[註2]SB01でみられるような「地鎮め」の跡と思われる。この他、村内の恩部遺跡[註3]T11から検出されたピット内からは銭貨１点が単独で出土している。３は柱根である。劣化が著



第５図　SB－01ピット内出土遺物実測図
（土器1/3・銭貨1/1・柱根1/8）

しく丸太材なのか角材なのか判らない。材質はクリ材であり、表皮は認められなかった。残存長51.3cm、幅9.6cm、厚さ8.5cmを測る。PT12より出土した。



第6図　SB－01実測図（S＝1/60）

2．SB－02（第７図、第10・11表）

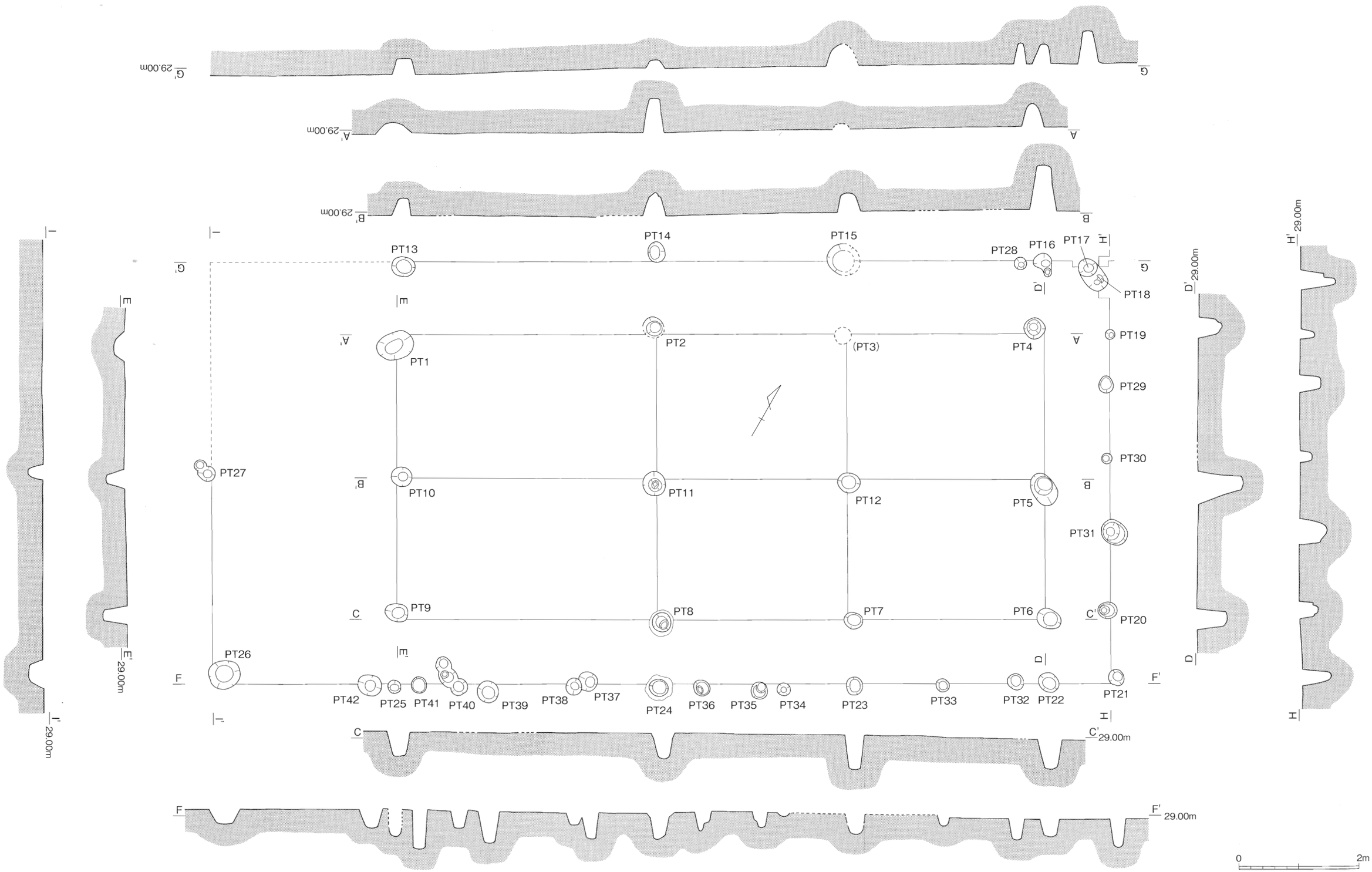
調査区の標高28.75～29.25mを測る位置で検出された総柱の掘立柱建物跡である。梁間２間×桁行３間であり、規模は梁間長4.60mと4.90m、桁行長10.6mと10.86mである。今回検出された建物跡の中では最大のものである。柱間距離は梁間が2.20～2.63m、桁行が3.22～4.40mを測る。四方に庇か縁状の張り出しが付設されているものとして復元したが、南西側の張り出し部分のピットまでが他に比べると非常に長く3.25mを測る。この張り出し部分は別の建物跡のピットとする意見もあり、３方に張り出しをもつ建物跡の可能性もある。南西側以外の３方の張り出しは1.00～1.32mの位置に巡る。ピットの規模は、建物部分ではPT７が最小で29×32cm、PT１が最大で47×63cm、深さはPT１が最も浅く20.7cm、PT５が最も深く76.5cmを測る。張り出し部分のピット（PT13～27）はPT19が最小で16×17cm、PT26が最大で49×53cm、深さはPT14が最も浅く14.5cm、PT18が最も深く56.8cmを測る。SB－01・04と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。主軸はN－59.5°－Eであり、SB－01・03とほぼ同方向である。遺物としてはピット内から土師器36点、須恵器17点、土師質土器３点、鉄滓２点、柱根１本が出土した。

SB－02ピット内出土遺物（第９図４～８）　４は須恵器坏である。体部は口縁部に向け内湾気味に立ち上がり、口縁端部外面に沈線を施し、括れ部を作り出す。口径12.3cmを測る。PT15より出土した。５は須恵器壷底部の破片と考えられる。平坦な底部より体部が斜上方へ向け直線的に立ち上がっている。残存する外底面には糸切り痕は観察できない。底径13.5cmを測る。４と同じPT15より出土した。６・７は鉄滓である。６は鉄分が多く含まれているようで磁石に付着する。長さ3.2cm、幅2.4cm、厚さ1.6cm、重量17.3gを測る。PT１より出土した。７は磁石に付着しないものであり、表面には砂粒の付着が認められる。長さ3.4cm、幅2.2cm、厚さ1.65cm、重量9.5gを測る。PT２より出土した。８は心材が用いられた柱根である。幅の広い方が下になり、ピットの中央に据え置かれた状態で出土した。底部には明瞭な加工痕が残るが、側面は劣化が著しく丸太材なのか角材なのか判らない。材質はクリ材であり、表皮は認められなかった。残存長23.7cm、幅9.8cm、厚さ8.4cmを測る。張り出し部と考えられるPT41より出土した。

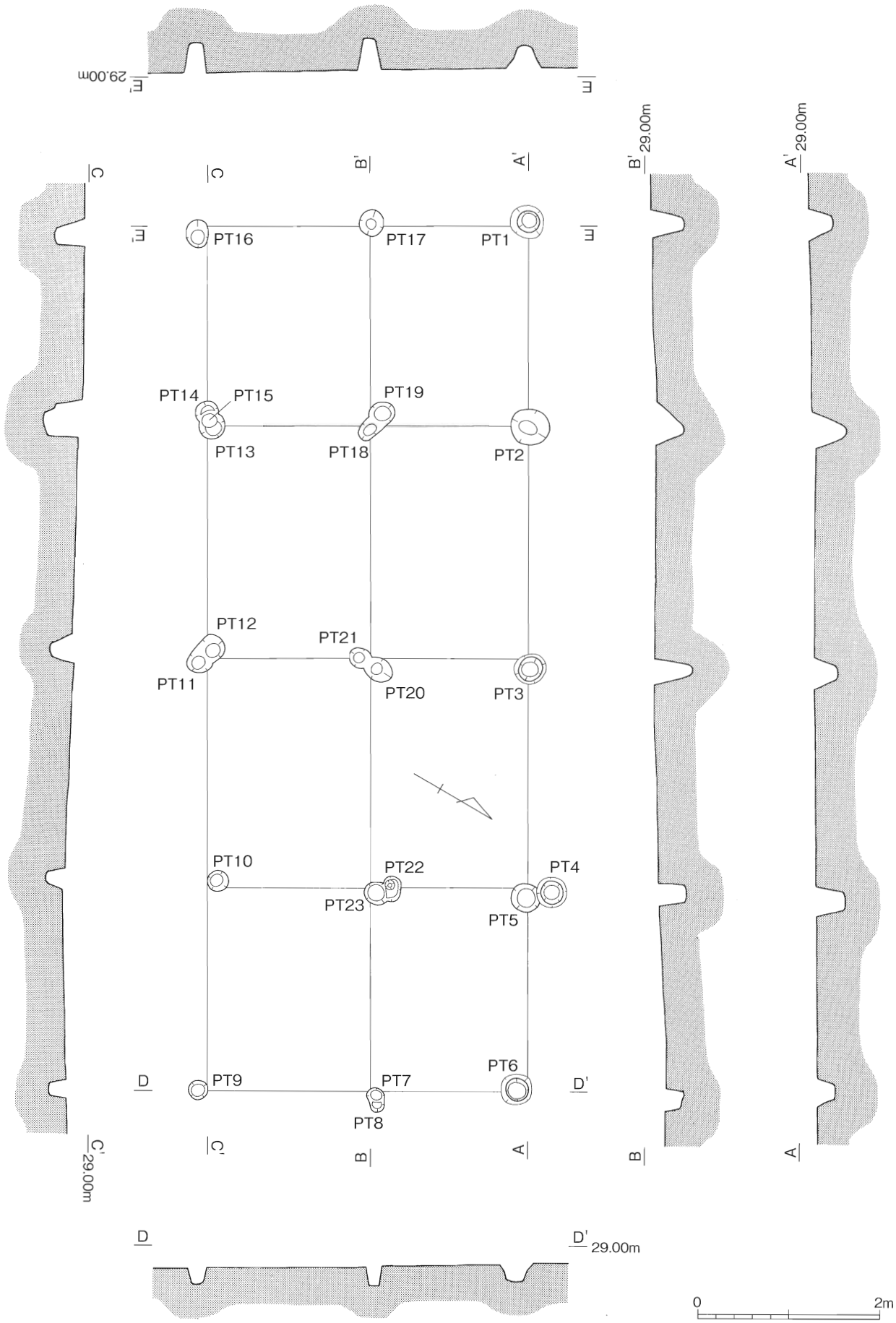
3．SB－03（第８図、第12・13表）

調査区の標高28.50～29.00mを測る場所で検出された総柱の掘立柱建物跡である。梁間２間×桁行４間であり、15個のピットにより建物が構築されている。このうちの７個以上が切り合いをもつピットであるが、各ピット間の新旧関係は不明である。建て替えが行われたと考えられるが、同軸の建物跡が重なっている可能性もある。２間×４間として復元した場合の規模は梁間長3.50mと3.64m、桁行長9.42mと9.58mである。柱間距離は梁間が1.50～1.97m、桁行が1.95～2.80mを測る。ピットの規模はPT８が最小で直径14cm、PT２が最大で39×42cm、深さはPT８・９が最も浅く17.3cm、PT20が最も深く42.3cmを測る。主軸はSB－01と同じN－60.5°－Eであり、SB－02ともほぼ同方向である。遺物としてはピット内から土師器11点、須恵器２点、土師質土器８点が出土した。いずれも細片のため、図化できたのは土師質土器１点だけである。

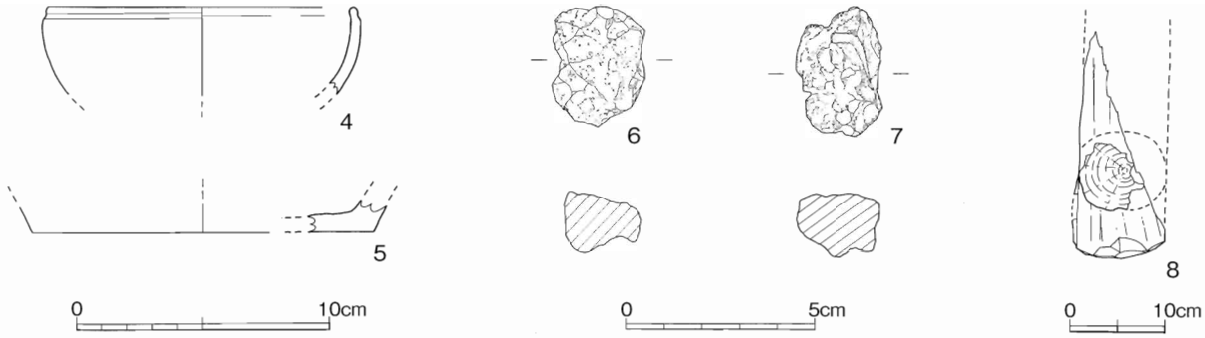
SB－03ピット内出土遺物（第10図９）　９は土師質土器口縁部の破片である。逆「ハ」の字状に立ち上がるものであり、口縁部を若干厚く仕上げ、端部は丸くおさめる。小片のため径の復元は不正確であるが、口径12cm前後のものである。PT23より出土した。



第７図　SB－02実測図（S＝1/60）



第８図　SB－03実測図（S＝1/60）



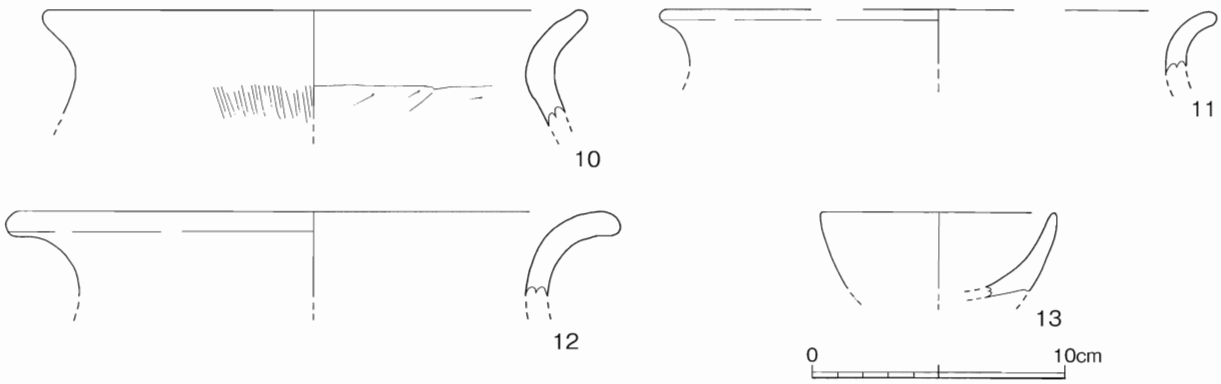
第９図　SB－02ピット内出土遺物実測図（土器1/3・鉄滓1/2・柱根1/8）

第10図　SB－03ピット内出土遺物実測図（S＝1/3）

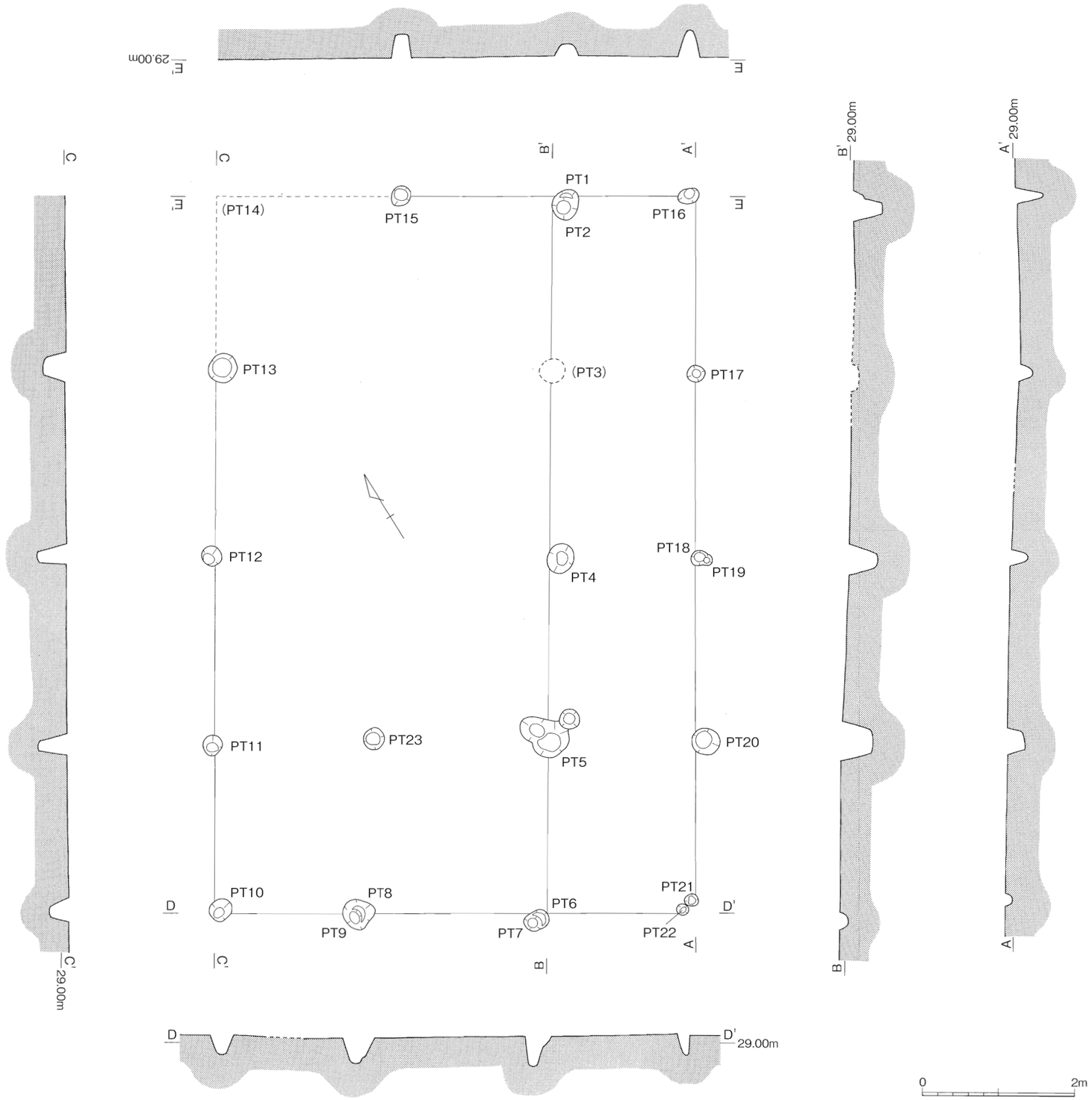
４．SB－04（第12図、第14・15表）

調査区の標高28.75～29.25mを測る場所で検出された掘立柱建物跡である。梁間２間、桁行４間として復元したが、梁間２間、桁行３間としても復元できる。２間×４間として復元した場合の規模は梁間長4.12～4.24m、桁行長9.32～9.50mである。柱間距離は梁間が1.76～2.46m、桁行が2.17～2.50mを測る。南東側の桁行には1.61～2.10mの幅で、庇か縁状の張り出しが付設されている。建物部分のピットの規模はPT７が最小で22×23cm、PT５が最大で48cm、深さはPT６が最も浅く14.2cm、PT５が最も深く43.7cmを測る。張り出し部分のピットはPT22が最小で14×15cm、PT20が最大で34×38cm、深さはPT21が最も浅く8.9cm、PT16が最も深く36.6cmを測る。SB－01・02と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。遺物としてはピット内から土師器39点、須恵器９点、土師質土器16点が出土した。主軸はN－33°－Eである。

SB－04ピット内出土遺物（第11図10～13）　10・11は口縁が外反する土師器甕である。10は口縁端部内面が若干窪む。口径21.5cmを測る。PT９より出土した。11は小片のため口径は不明である。PT４より出土した。12は強く外反する口縁をもち、やや厚手であることから甕・甑・竈の類と考えられる。口径は24.4cmを測る。11と同じPT４より出土した。13は土師質土器口縁の破片である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部の剥離痕から台付きのものと考えられる。小片のため口径の復元は不正確であるが、９cm前後のものである。PT２より出土した。



第11図　SB－04ピット内出土遺物実測図（S＝1/3）



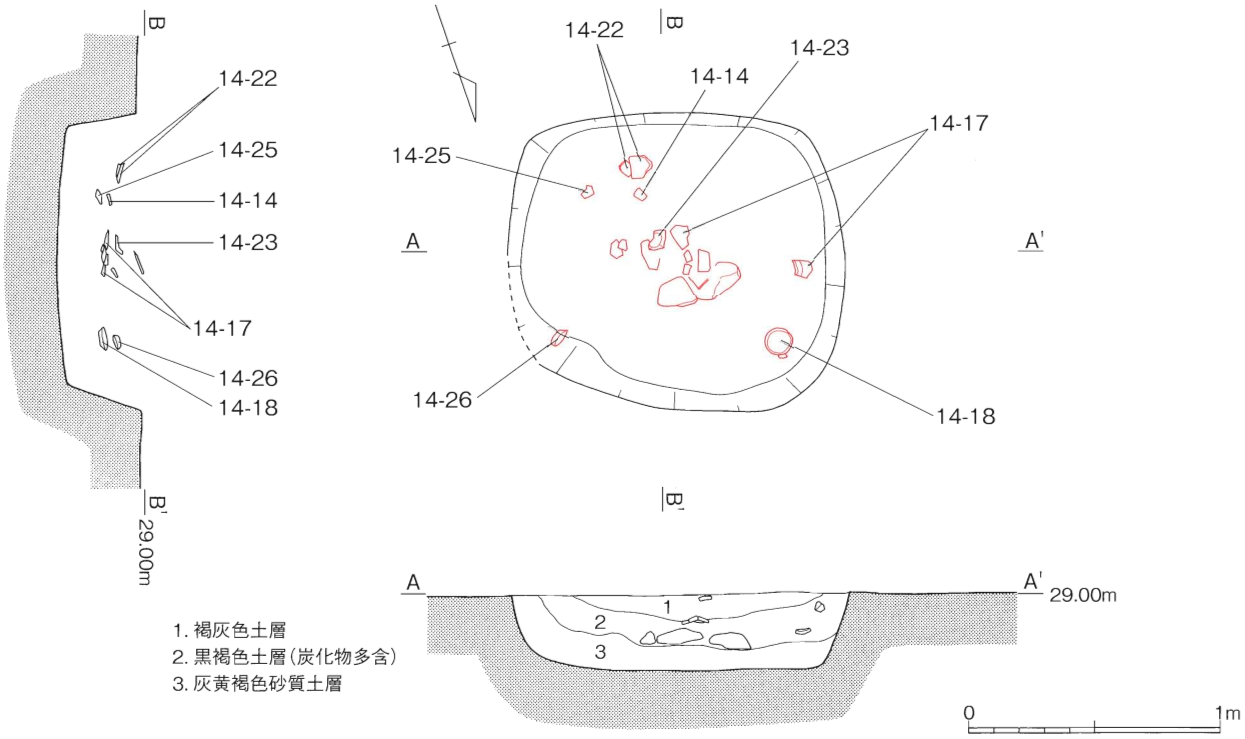
第12図　SB－04実測図（S＝1/60）

5．SK－01（第13図）

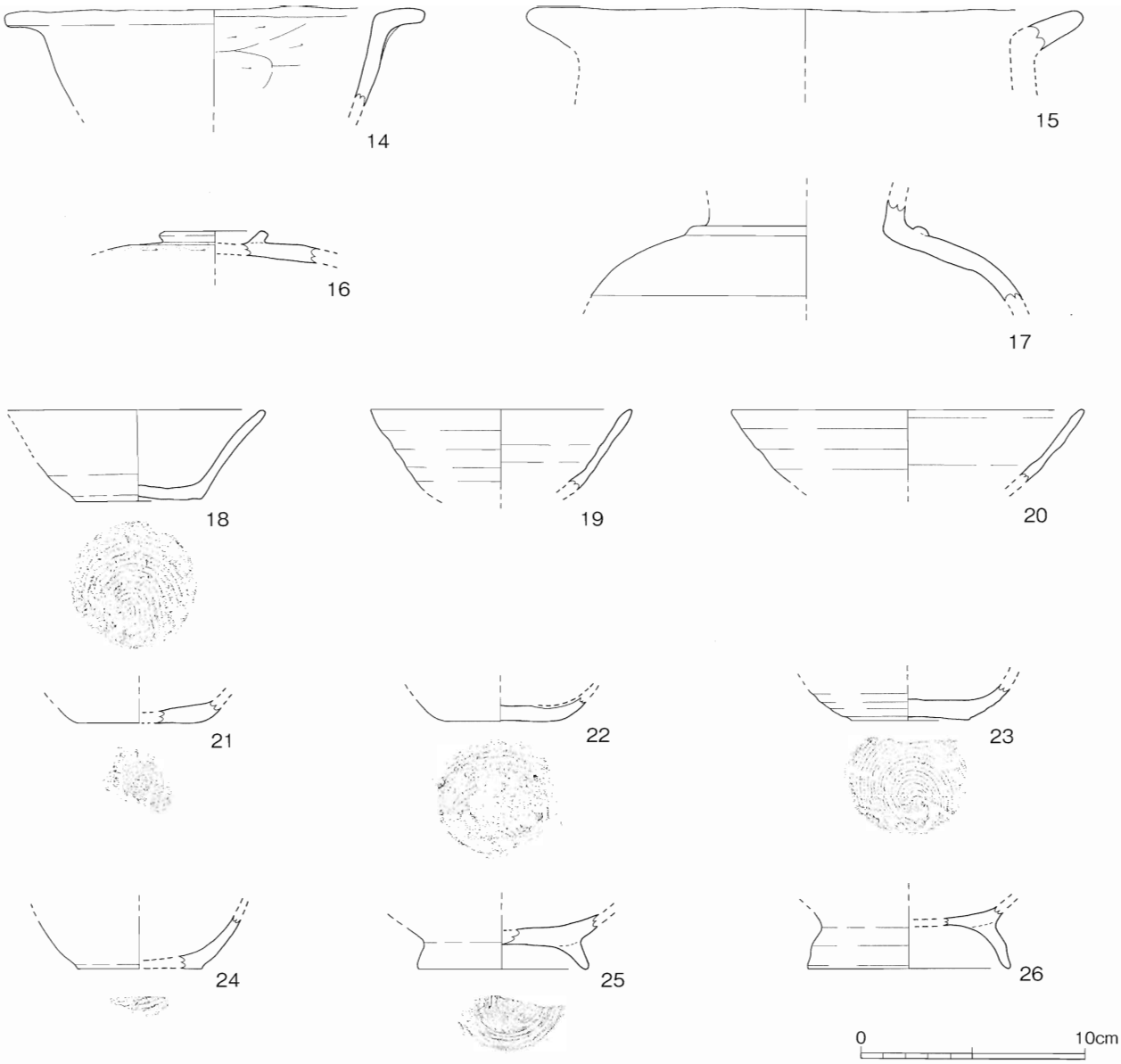
B－５区の標高28.75～29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面はやや形の崩れた隅丸方形を呈し、現状での規模は長辺133cm、短辺118cm、深さ最大35.0cmを測る。壁面は平坦な底部より斜め上方に向け真っ直ぐに立ち上がっている。遺物としては、第２層の黒褐色土層より土師器36点、須恵器９点、土師質土器52点が出土している。

土坑の時期は、出土した土師質土器が10世紀から12世紀前半[註4]にかけての特徴を持っていることより平安時代と考えられるが、詳細な時期は不明と言わざるを得ない。

SK－01出土遺物（第14図14～26） 14は土師器の鍋である。胴部の張り出しが口縁以上にならないものであり、口縁部は強く外反し水平方向に伸びる。体部内面には横方向のヘラケズリが施されている。外面全体に炭化物と煤が付着しており、煮炊きに使用されたと考えられる。15は土師器の鍋か甕であり、外面には炭化物の付着が認められる。厚さの不均一な粗製品であり、歪みのため径の復元は不正確であるが、25cm前後のものである。16は輪状つまみをもつ須恵器の坏蓋であり、つまみ部径4.8cmを測る。17は須恵器の壷である。頸部下に突帯が巡り、肩部には沈線が施されている。調整は内外面回転ナデである。18～26は土師質土器である。18は完形に復元できた坏であり、口縁が残存している部分は体部が反り気味に立ち上がるプロポーションをもつが、他の部分は体部下半に弱い膨らみをもつ。器面は回転ナデによる凸凹痕が目立たず、平滑である。法量は口径11.5cm、底径5.6cm、器高4.1cmを測る。第20図41や第36図137～139と同様の形態になるものと考える。19・20は口縁の破片であり、内外面に回転ナデによる凸凹痕が顕著に残る。口径は19が11.6cm、20が15.7cmを測る。21～24は無高台の底部片である。底径は21が5.3cm、22が5.4cm、23が5.4cm、24が5.5cmを測る。いずれも切り離しは糸切りと考えられるが、風化のためはっきりしないものもある。25・26は高台をもつ底部の破片である。高台径は25が7.6cm、26は9.0cmを測る。底部の切り離しは風化のため判然としないが、25は糸切りと考えられる。



第13図　SK－01実測図（S＝1/30）

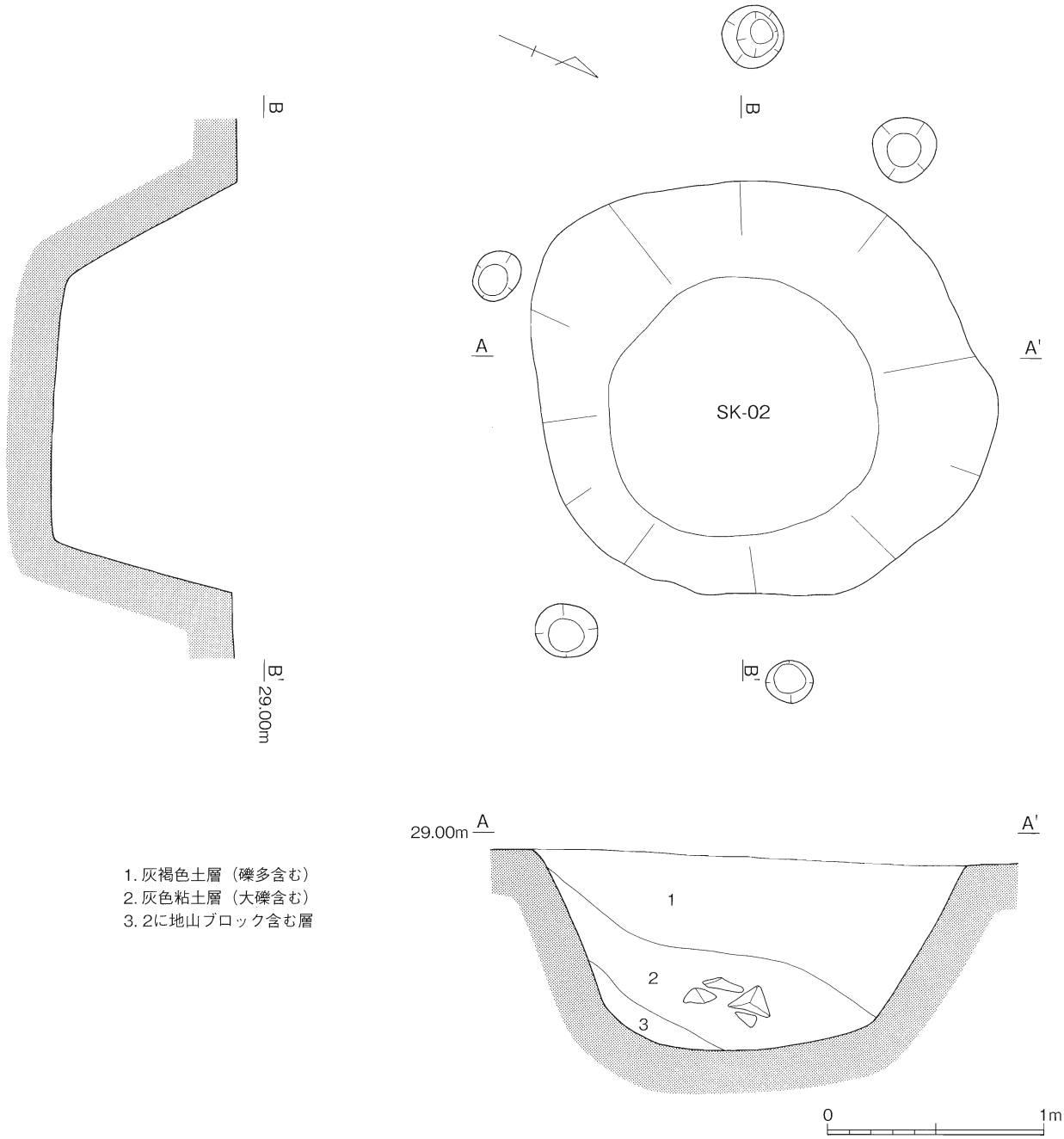


第14図　SK－01出土遺物実測図（S＝1/3）

6．SK－02（第15図）

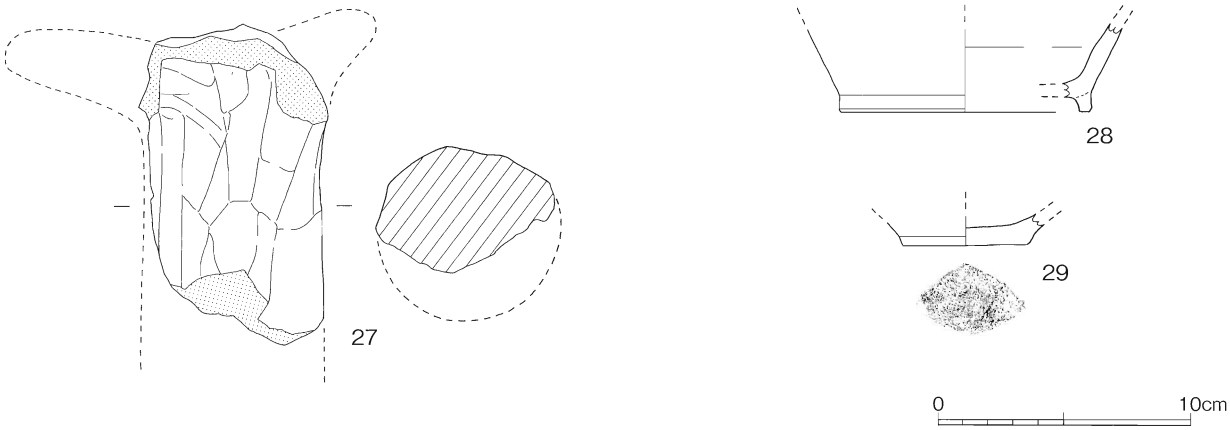
C－5区の標高28.75～29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は歪な円形を呈し、現状での規模は上縁部径190～215cm、底部径120～123cm、深さ最大88.5cmを測る。中央部が浅く窪んだ底部より壁面は斜め上方に向け真っ直ぐに立ち上がっている。この土坑を取り囲むように5つの小ピットが検出されている。規模も揃っており、埋土も灰褐色土層であった。何らかの上屋を想定することも可能である。小ピットの規模は長軸径で22～30cm、深さ最大13.4～46.5cm、柱穴間の距離は85～165cmを測る。SK－02出土の遺物としては第1層の灰褐色土層より土師器6点、須恵器13点、土師質土器4点が出土した。

SK－02出土遺物（第16図27～29）　27は土製支脚である。三方向に突起をもつタイプのものであり、強い縦方向のナデにより仕上げられている。28は須恵器坏底部の破片である。高台が底部の外縁につき、体部は斜め上方に向け立ち上がる。高台径10.0cmを測る。29は土師質土器底部の破片である。底部外面は低い高台状を呈しており、底径は5.0cmを測る。



1. 灰褐色土層（礫多含む）
2. 灰色粘土層（大礫含む）
3. 2に地山ブロック含む層

第15図　SK－02実測図（S＝1/30）

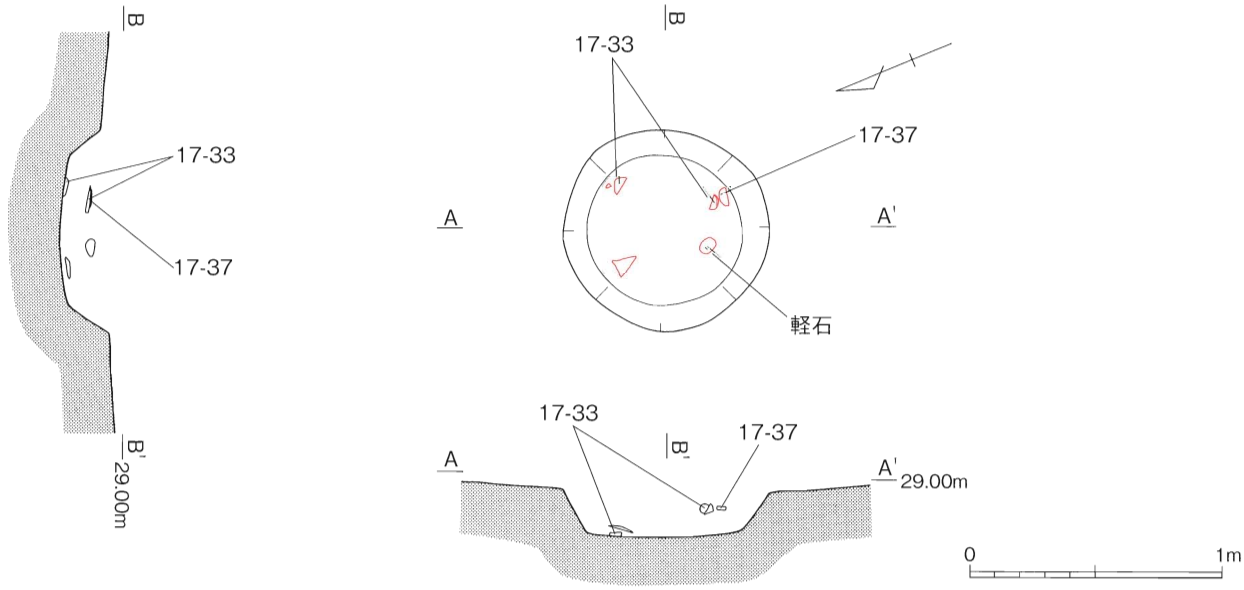


第16図　SK－02出土遺物実測図（S＝1/3）

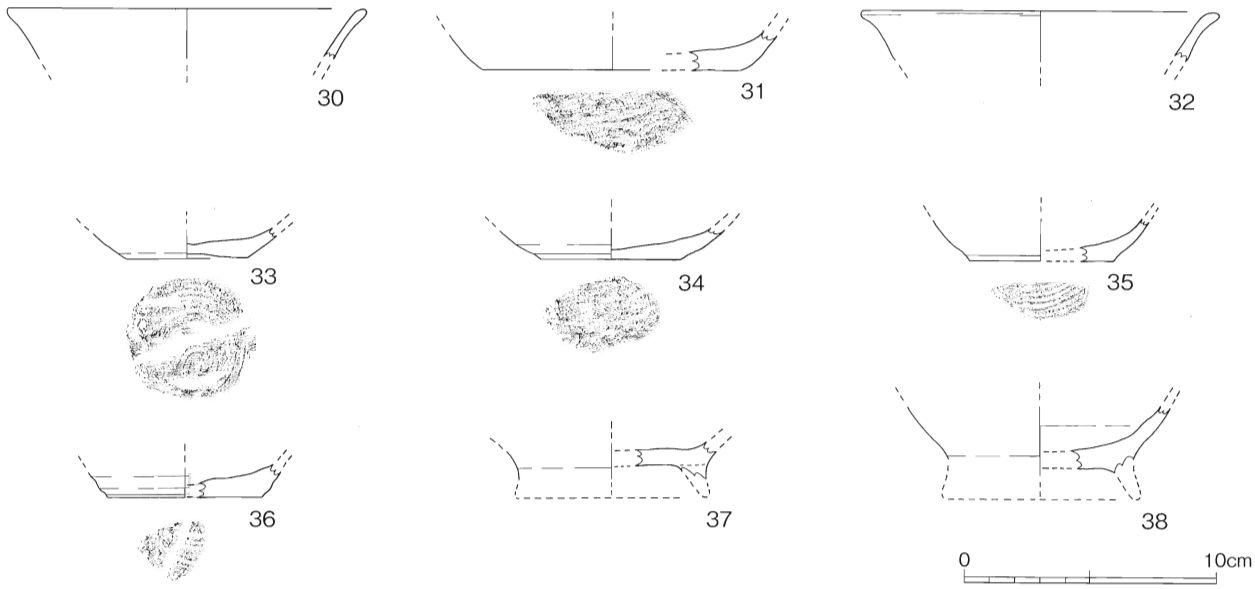
7．SK－03（第17図）

C－４区の標高28.75～29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は円形を呈し、現状での規模は上縁部径80cm、底部径60cm、深さ最大20.7cmを測る。SK－04と切り合っており、新旧関係はSK－03（新）－SK－04（古）である。遺物は土師器24点、須恵器６点、土師質土器23点の他、明瞭な加工痕はないが、他地域から持ち込まれたと考えられる軽石１点が出土した。

SK－03出土遺物（第18図30～38） 30・31は須恵器坏である。30は逆「ハ」の字状に伸びる体部をもち、口縁部で外反する。口径14.2cmを測る。31は無高台の底部片である。小片のため径の復元は不正確であるが、10cm前後のものである。底部外面には糸切りの痕跡が観察できる。32～38は土師質土器である。32は外反する口縁部の破片であり、口径14.2cmを測る。33～36は無高台の底部片である。底径は33が4.8cm、34が5.4cm、35が5.6cm、36が6.0cmを測る。いずれも切り離しは糸切りと考えられるが、風化のためはっきりしないものもある。37・38は高台をもつ底部の破片である。高台先端を欠いており、高台径は不明である。



第17図　SK－03実測図（S＝1/30）



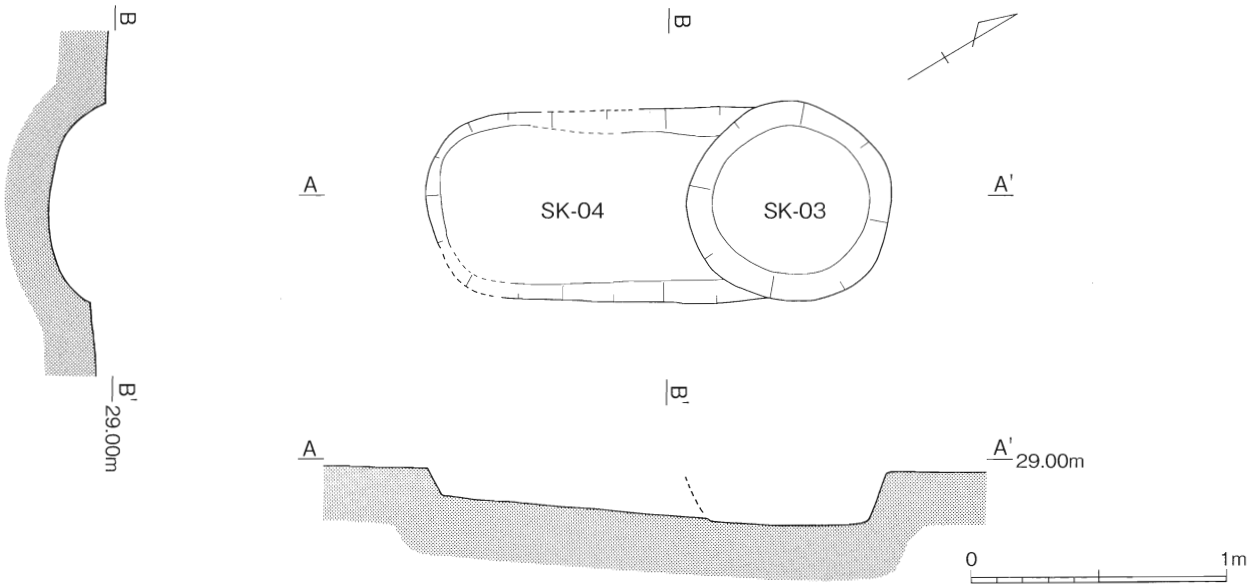
第18図　SK－03出土遺物実測図（S＝1/3）

8．SK－04（第19図）

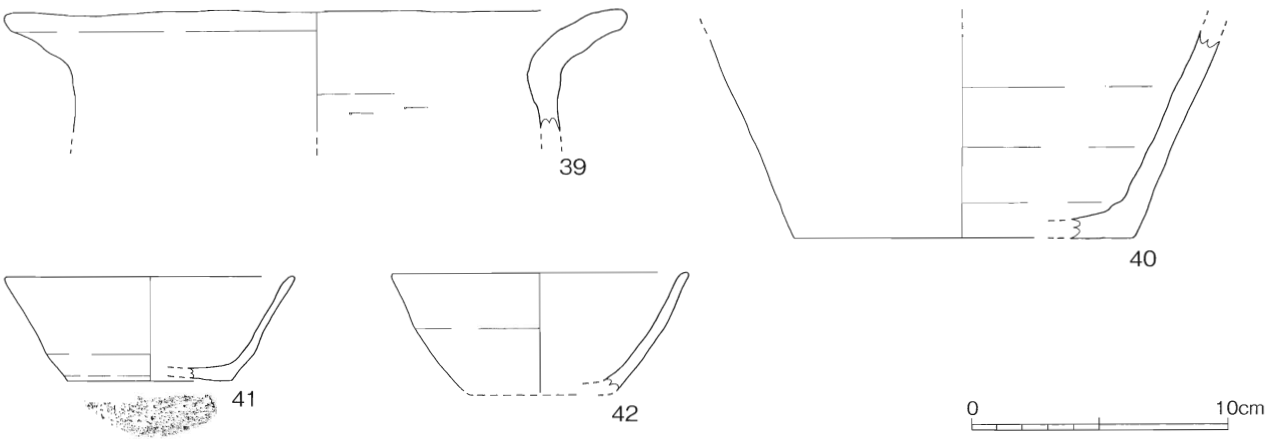
C－３・４区の標高28.75～29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は長方形を呈し、現状での規模は長辺148cm以上、短辺78cm、深さ最大20.7cmを測る。SK－03と切り合いが認められ、新旧関係はSK－03（新）－SK－04（古）である。また、位置関係からするとSB－02・PT３とSB－04・PT３と切り合っているようだが、現地調査時にピットを検出することはできなかった。遺物としては、土師器28点、須恵器８点、土師質土器10点が出土している。

土坑の時期は、出土した土師質土器が10世紀から12世紀前半[註5]にかけての特徴を持っていることより平安時代と考えられるが、詳細な時期は不明と言わざるを得ない。

SK－04出土遺物（第20図39～42） 39は土師器の鍋であり、強く外反する厚手の口縁をもつ。厚みが不均一な粗製品であり、径の復元は不正確であるが、24cm前後のものである。40は平底を有する須恵器の壷である。平坦な底部より体部が斜上方に向けて真っ直ぐに伸びる。底部外面はナデ調整である。41・42は土師質土器である。41は無高台の坏であり、上げ底気味の底部より体部が逆「ハ」の字状に立ち上がり、体部下半に弱い膨らみをもつ。法量は口径11.4cm、底径5.6cm、器高4.1cmを測る。42も無高台の坏と考えられる。内湾気味に立ち上がる体部上半に弱い膨らみをもち、口縁端部は若干外反する。口径11.6cmを測る。



第19図　SK－04実測図（S＝1/30）

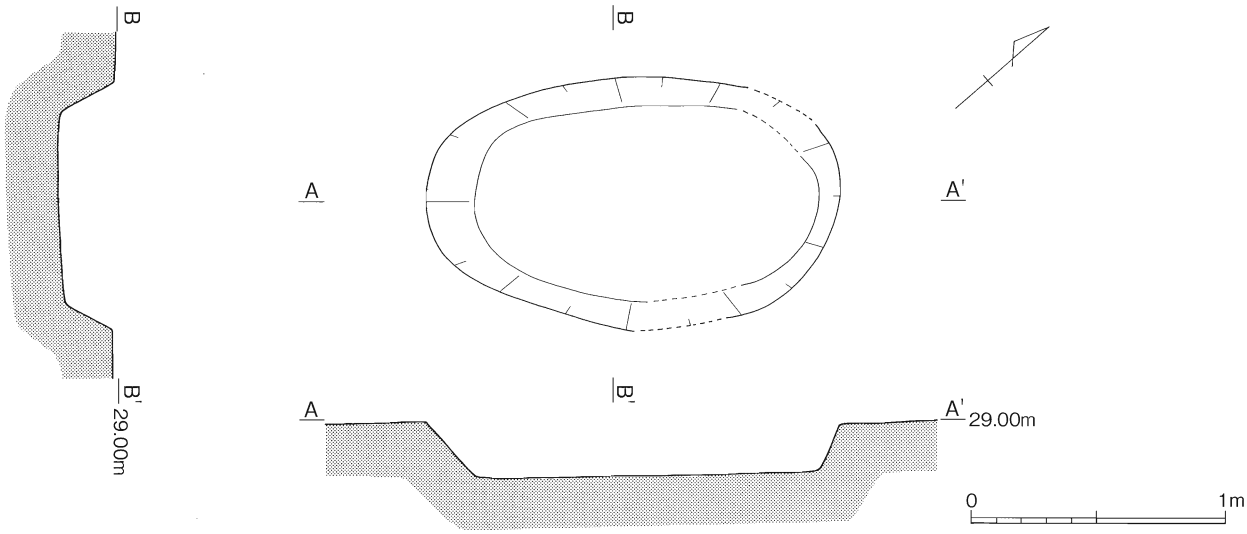


第20図　SK－04出土遺物実測図（S＝1/3）

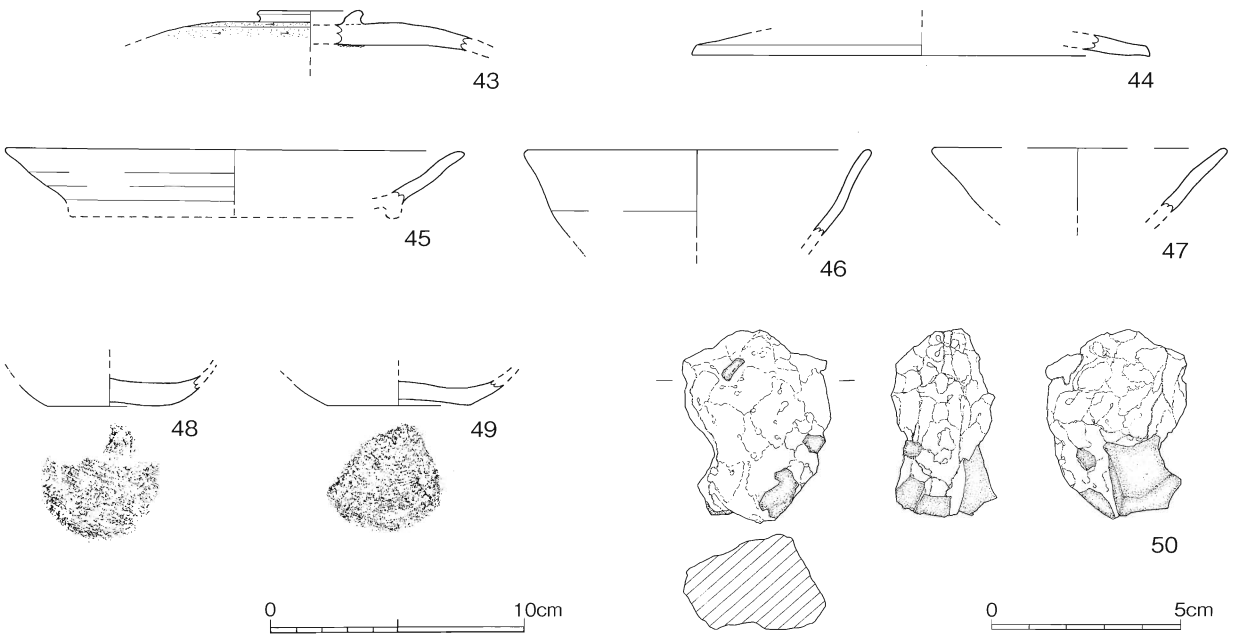
9．SK－05（第21図）

C－３区の標高28.75～29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は楕円形を呈し、現状での規模は長軸162cm、短軸98cm、深さ最大20.9cmを測る。遺物としては、土師器40点、須恵器13点、土師質土器44点、鉄滓１点が出土している。

SK－05出土遺物（第22図43～50） 43～45は須恵器である。43は輪状つまみをもつ坏蓋の破片であり、つまみ部径4.1cmを測る。44は坏蓋口縁部の破片であり、端部が僅かに下方に引き出されている。口径18.0cmを測る。45は皿である。逆「ハ」の字状に大きく開く体部をもち、口縁部で緩く外反する。底部外面には、高台が剥離した痕跡が残る。口径18.2cmを測る。46～49は土師質土器である。46は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。口径13.6cmを測る。47は先端が若干外方に折り曲げられている口縁部の破片。小片のため径は復元できなかった。48・49は無高台の底部片である。底部の切り離しは糸切りであり、底径は48が4.8cm、49が5.6cmを測る。50は鉄滓である。磁石には付着しない。重量50.5gを測る。



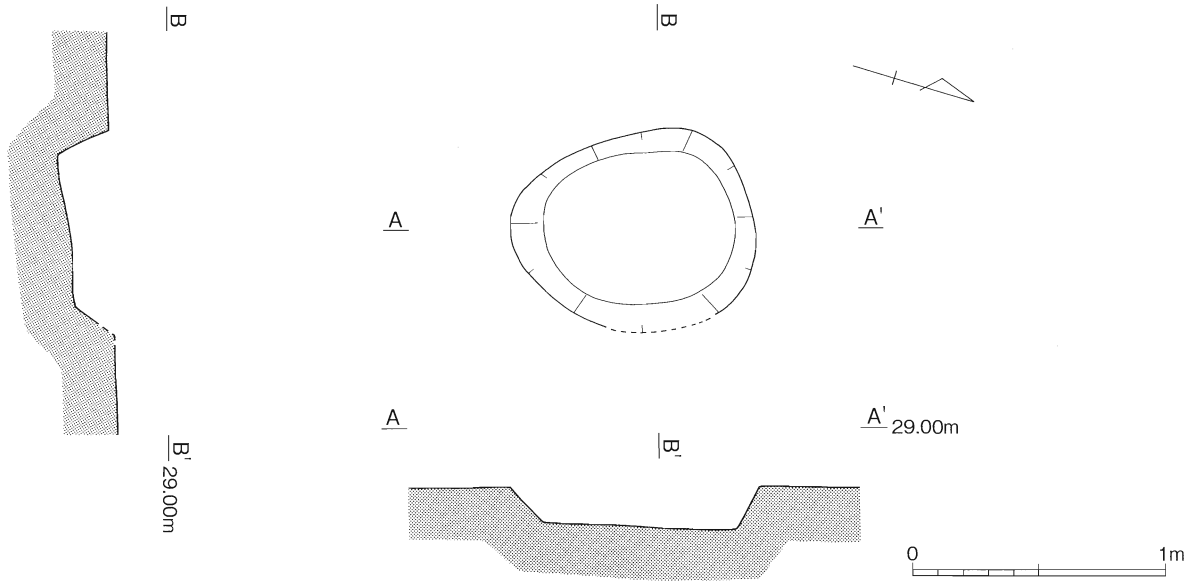
第21図　SK－05実測図（S＝1/30）



第22図　SK－05出土遺物実測図（土器1/3・鉄滓1/2）

10. SK－06（第23図）

B・C－７区の標高28.75～29.00mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は形の崩れた楕円形を呈し、現状での規模は上縁部長軸97cm、短軸約78cm、深さ最大15.0cmを測る。遺物は出土していない。



第23図　SK－06実測図（S＝1/30）

11. ピット内出土遺物（第24図51～60、第16表）

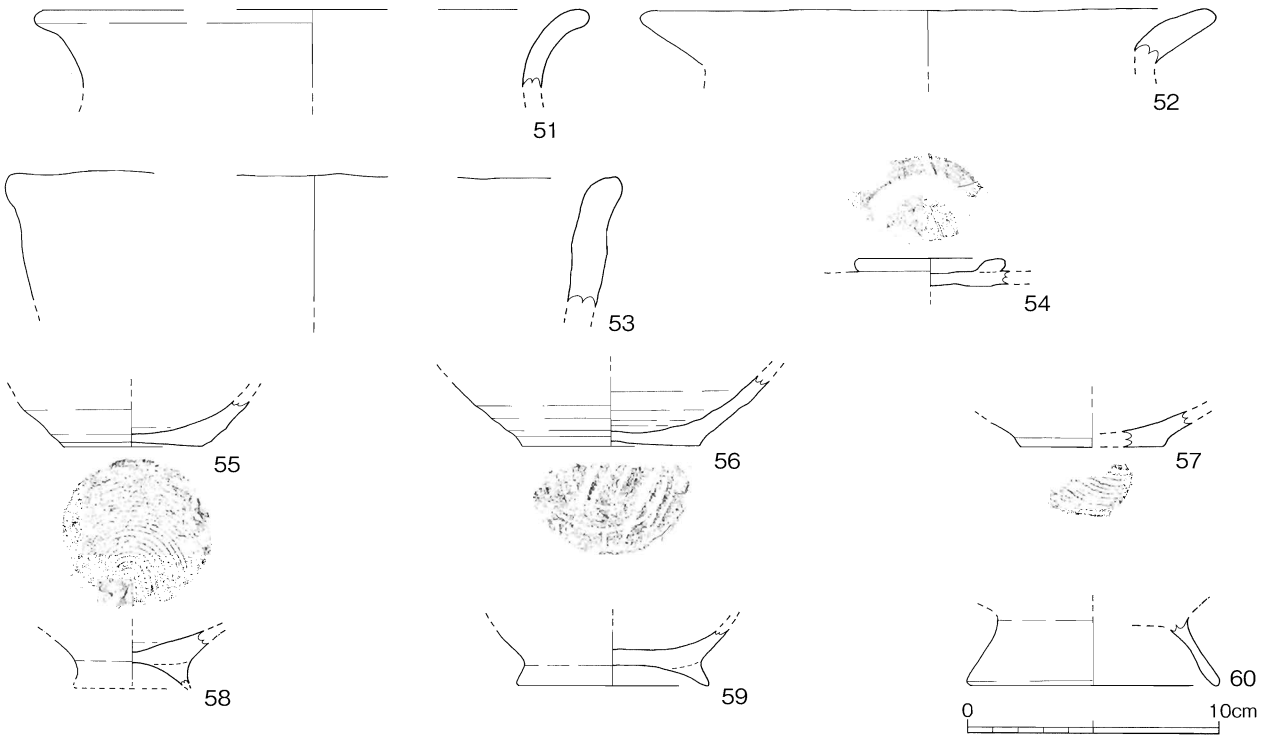
第１遺構面からは、掘立柱建物跡を復元することができなかったピットが138個見つかっている。この内39個のピット内から遺物が出土しており、ここではこれらのピット内から出土した遺物を取り扱う。出土遺物の内訳は土師器68点、須恵器13点、土師質土器52点である。

51～53は土師器である。51は口縁部が外反するもので、甕・甑・竈の類である。口径は小片のため復元できなかった。B４・５区のP16より出土した。52は口縁部が外方に向け大きく開くものであり、甕か鍋と考えられる。器壁の厚みが不均一な粗製品であり、歪みのため径の復元は不正確であるが、口径23cm前後のものである。外面には炭化物が付着しており、煮炊きに使用されたものと思われる。C４・５区のP19より出土した。53は器種不明品である。胴部は開き気味に立ち上がり、口縁端部付近にアクセントを付け、若干外反する。器壁の厚みが不均一な粗製品であり、小片のため径の復元は困難であるが、25cmを超えそうなものである。C５区のP33より出土した。

54は輪状つまみをもつ須恵器蓋であり、つまみ部径6.0cmを測る。ナデ調整のため判然としないが、つまみ部内に僅かに糸切りの痕跡が確認できる。A・B２区のP１から出土した。

55～60は土師質土器底部の破片である。55～57は無高台のもの、58～60は高台をもつものである。55は内湾気味に立ち上がる体部下半に弱い膨らみをもつ。底径は5.5cmを測り、底部の切り離しには回転糸切りが施されている。C５区のP32から出土した。56は斜め上方へ向け開き気味に立ち上がる体部を持つ。底径は7.0cmを測り、底部の切り離しは糸切りによる。B６区のP35より出土した。57は体部が開き気味に立ち上がるものであり、底径は5.6cmを測る。底部の切り離しには回転糸切りが施されている。53と同じくC５区のP33より出土した。58は高台径が小さなものであり、径は約4.6cmを測る。B・C６区のP36より出土した。59は風化のため判然としないが、高台が

もう少し伸びるものかもしれない。現状での高台径は7.6cmを測る。C４区のP18より出土した。60は「ハ」の字状に広がる高台部の破片である。歪みのため径の復元は不正確であるが、高台径は10cm前後を測るものである。B３区のP９より出土した。

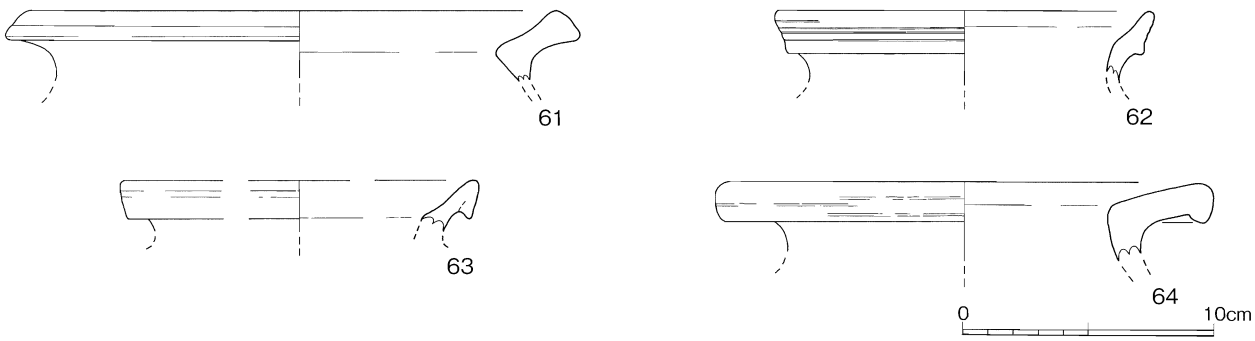


第24図　ピット内出土遺物実測図（S＝1/3）

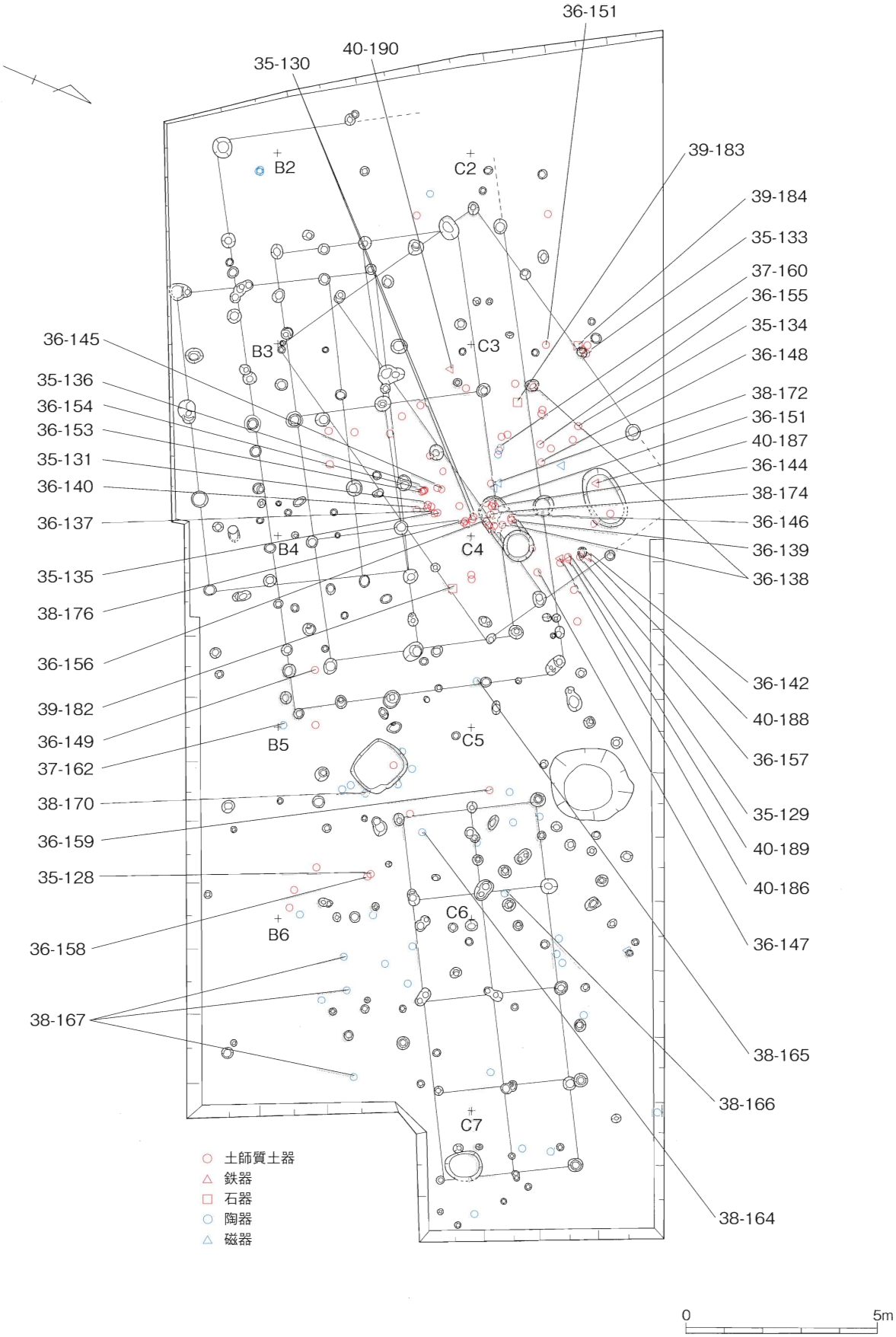
12. 遺構外出土遺物（第25図～第36図）

ここでは、掘立柱建物跡やピット検出面上に水平に堆積した褐灰色土層より出土した遺物を取り扱う。弥生土器も数点出土しているが、量的には土師器、須恵器、土師質土器が主体をなしている。

弥生土器（第25図61～64）　61は口縁部が強く屈曲して開く甕である。端部は若干肥厚され平坦面が形成されており、外面に１条の凹線が観察できる。口径22.4cmを測る。62は口縁部がやや外反気味に立ち上がる甕である。口縁部外面には浅い４条の凹線文が施されている。口径14.8cmを測る。63は甕か器台の破片である。単純口縁に粘土紐を貼り付け口縁段部を形成している。口縁部外面には２条の凹線文が観察できる。小片のため口径は不明である。64は壷、或いは甕と考えられる。口縁部が水平に近く大きく開き、端部は下方に拡張されている。拡張部分には凹線文が施されている。口径19.8cmを測る。時期はいずれも弥生時代後期前半のものと考えられる。

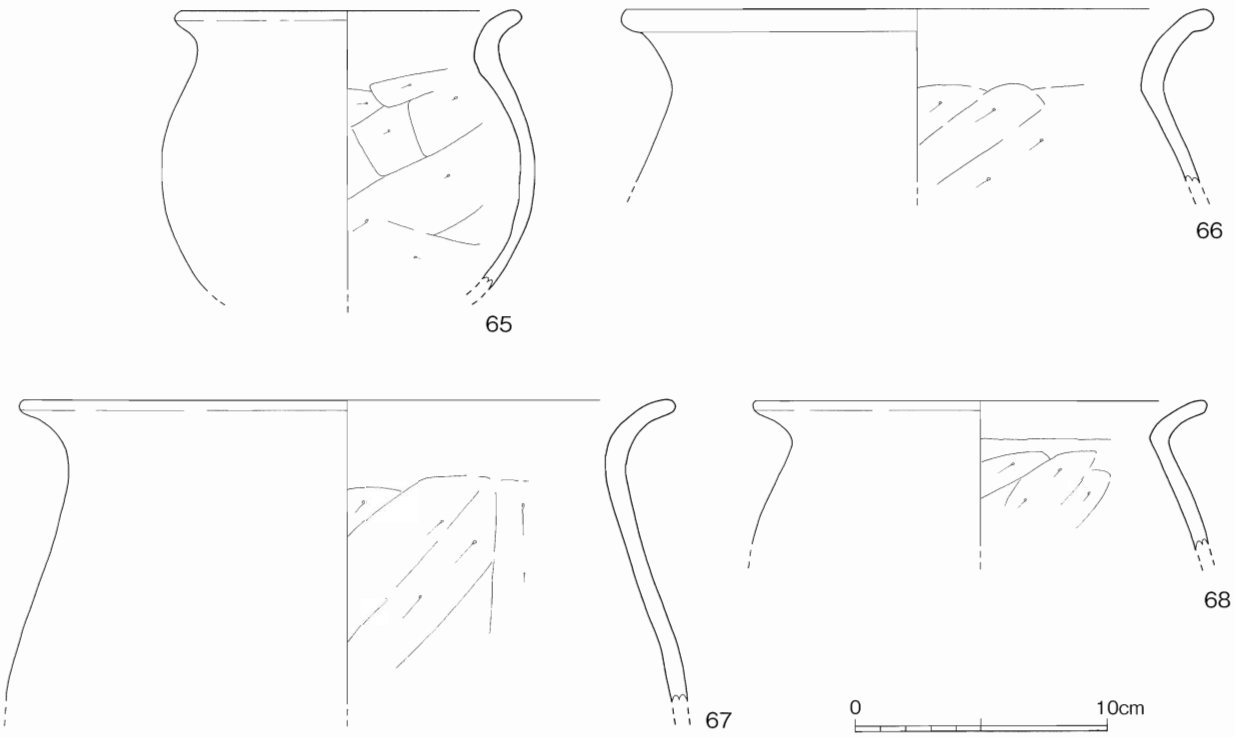


第25図　遺構外出土弥生土器実測図（S＝1/3）

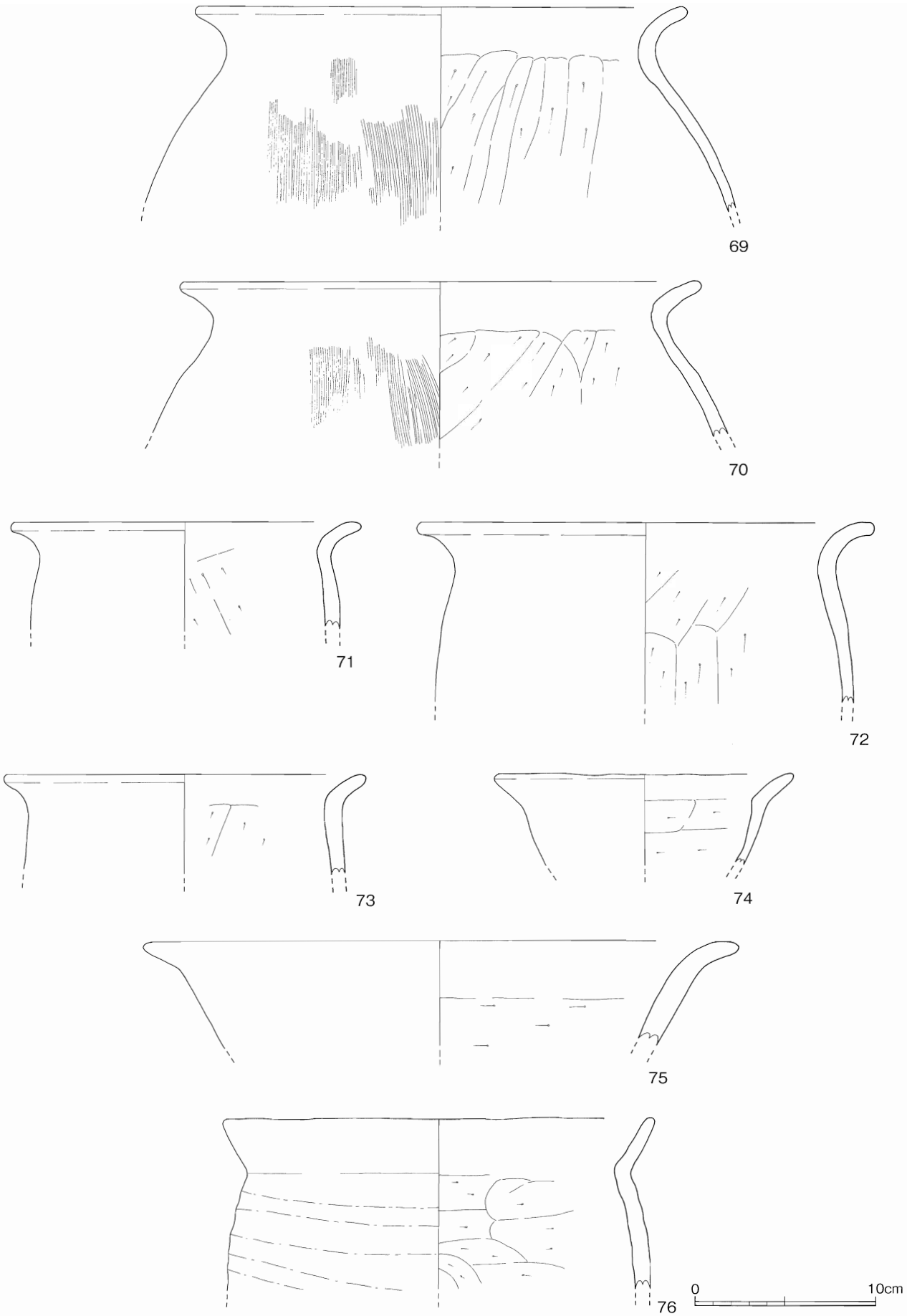


第26図　遺構外出土土師質土器・陶磁器・鍔・石帯出土状況（S＝1/150）

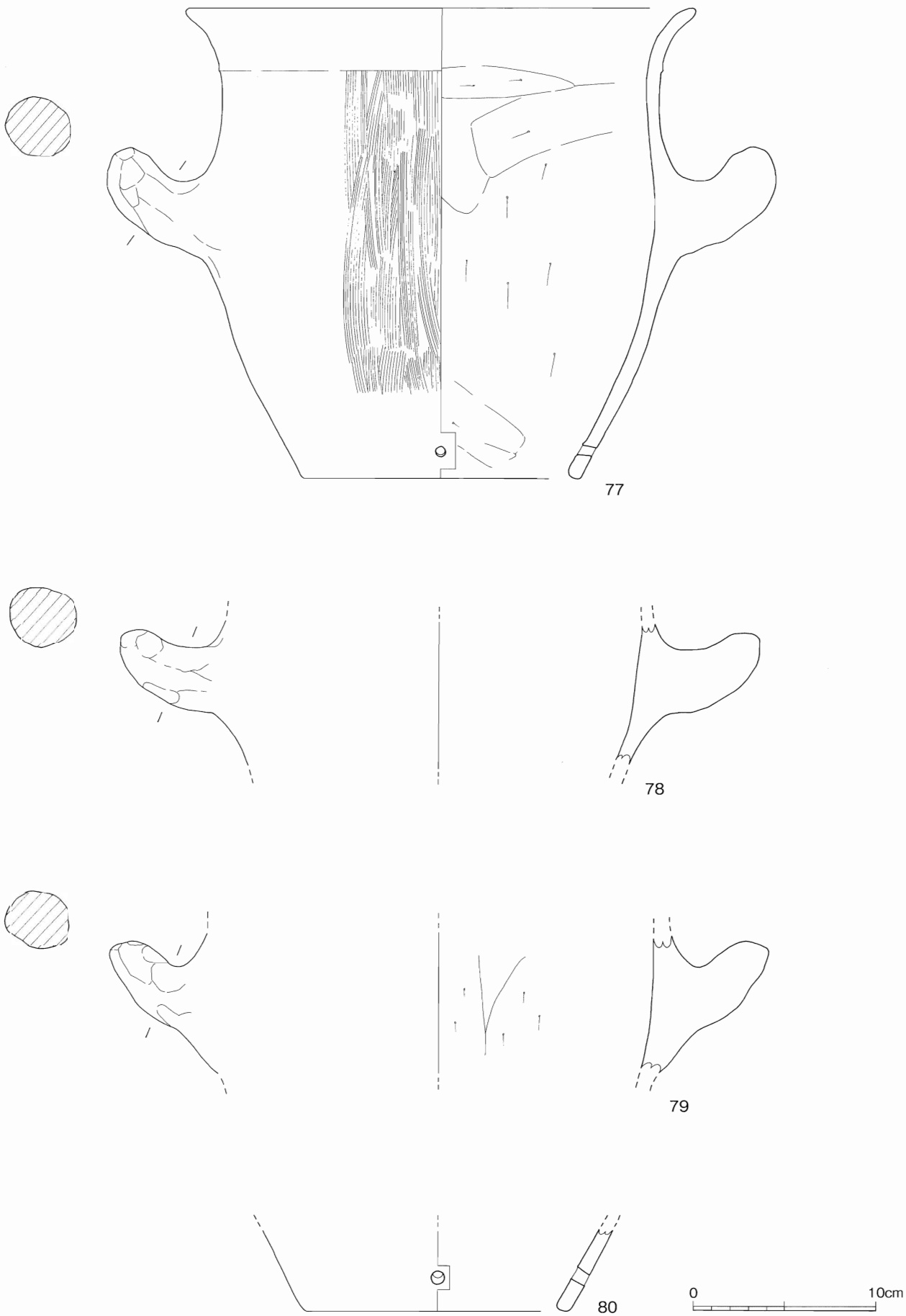
土師器（第27～31図65～93） 65は口径13.7cmを測るやや小型の甕である。球形のプロポーションをもち、口縁部は外反する。66～70は外反する口縁をもち、胴部が口縁以上に張り出す甕である。調整は体部内面に縦方向のヘラケズリが施されている。口径は66が23.4cm、67が26.0cm、68が17.9cm、69が27.0cm、70が28.6cmを測る。69・70の外面には縦方向のハケメが観察できる。71～76は外反する口縁をもち、胴部の張り出しが口縁以上にならないものであり、甕か鍋と考えられる。調整は71～73が体部内面に縦方向のヘラケズリ、74～76が横方向のヘラケズリが施されている。体部外面にハケメは観察できなかった。口径は71が19.0cm、72が24.8cm、73が19.6cm、74が16.4cm前後、75が32.6cm、76が23.4cmを測る。76は厚みの不均一な粗製品であり、作りが雑な印象を受ける。77～80は甑である。77は体部が内湾気味に立ち上がり口縁部で緩く外反する。底部付近には径6mmの貫通孔が認められ、体部中央よりやや上には、牛角状の把手が取り付けられている。調整は口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、体部外面には縦方向のハケメが施されている。法量は口径27.9cm、底径15.1cm、器高25.9cmを測る。78・79は把手部分の破片である。80は底部の破片であり、底に近い位置に径6mmの貫通孔が認められる。底径14.4cmを測る。81～86は土製支脚である。81・82は上端部の破片であり、三又突起タイプのものである。83～86は底部の破片であり、上げ底を呈する。底径は83が12.4cm、84が12.6cm、85が11.0cm、86が11.0cmを測る。87～91は移動式の竈である。87は口縁から胴部、88は底部背面、89～91は焚口外縁部の破片である。87の口径は30.8cmを測る。92は製塩土器である。体部は開き気味に立ち上がり、口縁付近で内湾し、端部を内側に括れさせている。内外面とも丁寧なナデ仕上げである。口縁部が歪なため径の復元は不正確であるが、10cm前後のものである。93は土師質の擂鉢破片である。色調はにぶい黄橙色を呈し、軟質である。3～4mmの間隔で6本の条溝が観察できる。この擂鉢は、14世紀後半以降に当地においても備前焼の擂鉢が流通し始めると次第にその姿を消していく。[註6]



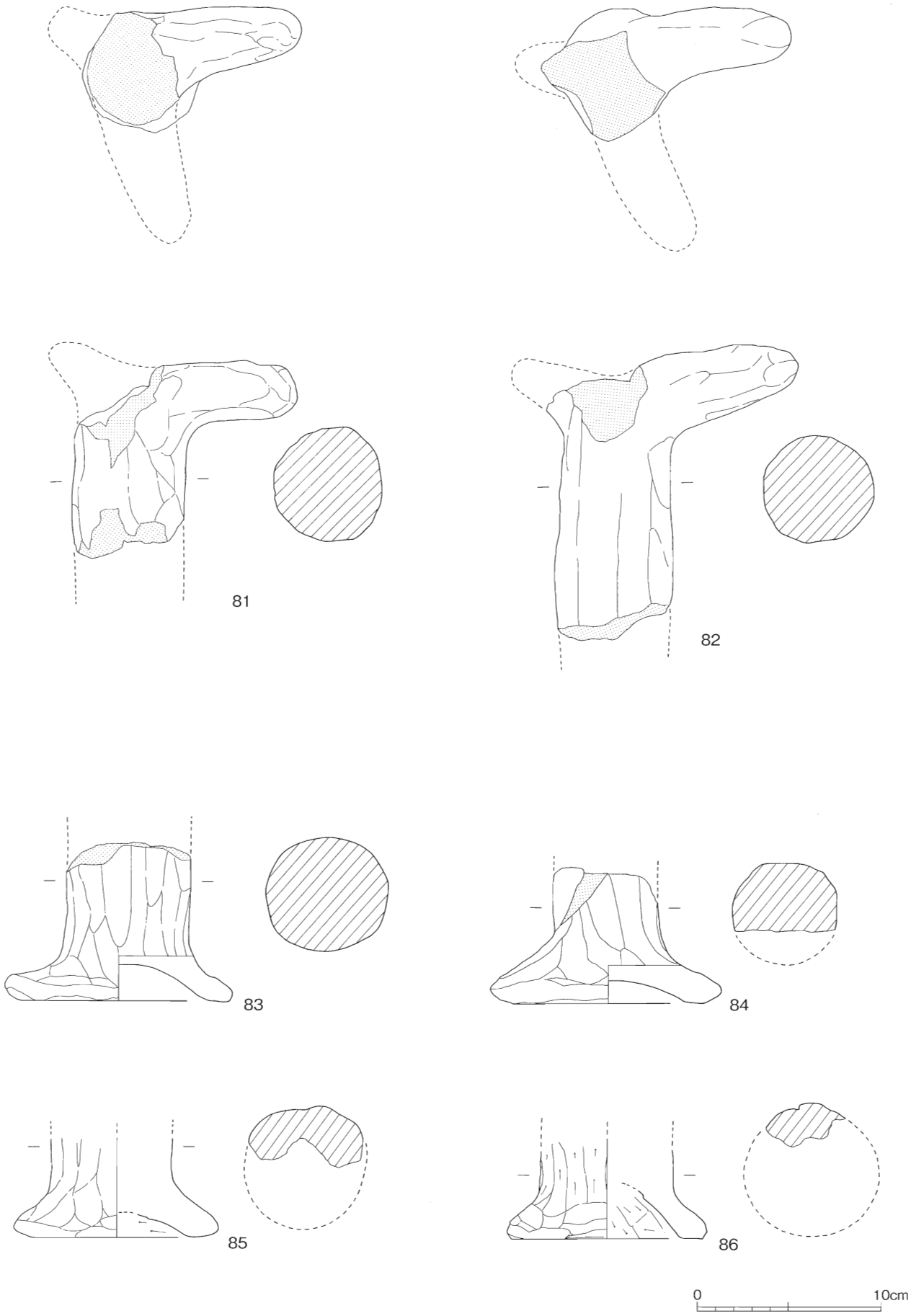
第27図　遺構外出土土師器実測図（S＝1/3）



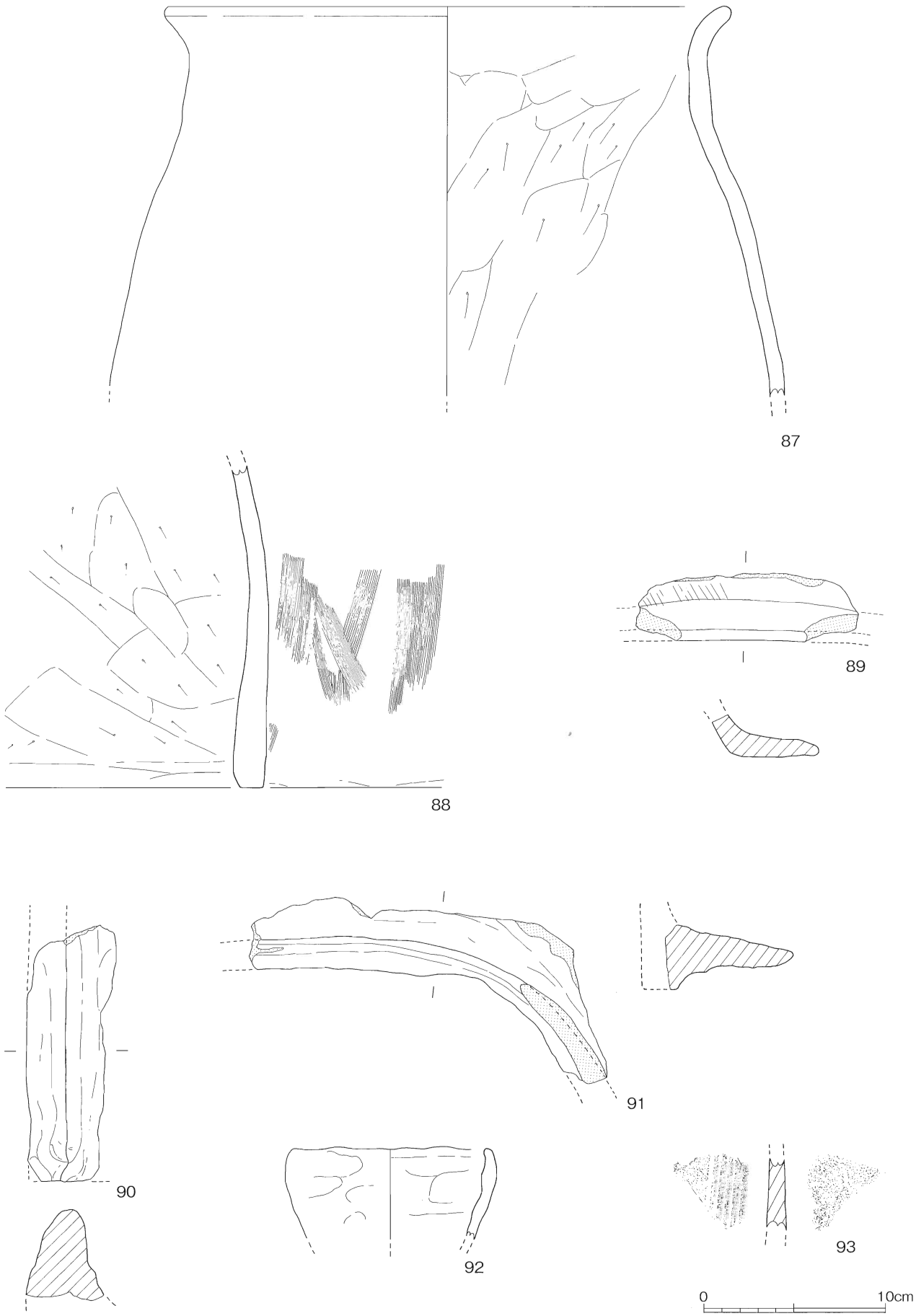
第28図　遺構外出土土師器実測図（S＝1/3）



第29図　遺構外出土土師器実測図（S＝1/3）



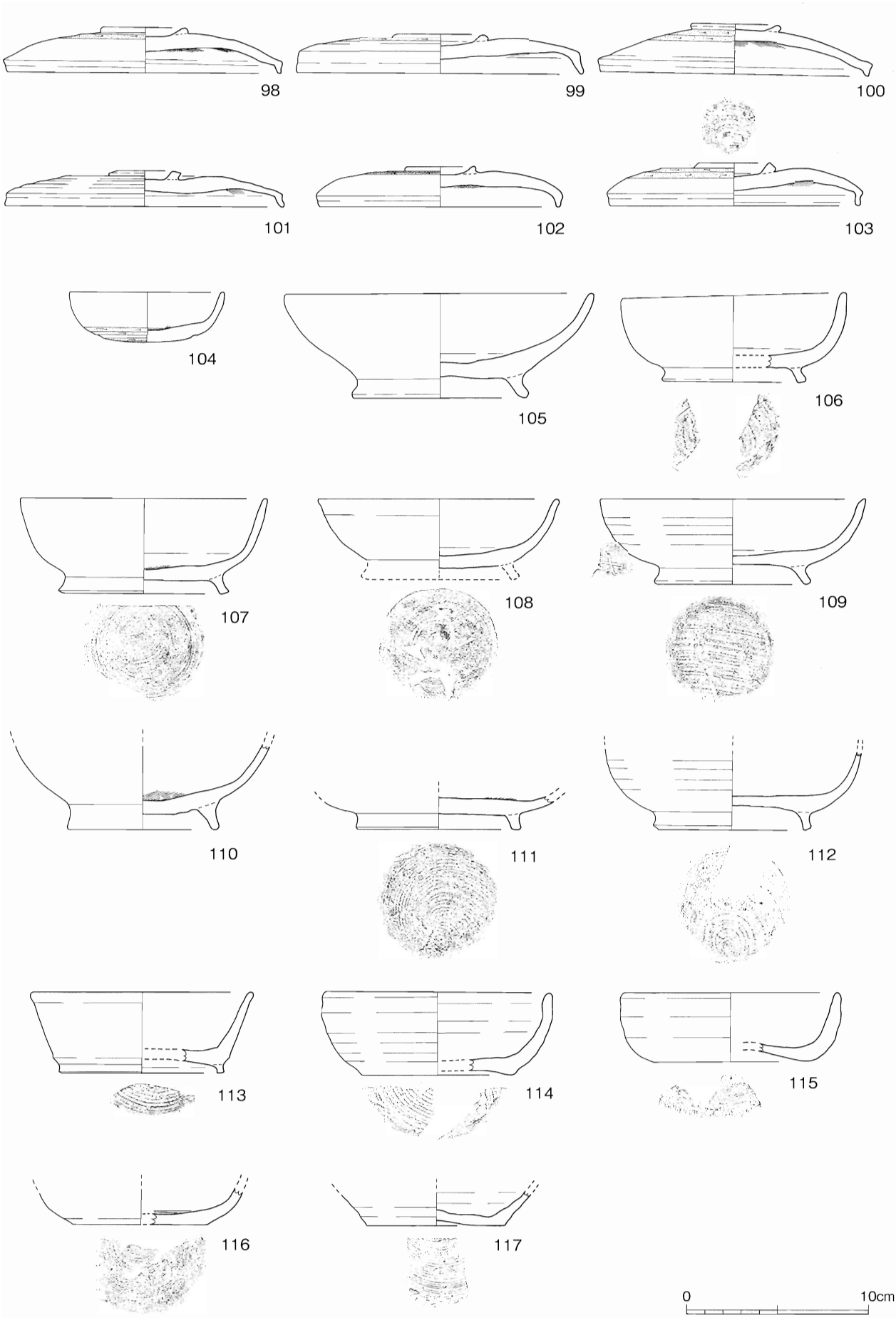
第30図　遺構外出土土師器実測図（S＝1/3）



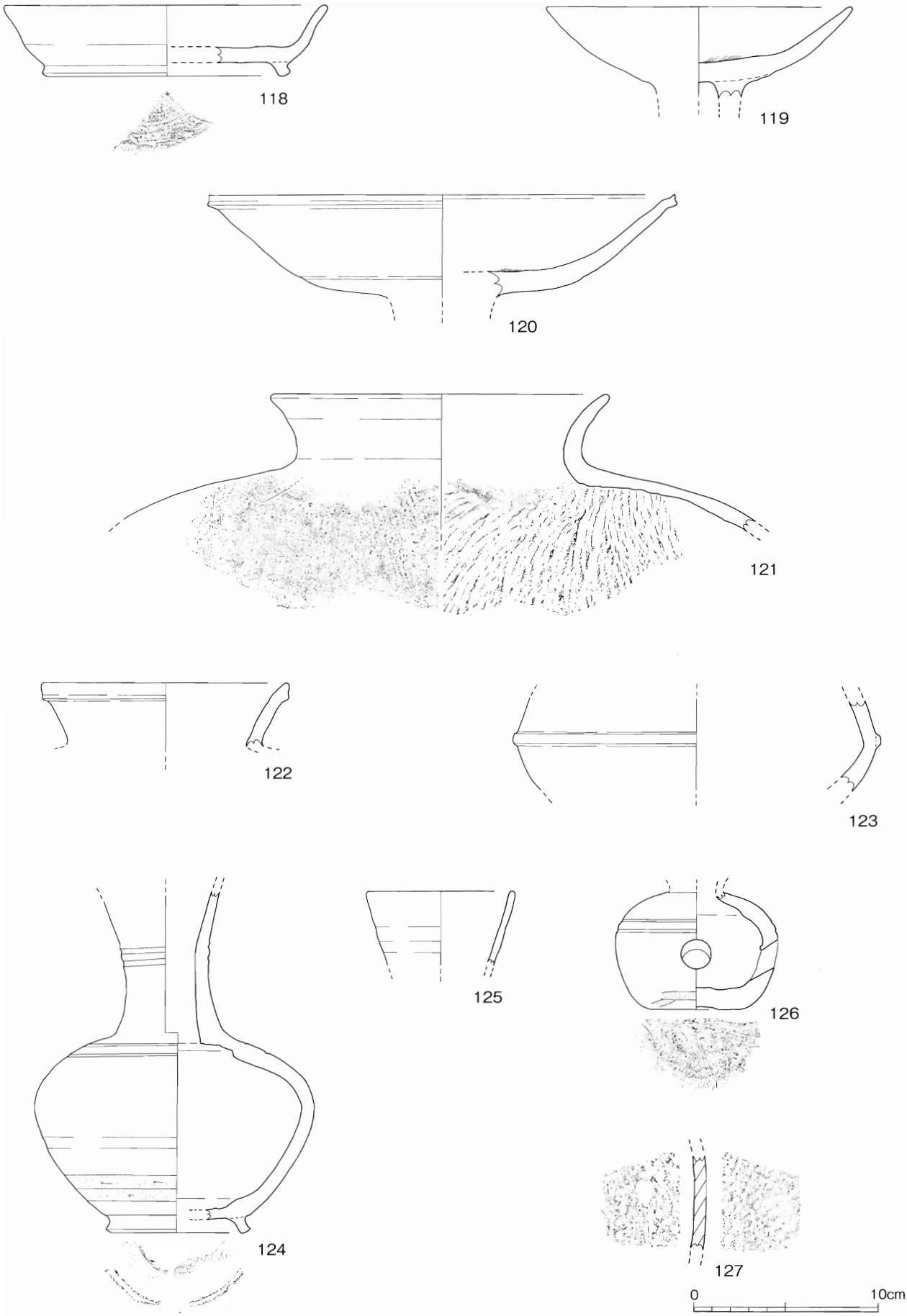
第31図　遺構外出土土師器実測図（S＝1/3）

須恵器（第32～34図94～127） 94～97は口縁端部内面にかえりをもつ坏蓋である。この内94～96は頂部に輪状つまみをもつ。つまみ部内面は丁寧なナデ調整が施されており、糸切りをもつものかどうかは判らない。97のつまみ部は、宝珠形のつまみが押しつぶされたような形を呈する。時期は高広ⅢA・B期[註7]に含まれるものであり、7世紀中頃から8世紀前半代と考えられる。98～103は口縁端部が下垂し、頂部に輪状つまみをもつ坏蓋である。103のつまみ部内面には糸切り痕が観察できるが、その他のものについては中心部までナデが施されており、不明と言わざるを得ない。高広ⅢB期に含まれるものであり、7世紀末から8世紀前葉のものと考えられる。104は坏身とした。やや丸みをもつ底部より体部が内湾気味に立ち上がり、口縁は斜上方に向け伸びる。底部外面には回転ヘラケズリが施されている。口径は8.5cmを測る小型のものである。高広ⅡB期に相当し、7世紀前葉から中葉頃と考えられる。105～109は体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部に「ハ」の字状の高台がつく坏身である。底部の切り離しは、105がヘラ切り、106・107が回転糸切り、108・109が静止糸切りである。坏蓋94～103に伴うものであろう。110～112も同様の坏底部と考えられる。底部の切り離しは、110がヘラ切り、111・112が回転糸切りである。113は体部が直線的に外傾して伸びる坏身であり、底部端に低い高台が貼り付けられている。底部の切り離しは回転糸切りによる。高広Ⅳ・Ⅴ期に同様の形態のものがあり、8世紀から9世紀代と考えられる。114・115は体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がる無高台の坏身であり、底部外面に回転糸切りが施されている。高広ⅣA期に相当し、実年代は概ね8世紀代と考えられる。116は同様の坏底部と考えられる。底部の切り離しは回転糸切りである。117は上げ底気味の底部より体部が直線的に外傾して伸びるものであり、無高台の坏身と思われる。底部外面には回転糸切りが施されている。118は高台付の皿である。平坦な底部より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反し端部を丸くおさめる。底部外面には回転糸切りが施されている。高広ⅣA・B期に同様の形態のものがあり、8世紀から9世紀代と考えられる。119・120は高坏受部の破片である。119は口縁部が内湾気味に緩やかに開き、坏部は浅い。120は口縁が大きく開き、端部付近で屈曲し先端は上下に肥厚され凹面をもつ。121は甕口縁部の破片、122は小型の壷甕類口縁部の破片である。123は胴部に突帯の巡る壷である。124は底部に高台をもつ長頸瓶である。頸部と肩部に2条の沈線が巡り、底部の切り離しは糸切りによる。時期は高広ⅢB期に相当し、7世紀末から8世紀前葉頃と考えられる。125は斜上方に向け立ち上がる壷口縁の破片である。126は平底の瓶である。肩部に2条の沈線が巡り、底部付近には僅かにヘラケズリが観察できる。底部外面には「×」のヘラ記号が施されている。大谷編年の瓶A7・8型[註8]に相当する。127は中世須恵器の壷甕類胴部片である。5点が出土しており、この内1点を図示した。調整は外面に格子状のタタキをもち、内面はナデである。胎土は2mm前後の砂粒を含み、焼成は不良である。

第32図　遺構外出土須恵器実測図（S＝1/3）



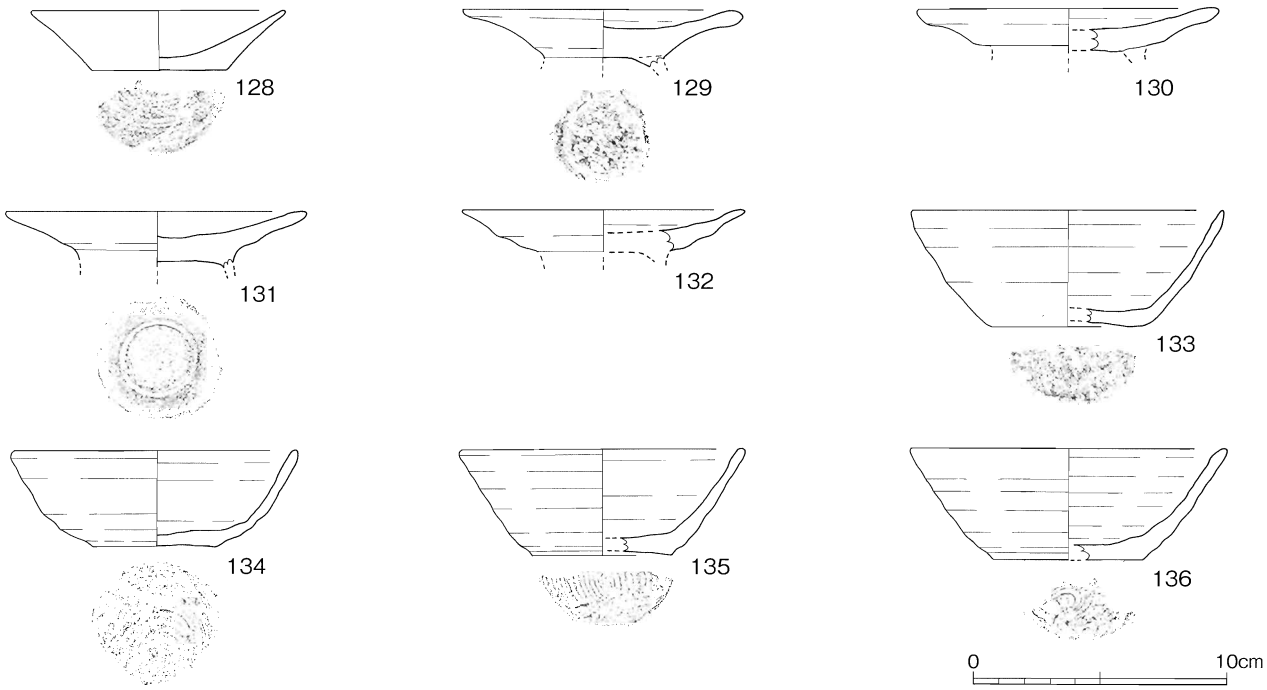
第33図　遺構外出土須恵器実測図（S＝1/3）



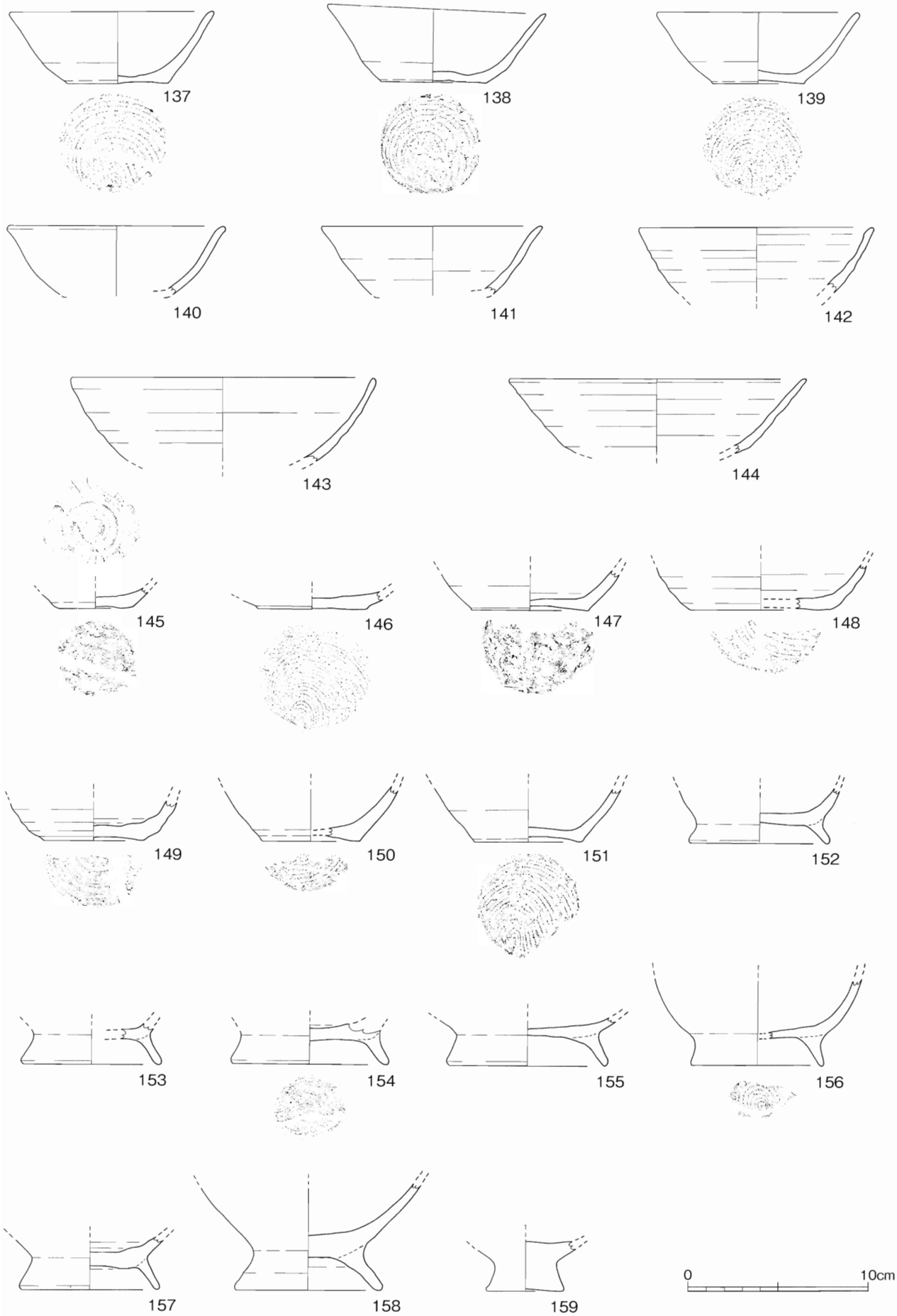
第34図　遺構外出土須恵器実測図（S＝1/3）

土師質土器（第35・36図128～159） 底部に糸切りをもつ中世土師器を便宜的に土師質土器とした。128は無高台の皿である。平坦な底部より体部が逆「ハ」の字状に大きく開き、口縁に向け先細りする。口径10.5cm・底径5.3cm・器高2.3cmを測る。129～132は高台をもつ皿である。体部が横方向に大きく開き受部は浅い。口径は129が11.0cm、130が11.9cm、131が11.8cm、132が11.1cmを測る。133～139は坏である。133は上げ底気味の底部より体部が斜上方へ向け真っ直ぐに伸びる。口径12.2cm・底径6.0cm・器高4.7cmを測る。134は低い高台状となる底部より体部が内湾して立ち上がり、端部へ向けては開き気味に伸びる。口径11.3cm・底径4.8cm・器高3.8cmを測る。135・136は低い高台状の底部より体部が斜上方へ向け真っ直ぐに伸び、端部を丸くおさめる。法量は135が口径11.3cm・底径5.5cm・器高4.2cm、136が口径13.5cm・底径5.8cm・器高4.4cmを測る。137～139は低い高台状の底部より体部が内湾気味に立ち上がり、口縁付近で緩く外反して端部に至る。回転ナデによる凸凹痕は目立たない。法量は137が口径11.4cm・底径5.6cm・器高4.0cm、138が口径12.1cm・底径5.6cm・器高4.1cm、139が口径11.2cm・底径5.5cm・器高4.0cmを測る。140～144は口縁部の破片である。140・141は体部が内湾気味に立ち上がり、先端へ向け緩く外反して端部に至る。前述の137～139と同形態のものと考えられる。口径は140が12.1cm、141が12.2cmを測る。142・143は体部部が内湾気味に立ち上がり口縁に至る。口径は142が13.0cm、143が17.0cmを測る。144は口縁部が斜上方に向け真っ直ぐに伸びるものである。口径は16.6cmを測る。145～151は無高台の底部片であり、底径は145が4.1cm、146が6.2cm、147が6.4cm、148が6.8cm、149が5.5cm、150が5.4、151が5.8cmを測る。145の内面は黒褐色を呈する。152～158は高台をもつものであり、「ハ」の字に開くやや長めの高台が貼り付けられている。高台径は152が7.5cm、153が7.8cm、154が8.6cm、155が9.0cm、156が7.2cm、157が7.7cm、158が8.0cmを測る。152の内面は黒褐色を呈する。159は台付きのものである。小型品で底部径4.4cm、脚部高2.7cmを測る。

これら土師質土器の年代は、時期幅は考えられるものの10世紀から12世紀前半の中に含まれるものである。よって、平安時代と考えられるが詳細な時期は不明と言わざるを得ない。[註9]



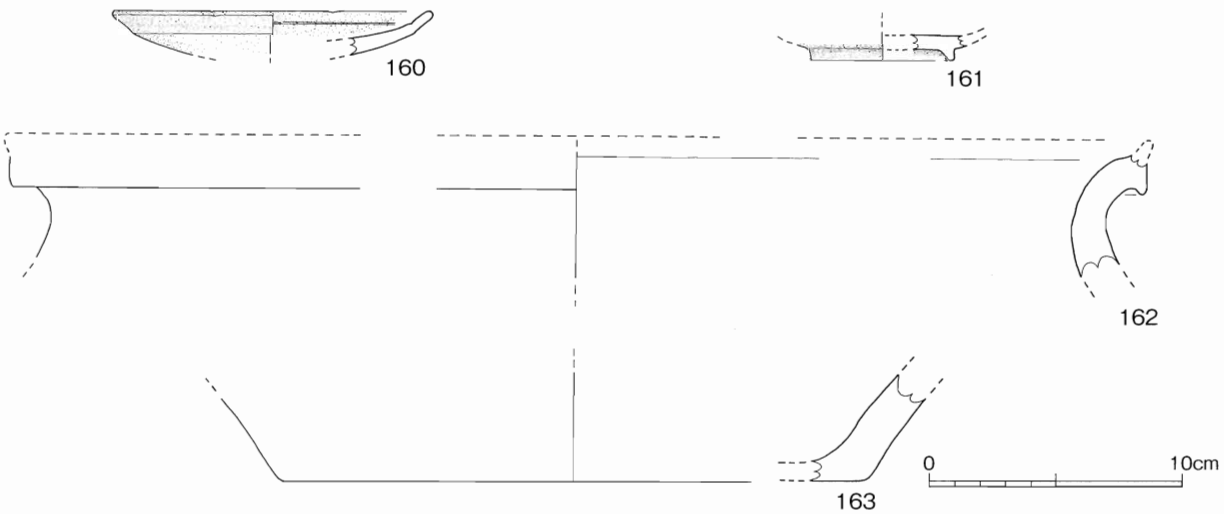
第35図　遺構外出土土師質土器実測図（S＝1/3）



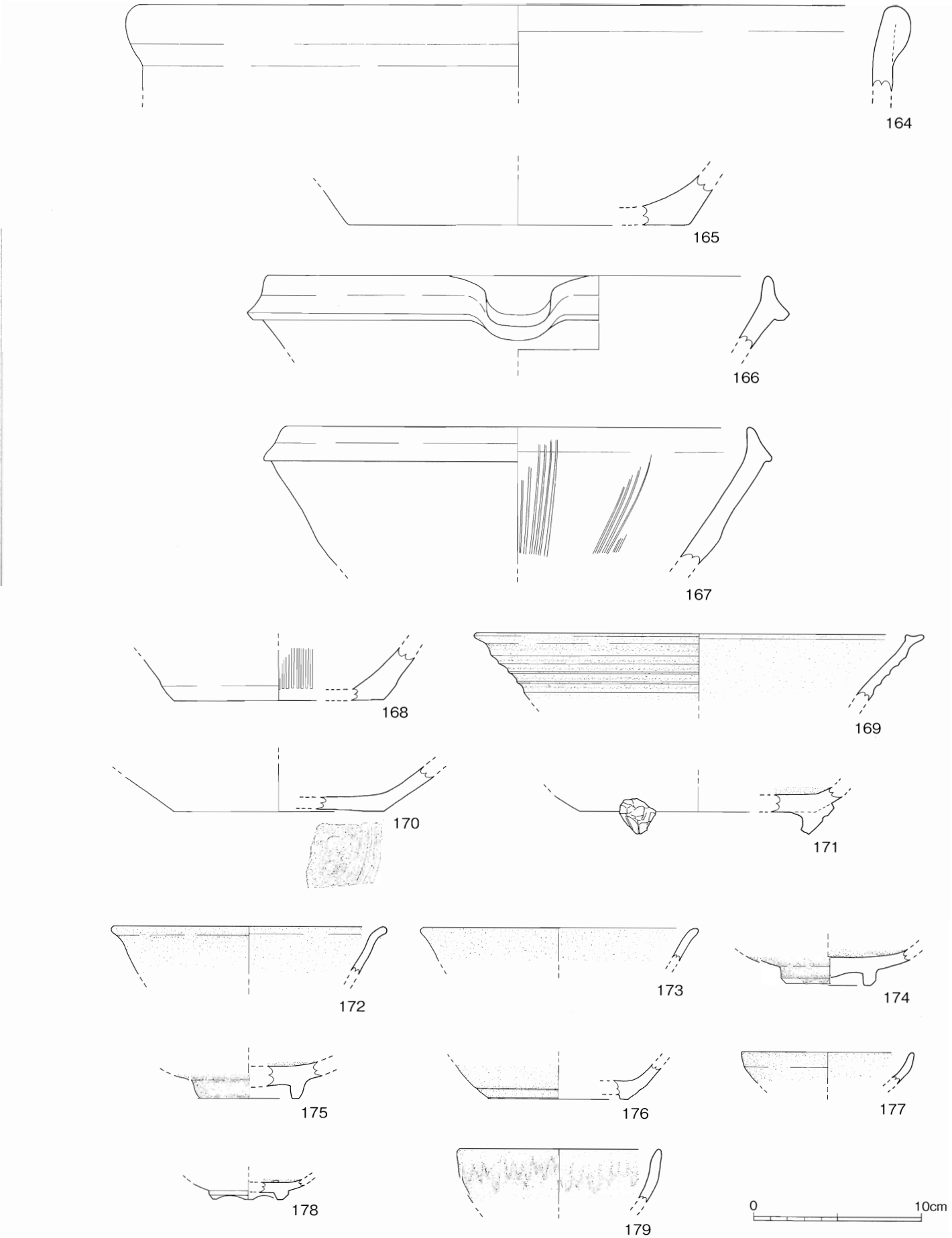
第36図　遺構外出土土師質土器実測図（S＝1/3）

国産陶器（第37・38図160～171） 160は口縁部付近が屈曲する緑釉陶器の皿であり、端部に切り込んでつくるタイプの輪花が施されている。胎土は硬質の須恵質で灰色を呈し、濃緑色の釉薬が均一に塗布されている。東海系のものであり、時期は9世紀末から10世紀初頭と考えられる。[註10] 161は緑釉陶器皿底部の破片である。「ハ」の字状に開く高台が貼り付けられており、濃緑色の釉薬が全面に施されている。160と同一個体と考えられる。県東部（出雲地域）での緑釉陶器の出土は19遺跡81点が報告されている。[註11] 162・163は瓷器系陶器である。162は甕の口縁部であり、いわゆるN字状口縁を呈する。常滑焼の編年では6a型式に比定されているものである。[註12] 13世紀か。163は平底を有する甕底部の破片である。164～168は備前焼である。甕164は赤焼けの個体である。口縁部は垂直に近く立ち上がり、内面が外方に緩く屈曲する。端部は折り曲げられ玉縁状を呈するが、だれて扁平となっている。乗岡編年の中世4期に含まれるものであり、[註13] 15世紀前葉～15世紀中葉と考えられる。165は平底を呈する壷甕類底部の破片である。166は擂鉢の片口部分の破片である。時期は15世紀頃と考えられる。167は擂鉢の口縁部であり、内面には7本1組の放射クシ目条線が刻まれている。乗岡編年の中世4期に含まれるものである。168は擂鉢底部の破片である。169～171は瀬戸・美濃の深皿と考えられる。169は大きく開き気味に立ち上がり、口縁部は内外につまみ出され凹面を形成する。内外面にオリーブ黄色の釉薬が施されている。170は底部の破片である。平底の底部より体部が大きく開いて立ち上がる。切り離しは糸切りであり、釉薬は観察できなかった。171は底部と体部の境にボタン状の脚が貼り付けられている。外面は無釉であり、内面の一部にオリーブ黄色の釉薬が観察できる。

貿易陶磁器（第38図172～179） 172・173は青磁碗口縁部の破片である。口縁部が外反するものであり、上田D類に相当する。[註14] 14～15世紀頃のものと考えられる。174・175はしっかりとした高台をもつ青磁碗底部である。内面見込み部分には印花文が施され、高台外面まで釉がかかり、畳付けを含めて外底は無釉である。14～15世紀頃のものと考えられる。176は碁笥底を有する青磁碗底部の破片である。外面の底部付近に1条の沈線が巡る。177・178は白磁の皿である。177は丸みをもって立ち上がる口縁部の破片である。178は体部下半部を露胎にしたものであり、見込みに胎土目状の痕跡が残る。高台裏には抉りを入れ、波状を呈すもので森田D群に相当する。[註15] 15世紀代と考えられる。179は中国製黒釉陶器碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で屈曲させ端部は外反する。16世紀初頭までのもの。

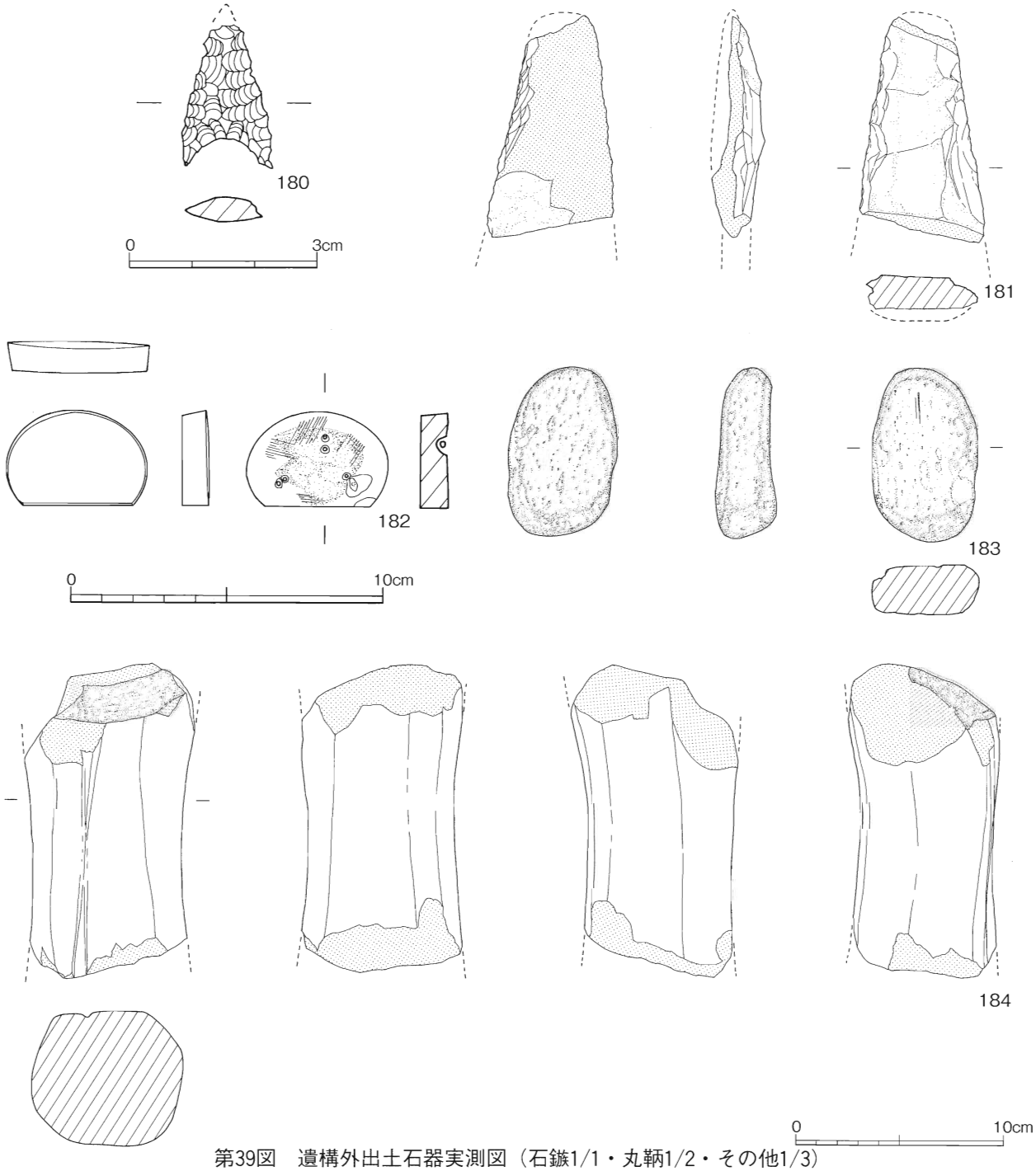


第37図　遺構外出土国産陶器実測図（S=1/3）



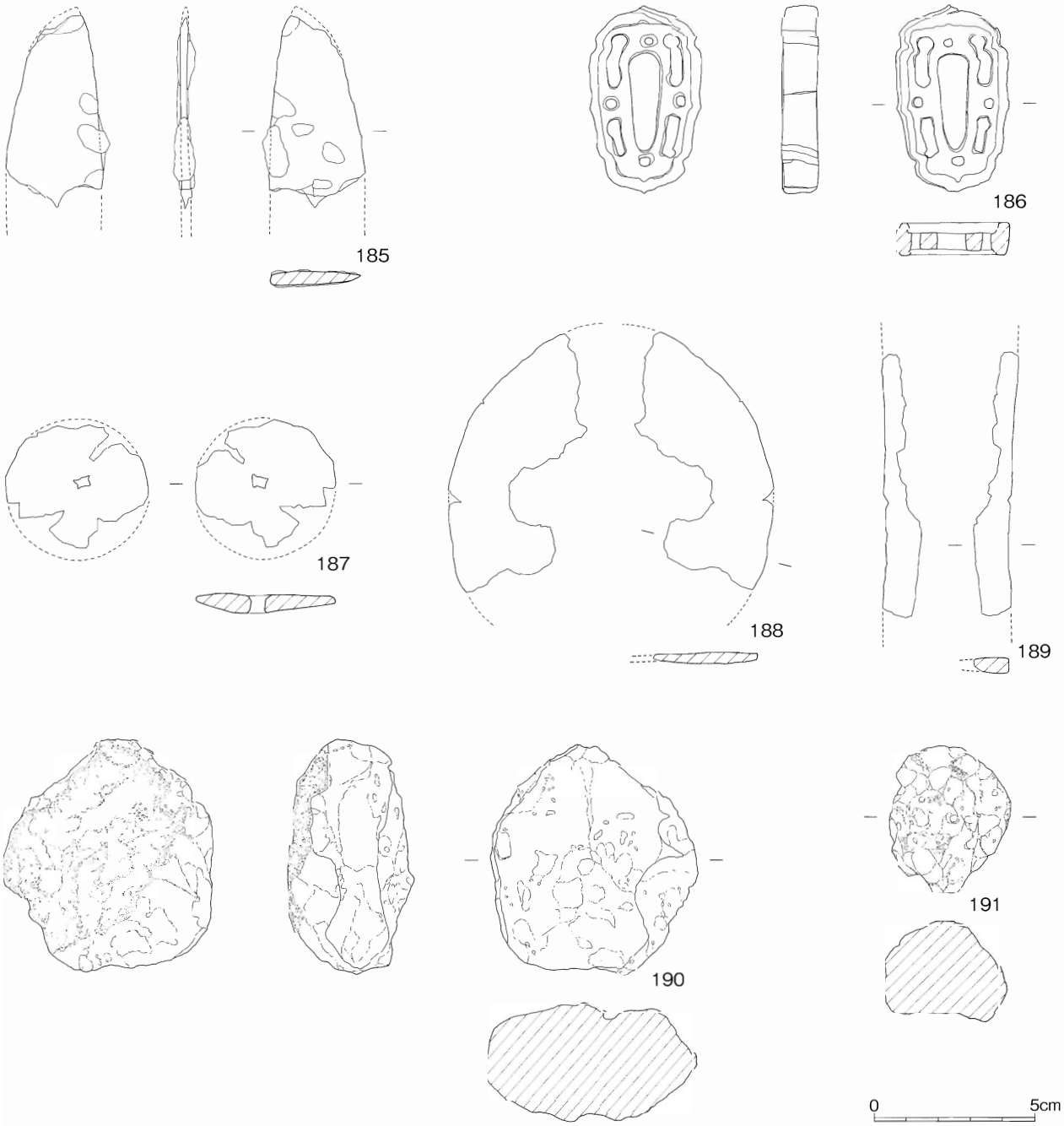
第38図　遺構外出土国産陶器・貿易陶磁器実測図（S＝1/3）

石器（第39図180～184） 180は黒曜石製の凹基無茎式の石鏃である。181は打製石斧である。主要剥離面を大きく残し、縁辺には比較的丁寧な二次加工が施されている。石材は流紋岩である。182は石製丸鞆である。平面形は楕円形の下部を直線的に切った形状を呈する。表面と側面は非常に丁寧に研磨されているが、裏面は所々に擦痕が残り、研磨されていない部分も見られる。潜り孔は径1.2mmを測り、裏面の３箇所に開けられている。法量は、表面よりも裏面側が若干大きく仕上げられており、表面側が縦21.19mm、横43.98mmであり、裏面側が縦30.32mm、横45.31mm、厚さは8.13～9.21mm、重量24.9gを測る。石材は無斑晶質流紋岩またはトカライトであり、色調は暗灰色を呈する。現在の所、県東部（出雲地域）での袴帯の出土は13遺跡15点が報告されている。[註16] 183は多孔質の軽石である。明瞭な加工痕はないが、表裏は側面に比べるとやや摩滅しているようである。184は砥石である。側辺部が使用されており、よく利用された面は凹レンズ状に窪んでいる。



第39図　遺構外出土石器実測図（石鏃1/1・丸鞆1/2・その他1/3）

鉄器・鉄滓（第40図185～191） 185は大刀の切っ先と考えられる。一方に刃部を付け断面は三角形を呈する。残存長6.0cm、幅最大3.2cm、厚さ最大0.6cm、重量12.1gを測る。186は鍔である。四隅に括れをもち、四方には鋭い稜角が作り出されている。内面には丸と棒状の透かし文様が施されており、外輪部は一段厚く仕上げられている。大きさの割に厚く、長さ5.8cm、幅3.5cm、厚さ1.1cm、重量48.5gを測る。磁石には付着しない。時期は平安時代のものと思われる。[註17] 187は紡錘車と考えられる。円盤部の径は4.35cmを測り、中央には角孔が開けられている。厚さ最大0.6cm、重量11.5gを測る。188は薄い円盤状の不明品であり、正円のものとして復元すると直径約11.4cmとなる。厚さ0.4cm、重量11.6gを測る。189は棒状の不明品である。残存長8.2cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重量4.5gを測る。190は椀形鍛冶滓である。底部には砂粒の付着が認められる。磁石には付着しない。181.8gを測る。191は鉄滓である。磁石には付着しない。重量は42.3gを測る。



第40図　遺構外出土鉄器実測図（S＝1/2）

第２節　第２遺構面の調査

前述の第１遺構面の床面からは多数の遺物が顔を覗かせていたことから、更に掘削を進めたところ溝４本（SD－01～SD－04）と土坑１個（SK－07）を検出した。これらの溝は複雑に切り合っているようだが、埋土はいずれも暗褐色土層であった。また、それぞれの溝から出土した遺物が接合できた。これらの状況から溝は自然に埋まったものではなく、ある時期に埋め立てられた整地層と考えられる。このため、遺物は「6.整地層出土遺物」としてまとめて取り扱った。遺物の中には第１遺構面褐灰色土層から出土したものと接合できるものも数多くみられた。整地層から出土した遺物は土師器・須恵器が主体であり、第１遺構面褐灰色土層から多数出土している土師質土器は細片が数個出土しただけである。また、陶磁器は出土していない。

１．SK－07（第41図）

調査区の標高28.60mを測る位置で検出された性格不明の土坑である。平面は円形を呈し、現状での規模は直径160cm、深さ最大47.8cmを測る。丸みをもった底部より、平滑な壁面が緩やかに立ち上がっている。SD－02と切り合っているが、新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

２．SD－01（第41図）

調査区の標高29.00mを測る位置で検出された溝である。ほぼ南－北方向に伸びるものであり、南側は二股に別れて調査区外へ向け更に続いている。或いは２本の溝が重なっている可能性も考えられる。検出した範囲での規模は長さ8.92m、幅0.68～2.88m、深さ最大37.7cmを測る。溝底部での標高は、南側が高く、北側が低い。

３．SD－02（第41図）

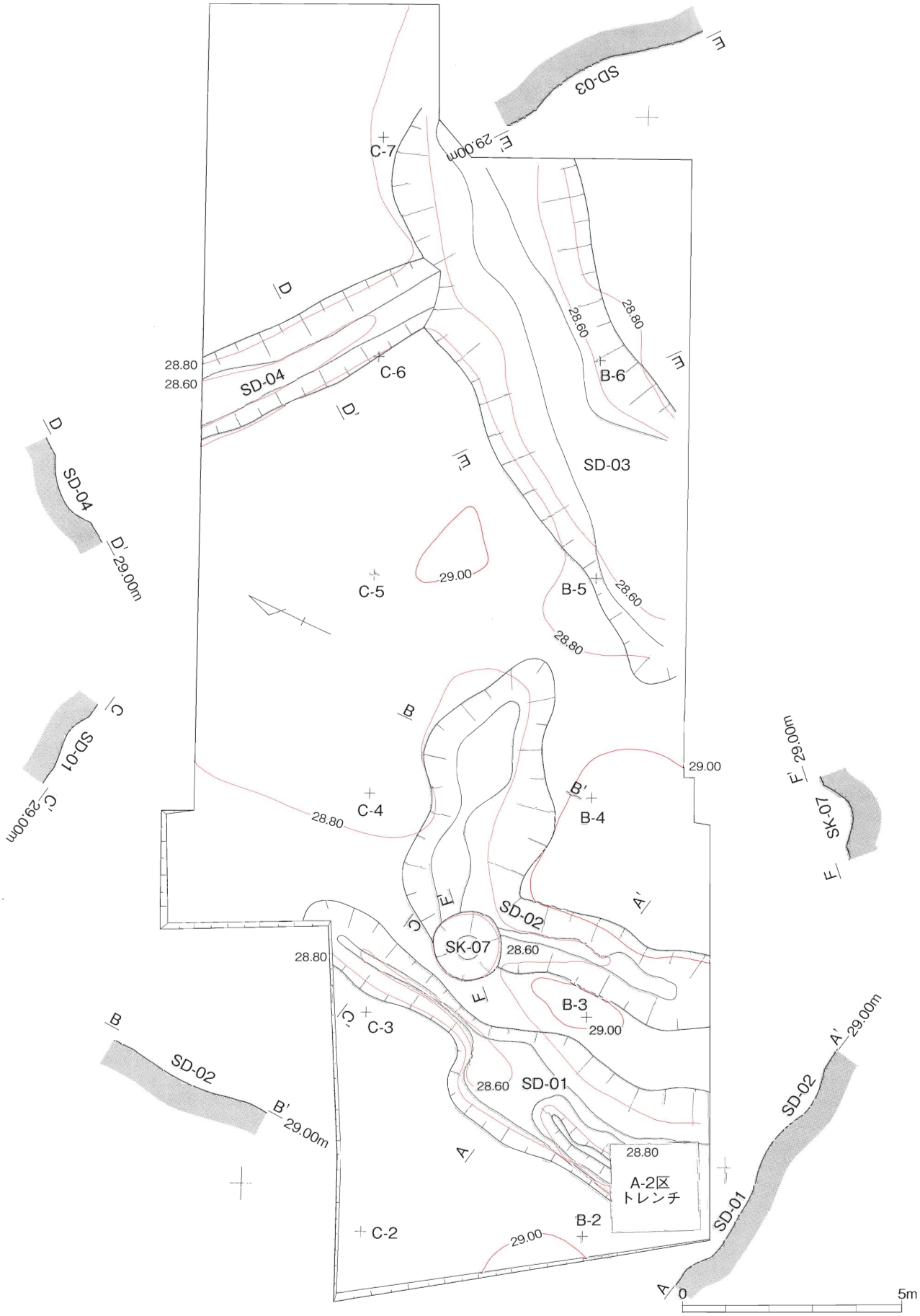
調査区の標高29.00mを測る位置で検出された溝であり、調査区外の南側に向かって更に続いている。SD－01とほぼ平行するように南－北方向に向け伸びた後、中途で直角に近く折れ曲がりSD－03の流れる東側に向きを変えている。或いは、真っ直ぐな２本の溝が直角に重なっている可能性も考えられる。検出した範囲での規模は長さ約12.8m、幅1.58～2.76m、深さ最大32.2cmを測る。溝底部での標高は「く」の字に折れ曲がっている部分が低く、南側と東側が高い。後述のSK－07と切り合っている部分が最も低く、現状ではここに流れ込む格好になっている。SK－07との新旧関係は不明である。

４．SD－03（第41図）

調査区の標高28.80mを測る位置で検出された溝であり、調査区外に向かって更に続いている。南西－北東方向に向け伸びるものであり、検出した範囲での規模は長さ14.18m、幅3.43～4.07m、深さ最大41.2cmを測る。溝底部での標高は、南西側が高く、北東側が低い。SD－04と切り合っているが、新旧関係は不明である。

５．SD－04（第41図）

調査区の標高28.80mを測る位置で検出された溝であり、調査区外の北西側に向かって更に続いている。北西－南東方向に向け真っ直ぐに伸びるものであり、検出した範囲での規模は長さ6.20m、幅1.53～1.84m、深さ最大29.1cmを測る。溝底部での標高は、南東側が高く、北西側が低い。SD－03と切り合っているが、新旧関係は不明である。

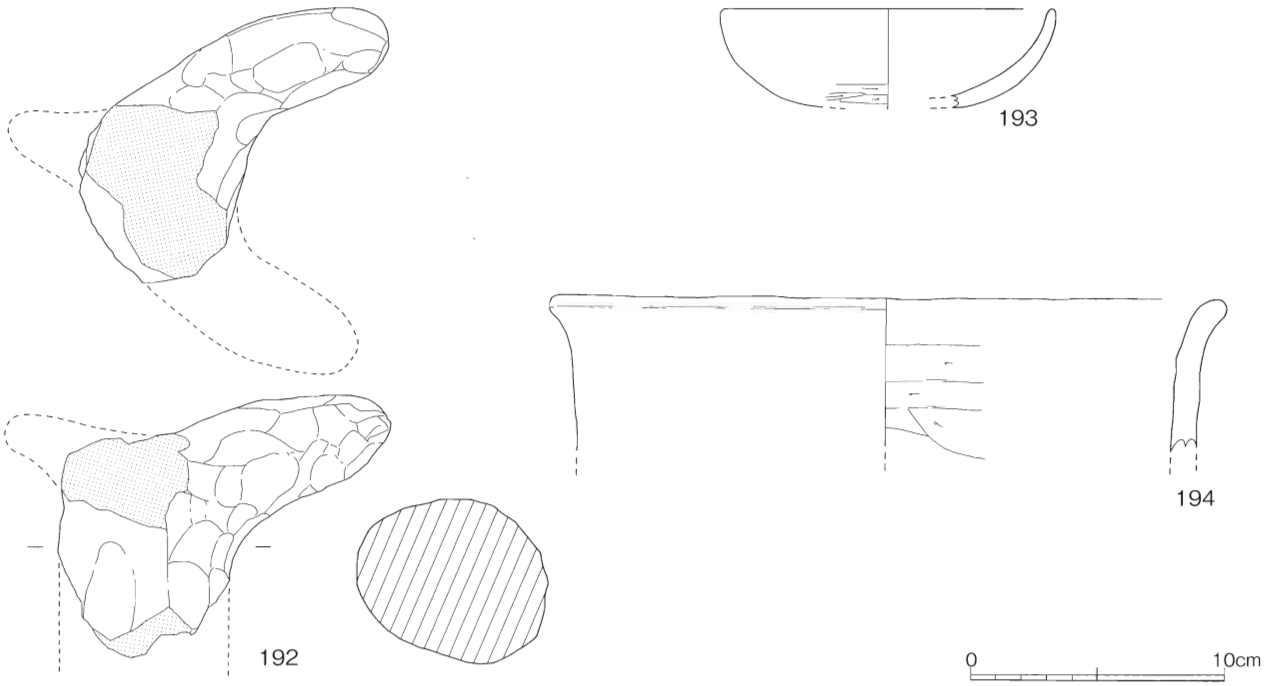


第41図　第２遺構面遺構位置図（S=1/125）

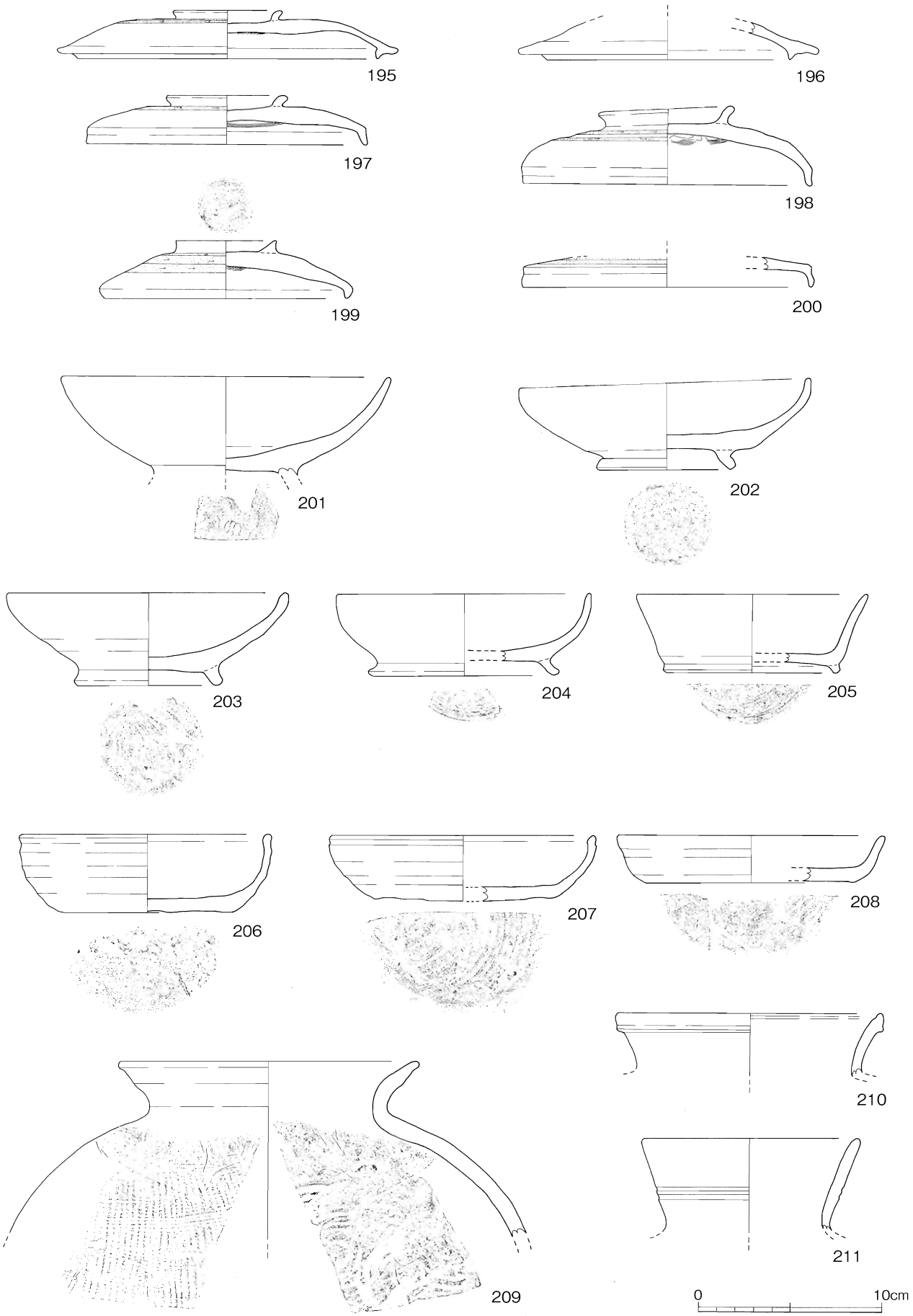
6．整地層出土遺物（第42図～第44図）

土師器（第42図192～194） 192は土製支脚である。三又突起タイプのものであり、表面に強いナデ調整が施されている。193は坏である。浅い椀形を呈し、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。194は器種不明品である。体部が垂直に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。調整は体部外面が横方向のナデ、内面に横方向のヘラケズリが施されている。小片のため径の復元は不正確だが、口径26cm前後のものである。

須恵器（第43図195～211） 195・196は口縁端部内面にかえりをもつ坏蓋である。195は天井部に輪状つまみをもつ。つまみ部の内側にはナデが施されており、糸切りをもつものか判らない。時期は高広ⅢA・B期に含まれるものであり、7世紀中頃から8世紀前半代と考えられる。197～200は口縁端部が下垂する坏蓋である。197～199は頂部に輪状つまみをもつ。199の切り離しには静止糸切りが施されているが、197・198は丁寧なナデのため糸切りをもつものかは判らない。時期は高広ⅢB期頃のものである。201～204は体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部には直立気味か、ハの字状の高台がつく坏身である。坏蓋195～200に伴うものであろう。底部外面の調整は201・202がナデのため不明。203が静止糸切り、204が糸切りである。201・202の高台内にはヘラ記号が施されている。205は体部が直線的に外傾して伸びる坏身であり、底部端に低い高台が貼り付けられている。底部外面の切り離しは糸切りによる。高広Ⅳ・Ⅴ期に同様の形態のものがあり、8世紀から9世紀代と考えられる。206・207は無高台の坏身である。体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部外面に回転糸切りが施されている。高広ⅣA期に相当し、概ね8世紀代と考えられる。208は無高台の皿である。平坦な底部より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。底部の切り離しは糸切りである。高広Ⅳ・Ⅴ期に同様の形態のものがあり、8世紀から9世紀代と考えられる。209は甕口縁部の破片、210は小型の壺甕類口縁部の破片である。211は斜め上方に向け真っ直ぐに立ち上がる壺口縁部の破片であり、口縁部外面に2条の沈線が巡る。

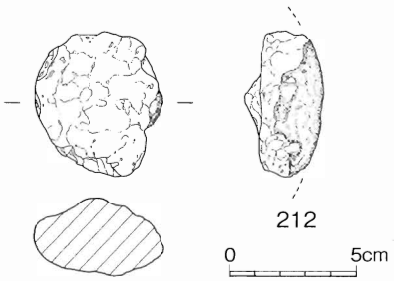


第42図　整地層出土土師器実測図（S＝1/3）



第43図　整地層出土須恵器実測図（S＝1/3）

鉄滓（第44図212） 212は椀形鍛冶滓である。平面はほぼ円形を呈し、上面の中央部はやや盛り上がっている。底部は丸みをおび、砂粒の付着が認められる。弱いながら磁石に付着するものである。法量は現状で長さ5.8cm、幅5.1cm、厚さ最大3.0cm、重量109.1gを測る。C－4区より出土した。



第44図　整地層出土鉄器実測図（S＝1/3）

［註］

註1　底部に糸切りをもつ中世土師器を便宜的に土師質土器とした。（P－10）

註2　島根県教育委員会『渡橋沖遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3 1999年3月（P－10）

註3　八雲村教育委員会　八雲村コミュニティーセンター建設工事に伴う『恩部遺跡試掘調査終了報告』平成14（2002）年12月（P－10）

註4　廣江耕史、丹羽野裕、西尾克己氏のご教示による。（P－19）
廣江耕史「島根県における中世土器」『松江考古』第8集　松江考古学談話会　1992年
廣江耕史「出雲地域の中世土師器について」『出雲平野の中世土器検討会資料』1998年

註5　註4と同じ。（P－23）

註6　西尾克己氏のご教示による。（P－28）
島根県教育委員会『蔵小路西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2 1999年3月

註7　島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』－和田団地造成工事に伴う発掘調査－　1984年3月（P－33）

註8　大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』1994年3月（P－33）

註9　註4と同じ。（P－36）

註10　高橋照彦、平尾政幸氏のご教示による。（P－38）

註11　第2回山陰中世土器検討会資料集　緑釉陶器の様相－山陰地方を中心として－ 2002年10月5日・6日山陰中世土器検討会（P－38）

註12　中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社　1995年（P－38）

註13　乗岡実『備前焼擂鉢の編年について』第3回中近世備前焼研究会資料　2000年11月　中近世備前焼研究会
乗岡実『中世備前焼擂鉢・甕の編年案』2002年1月（P－38）

註14　上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』NO.2　1982年（P－38）

註15　森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』NO.2　1982年（P－38）

註16　内田律雄　鳥取県・島根県・山口県の銙帯　銙帯をめぐる諸問題　2002年　奈良文化財研究所（P－40）

註17　三宅博士氏のご教示による。（P－41）

［参考文献］

・池淵俊一『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会　1998年
・『日本出土銭総覧』1996年版　兵庫埋蔵銭調査会　1996年5月
・日本貿易陶磁研究集会中国大会資料集　中世後期における貿易陶磁器の様相 2002年6月29日・30日　日本貿易陶磁研究会
・第3回山陰中世土器検討会資料集　中世須恵器の生産と流通　－山陰地方を中心に－ 2003年10月12日・13日　山陰中世土器検討会

第5章　ま　と　め

今回の禅定寺遺跡の調査では、第1遺構面から掘立柱建物跡4棟（SB－01～04）、土坑6個（SK－01～06）と多数のピットを検出した。また、第1遺構面を更に掘り下げた第2遺構面からは土坑1個（SK－07）と溝4本（SD－01～04）を検出している。以下、検出された遺構の時期について若干触れ、まとめとしたい。

第2遺構面を埋め立てた整地層から出土した遺物は土師器、須恵器が主体である。このうち、須恵器は高広ⅢA・B期（7世紀中頃から8世紀前半頃）の蓋坏と高広ⅣA期（8世紀代）の坏身が中心であり、高広Ⅳ・Ⅴ期（8世紀から9世紀代）の坏身や皿も弱冠存在する。第1遺構面褐灰色土層から多数出土している平安時代の土師質土器（10世紀から12世紀前半頃）は、細片が数個出土しただけである。この細片についても整地層表面からの出土であり、褐灰色土層の下面から出土したものに含めるべきかもしれない。この他、陶磁器は出土していない。よって、この整地層は第1遺構面の褐灰色土層から多数出土している平安時代の土師質土器が使われる以前（8～10世紀頃か）に造成されたものと考えられる。整地層を更に掘り下げた第2遺構面から検出された土坑1個（SK－07）と溝4本（SD－01～04）はこれ以前の遺構となるが、詳細な時期は判らない。

第1遺構面から検出された土坑やピット群は整地層造成後に掘られたものである。復元された4棟の掘立柱建物跡（SB－01～04）のうち、遺構の切り合い関係はSB－01・02・04で認められた。土層の観察から新旧関係を確定することはできなかったが、SB－04だけは主軸が北に約27度傾いており、同軸のSB－01・02とは別個に考える必要がある。建物跡の柱穴から出土した遺物で注目されるのがSB－01のPT3・4から出土した銭貨である。1068年初鋳の熙寧元寳が土師質土器と一緒に出土しており、建物を建てる前、いわゆる「地鎮め」を行った跡と思われる。このように考えるとSB－01は1068年以降の建物跡といえる。この他、PT9より瓷器系の壷甕類胴部の破片が出土しているが、柱の抜き取り状況が不明なため、柱の埋設時に伴うものか、抜き取り後の混入によるものかの判断はできなかった。1068年以降の遺物で量的に多いのが平安時代の土師質土器（10世紀から12世紀前半頃）と中世4期（15世紀前葉～15世紀中葉）の備前擂鉢や甕、上田D類（14～15世紀頃）に相当する中国青磁、森田D群（15世紀代）に相当する白磁の皿など、14～15世紀頃の中世陶磁器である。よって、SB－01は11世紀後半～12世紀前半頃か、14～15世紀頃の建物跡である可能性が高い。SB－01とSB－03は同軸の建物跡であり、同時期に機能していた可能性が指摘できる。また、SB－01とSB－02切り合い関係にあり、ほぼ同軸であることや南西側の桁行を長く作る特徴も一致していることから建て替えも行われていたと考えられる。

次に、整地層の上に堆積した褐灰色土層から出土した遺物を概観する。ここからは弥生時代後期前半から中世陶磁器に至る非常に時期幅のある遺物が出土している。この中で特徴的な遺物として注目されるのが石製丸鞆、刀の鍔、東海系の緑釉陶器皿である。これらは当地域で出土例が少ないばかりか、遺跡の性格を知る上でも重要である。緑釉陶器が9世紀末から10世紀初頭のものであり、整地層造成後の早い段階では官衙的な施設が存在していた可能性が考えられる。しかし、はっきりと9世紀末から10世紀初頭といえる建物跡は確認できなかった。或いは、これらを副葬することができる豪族の墳墓が壊され整地層が造成された可能性や、整地層造成後に墳墓が作られ後世に

攪乱された可能性も捨てきれない。調査地内で墳墓の可能性のある土坑としてSK－04（第19図）があげられる。C－３・４区の標高28.75～29.00mを測る位置で検出された長方形を呈する土坑であり、長さ148cm以上185cm以下、幅78cm、深さ最大20.7cmを測る。土坑内からは平安時代の土師質土器が出土しており、土坑上面からも同時期の土師質土器がまとまって見つかっている（第26図参照。36－138・139・144・146・151・156等）。また、石製丸鞆、刀の鍔、緑釉陶器皿なども近い位置からの出土である。この土坑の位置する場所はSB－02・PT３とSB－04・PT３が掘り込まれた所であり、SK－03とも切り合っている。これらが掘削された際に、土壙内から副葬品が掻き出されたと考えることもできる。この他に、注目されるのが中国産の天目・青磁・白磁など貿易陶磁が多数出土している点である。これらを入手できる豪族の居館としての機能が想定され、遺跡の南東に位置する禅定寺城跡や南に位置する禅定寺古墓群[註1]との関係が注目されるが、今回は調査面積も少なく詳細は不明である。今後の検討課題としたい。

［註］

註１　後述する昭和58年度調査地区（調査B区）に隣接する丘陵に存在する五輪塔群である。概観したところ、空風輪４個、火輪６個、水輪１個、地輪２個が確認できた。この他、土中に埋まっているため何処の部材か判らないものも４個あった。これらの石材はいずれも凝灰岩製である。

第２表　禅定寺遺跡出土土器観察表

※焼成は「良好・やや良好・良・やや不良・不良」とした。

遺物番号	挿図番号	品目	器種	出土地点 土　層	胎土焼成	色調（外） 色調（内）	法量（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備　考
1	第5図	土師質土器	不明	SB−01 PT3･4	微砂粒含む。 密不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	高台径 6cm前後	「ハ」の字状に開く高台をもつ。	風化	銭貨と一緒に出土。
4	第9図	須恵器	坏身	SB−02 PT15	密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:12.3	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部外面に沈線を施し括れ部を作り出す。	体部内外面が回転ナデ。	
5	第9図	須恵器	壷	SB−02 PT15	1mm大の砂粒含む。 密やや不良	(外)灰色 (内)灰色	底径:13.5	平坦な底部より体部が斜上方へ向け直線的に立ち上がっている。	小片のため断定できないが、底部に糸切り痕は観察できない。	底部
9	第10図	土師質土器	不明	SB−03 PT23	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径 12cm前後	逆「ハ」の字状に立ち上がる体部。口縁端部は若干厚く端部を丸くおさめる。	風化	口縁部小片
10	第11図	土師器	甕	SB−04 PT9	1mm大の砂粒含む。 やや不良	(外)橙色 (内)黄橙色	口径:21.5	口縁部が外反して立ち上がり、端部内面が若干窪む。	体部外面が縦方向のハケメ、内面の頸部以下にヘラケズリが施されている。	
11	第11図	土師器	甕	SB−04 PT4	0.5mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:不明	外反する口縁部をもち、端部を丸くおさめる。	内外面ヨコナデ	口縁部小片
12	第11図	土師器	甕･甑･竈類	SB−04 PT4	0.5mm大の砂粒含む。 良好	(外)灰黄褐色 (内)灰黄褐色	口径:24.4	口縁部が水平気味に強く外反しやや厚手。	内外面ヨコナデ	
13	第11図	土師質土器	台付きの坏	SB−04 PT2	2mm大の砂粒含む。 不良	(外)浅黄橙色 (内)灰白色	口径 9cm前後	口縁部は内湾気味に立ち上がる。底部の剥離痕から脚か高台がつくもの。	風化	口縁部小片
14	第14図	土師器	鍋	SK−01	1mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色	口径:18.7	胴部の張り出しが口縁以上にならないものであり、口縁部は強く外反し水平方向に伸びる。	内面が横方向のヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施されている。	外面に炭化物と煤付着
15	第14図	土師器	鍋･甕	SK−01	1mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径 25cm前後	口縁端部の小片。厚さの不均一な粗製品。	内外面ヨコナデ	外面に炭化物付着
16	第14図	須恵器	坏蓋	SK−01	密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	摘み部径: 4.8	輪状摘みをもつ。	外面天井部の摘み部周辺に回転ヘラケズリ。	
17	第14図	須恵器	壷	SK−01	密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	−	頸部下に突帯が巡り、肩部には沈線が施されている。	内外面回転ナデ。	
18	第14図	土師質土器	無高台の坏	SK−01	1mm大の砂粒含む。 やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:11.5 底径:5.6 器高:4.1	口縁が残存している部分は体部が反り気味。他の部分は底部下半に弱い膨らみをもつ。	底部外面回転糸切り	第20図41、第36図137〜139と同形態
19	第14図	土師質土器	不明	SK−01	微砂粒含む。 密不良	(外)褐色 (内)にぶい橙色	口径:11.6	斜め上方に立ち上がる体部。口縁部が若干膨らみ端部を丸くおさめる。	風化のため器壁が薄くなっている。 内外面	口縁部
20	第14図	土師質土器	不明	SK−01	微砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	口径:15.7	斜め上方に向け緩やかに立ち上がる体部をもつ。	内外面回転ナデ。	口縁部
21	第14図	土師質土器	不明	SK−01	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	底径:5.3	無高台の底部片。	底部外面回転糸切り	底部
22	第14図	土師質土器	不明	SK−01	微砂粒含む。 密不良	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色	底径:5.4	無高台の底部片。	底部外面回転糸切り	底部
23	第14図	土師質土器	不明	SK−01	微砂粒含む。 密やや不良	(外)黒褐色 (内)灰褐色	底径:5.4	無高台の底部片。	底部外面回転糸切り	底部
24	第14図	土師質土器	不明	SK−01	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	底径:5.5	無高台の底部片。	底部外面に糸切り痕	底部
25	第14図	土師質土器	不明	SK−01	0.5mm大の砂粒含む。 やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	高台径:7.6	「ハ」の字状に開く短い高台をもつ。	内外面回転ナデ。切り離しは糸切りか。	底部
26	第14図	土師質土器	不明	SK−01	微砂粒含む。 密不良	(外)浅黄褐色 (内)浅黄褐色	高台径:9.0	「ハ」の字状に開く高台をもつ。	風化のため器壁が薄くなっている。	底部
27	第16図	土師器	土製支脚	SK−02	0.5mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)にぶい橙色	−	三方向に突起をもつタイプ。	強い縦方向のナデにより仕上げられている。	
28	第16図	須恵器	坏身	SK−02	密やや不良	(外)灰色 (内)灰色	高台径: 10.0	高台が底部の外縁につき、体部は斜め上方に向け立ち上がる。	内外面回転ナデ	底部
29	第16図	土師質土器	不明	SK−02	微砂粒含む。 密やや不良	(外)浅黄橙色 (内)褐灰色	底径:5.0	高台をもたない底部。底部は高台状を呈している。	風化	底部
30	第18図	須恵器	坏身	SK−03	密やや不良	(外)灰色 (内)灰色	口径:14.2	逆「ハ」の字状に伸びる体部をもち、口縁部で外反する。	内外面回転ナデ	

遺物番号	挿図番号	品目	器種	出土地点 土　層	胎土焼成	色調（外） 色調（内）	法量（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備　考
31	第18図	須恵器	坏身	SK-03	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にぶい赤褐色 (内)にぶい赤褐色	底径10cm前後	無高台の坏。	底部外面には糸切り	底部片
32	第18図	土師質土器	不明	SK-03	微砂粒含む。 密良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:14.2	逆「ハ」の字状に伸びる体部をもち、口縁部で外反する。	内外面回転ナデ	焼成の悪い須恵器?口縁部
33	第18図	土師質土器	不明	SK-03	微砂粒含む。 密不良	(外)にぶい橙色 (内)にぶい橙色	底径:4.8	無高台の底部。	風化	底部
34	第18図	土師質土器	不明	SK-03	微砂粒含む。 密良	(外)褐灰色 (内)灰黄褐色	底径:5.4	無高台の底部。	糸切りの痕跡が僅かに残る。	底部
35	第18図	土師質土器	不明	SK-03	微砂粒含む。 密良好	(外)にぶい橙色 (内)にぶい橙色	底径:5.6	無高台の底部。底部は低い高台状を呈する。	底部外面には糸切り	底部
36	第18図	土師質土器	不明	SK-03	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	底径:6.0	無高台の底部。	糸切りの痕跡が僅かに残る。	底部
37	第18図	土師質土器	不明	SK-03	微砂粒含む。 密不良	(外)橙色 (内)にぶい橙色	高台径: 不明	「ハ」の字状に開く高台部。	風化	底部小片
38	第18図	土師質土器	不明	SK-03	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にぶい赤褐色 (内)にぶい赤褐色	高台径: 不明	底部に高台の痕跡をとどめる。	風化	底部小片
39	第20図	土師器	鍋	SK-04	0.5mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)灰褐色 (内)にぶい橙色	口径 24cm前後	胴部の張り出しが口縁以上にならないものであり、口縁部はかなり分厚く、強く外反する。	厚みが不均一な粗製品。	
40	第20図	須恵器	壺	SK-04	1mm大の砂粒含む。 密良好	(外)灰色 (内)灰色	底径:13.4	平坦な底部より体部が斜上方に向けて真っ直ぐに伸びる。	底部外面ナデ。体部に紐作りによる平行な凹凸がみられる。	底部
41	第20図	土師質土器	無高台の坏	SK-04	1mm大の砂粒含む。 やや不良	(外)にぶい橙色 (内)にぶい橙色	口径:11.4 底径:5.6 器高:4.1	上げ底気味の底部より体部が逆「ハ」の字状に立ち上がり、体部下半に弱い膨らみをもつ。	底部の切り離しは風化のため不明。	第36図137～139と同形態
42	第20図	土師質土器	不明	SK-04	1mm大の砂粒含む。 不良	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色	口径:11.6	口縁の破片。体部上半に弱い膨らみをもつ。	風化	口縁部 無高台の坏か。
43	第22図	須恵器	坏蓋	SK-05	0.5mm大の砂粒含む。 良	(外)灰色 (内)灰色	摘み部径: 4.1	輪状摘みをもつ。	摘み部周辺に回転ヘラケズリ。天井部内面ナデ。	
44	第22図	須恵器	坏蓋	SK-05	密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:18.0	端部を下方に僅かに引き出している。	内外面回転ナデ	口縁部
45	第22図	須恵器	皿	SK-05	0.5mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:18.2	逆「ハ」の字状に大きく開く体部をもち、口縁部で緩く外反する。底部に高台の痕跡が残る。	内外面回転ナデ	
46	第22図	土師質土器	不明	SK-05	微砂粒含む。 密良	(外)橙色 (内)橙色	口径:13.6	口縁部が緩く外反する。	内外面回転ナデ	口縁部
47	第22図	土師質土器	不明	SK-05	微砂粒含む。 密良	(外)灰黄色 (内)灰黄色	口径:不明	体部は逆「ハ」の字状に大きく開き、口縁部は外方に向け折り曲げられている。	内外面回転ナデ	口縁部小片
48	第22図	土師質土器	不明	SK-05	微砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	底径:4.8	高台をもたない底部。	底部外面に糸切り痕	底部
49	第22図	土師質土器	不明	SK-05	微砂粒含む。 密やや不良	(外)黄灰色 (内)灰黄褐色	底径:5.6	高台をもたない底部。やや上げ底気味。	底部外面に糸切り痕	底部
51	第24図	土師器	甕・甑・竈類	P16	0.5mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:不明	外反する口縁端部の破片。	内外面ヨコナデ	口縁部小片
52	第24図	土師器	甕か鍋	P19	1mm大の砂粒含む。 不良	(外)黒褐色 (内)褐色	口径:23cm前後	外方に向け大きく外反する。	器壁の厚みが不均一な粗製品。	外面に炭化物付着
53	第24図	土師器	不明	P33	1mm前後の砂粒多く含む。 良	(外)橙色 (内)橙色	口径:不明	胴部は開き気味に立ち上がり、口縁端部付近にアクセントを付け若干外反する。	器壁の厚みが不均一な粗製品。	口縁部小片
54	第24図	須恵器	坏蓋	P1	密良	(外)灰色 (内)灰色	摘み部径: 6.0	輪状摘み部の破片。	切り離しは糸切り。	
55	第24図	土師質土器	不明	P32	1mm前後の砂粒含む。 不良	(外)淡黄色 (内)灰白色	底径:5.5	高台をもたない底部。	底部外面回転糸切り	底部
56	第24図	土師質土器	不明	P35	1mm大の砂粒含む。 やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	底径:7.0	高台をもたない底部。低い高台状を呈する。	切り離しは糸切り	底部
57	第24図	土師質土器	不明	P33	0.5mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	底径:5.6	高台をもたない底部。低い高台状を呈する。	底部外面回転糸切り	底部

遺物番号	挿図番号	品目	器種	出土地点 土　層	胎土焼成	色調（外） 色調（内）	法量（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備　考
58	第24図	土師質土器	不明	P36	微砂粒含む。 密不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい橙色	高台径: 約4.6cm	高台をもつ底部。断面三角形の高台をもつ。	内外面回転ナデ	底部
59	第24図	土師質土器	不明	P18	微砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	高台径:7.6	ハの字に開く断面三角形の高台がつく。風化で判然としないが、高台がもう少し伸びるものかもしれない。	風化	底部
60	第24図	土師質土器	不明	P9	微砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	高台径 10cm前後	「ハ」の字状に広がる長い高台をもつ。	内外面回転ナデ	底部
61	第25図	弥生土器	甕	A−2区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒多く含む。 やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:22.4	口縁部が強く屈曲して開き、端部は若干肥厚し平坦面を形成する。	端部には1条の凹線が観察できる。	弥生時代後期前半
62	第25図	弥生土器	甕	B−3区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒多く含む。 やや不良	(外)にぶい褐色 (内)にぶい褐色	口径:14.8	口縁部がやや外反気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。	口縁部外面に浅い4条の凹線文が観察できる。	弥生時代後期前半
63	第25図	弥生土器	甕、器台	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒多く含む。 不良	(外)にぶい橙色 (内)にぶい黄褐色	口径:不明	単純口縁に粘土紐を貼り付け口縁段部を形成している。	口縁部外面には2条の凹線文が観察できる。	弥生時代後期前半
64	第25図	弥生土器	壷・甕	B−4区 褐灰色土層	1mm大の砂粒多く含む。 やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)灰白色	口径:19.8	口縁部が水平に近く大きく開き、端部が下方に拡張される。	拡張部分に凹線文が施されている。	弥生時代後期前半
65	第27図	土師器	甕	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい橙色	口径:13.7	外反する口縁をもつやや小型の甕。球形の体部をもつ。	体部内面ヘラケズリ、外面ヨコナデ。	
66	第27図	土師器	甕	B−4区 褐灰色土層	2mm前後の砂粒多く含む。 やや良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:23.4	口縁部は外反し、撫で肩である。口縁端部を丸くおさめ肥厚させる。	体部内面縦方向のヘラケズリ、外面ヨコナデ。	
67	第27図	土師器	甕	B−4区 褐灰色土層	2mm前後の砂粒多く含む。 やや良好	(外)にぶい黄橙色 (内)灰黄褐色	口径:26.0	口縁部は外反し、撫で肩である。口縁端部を丸くおさめる。	体部内面縦方向のヘラケズリ、外面ヨコナデ。	
68	第27図	土師器	甕	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 良好	(外)にぶい褐色 (内)にぶい黄褐色	口径:17.9	口縁部は外反し、撫で肩である。口縁端部を丸くおさめる。	体部内面縦方向のヘラケズリ、外面ヨコナデ。	
69	第28図	土師器	甕	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒多く含む。 やや良好	(外)にぶい橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:27.0	口縁部は外反し、撫で肩である。口縁端部を丸くおさめる。	体部内面縦方向のヘラケズリ、外面縦方向のハケメ。	
70	第28図	土師器	甕	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 良	(外)にぶい橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:28.6	口縁部は外反し、撫で肩である。口縁端部を丸くおさめる。	体部内面縦方向のヘラケズリ、外面縦方向のハケメ。	
71	第28図	土師器	甕か鍋	B−4区褐灰色土層	1mm前後の砂粒多く含む。 やや不良	(外)にぶい橙色 (内)にぶい褐色	口径:19.0	外反する口縁をもち、胴部の張り出しが口縁以上にならない。	体部内面縦方向のヘラケズリ、外面ヨコナデ。	
72	第28図	土師器	甕か鍋	B−2・B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒多く含む。 良好	(外)にぶい褐色 (内)にぶい橙色	口径:24.8	外反する口縁をもち、胴部の張り出しが口縁以上にならない。	体部内面縦方向のヘラケズリ、外面ヨコナデ。	
73	第28図	土師器	甕か鍋	B−1区 褐灰色土層	2mm前後の砂粒多く含む。 良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい褐色	口径:19.6	外反する口縁をもち、胴部の張り出しが口縁以上にならない。	体部内面縦方向のヘラケズリ、外面風化。	
74	第28図	土師器	甕か鍋	C−3区 褐灰色土層	2mm前後の砂粒多く含む。 不良	(外)黒褐色 (内)にぶい褐色	口径:16.4 cm前後	外反する口縁をもち、胴部の張り出しが口縁以上にならない。	体部内面横方向のヘラケズリ、ヨコナデ。厚みの不均一な粗製品。	外面に炭化物付着
75	第28図	土師器	甕か鍋	B−1区 褐灰色土層	2mm前後の砂粒多く含む。 やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)浅黄橙	口径:32.6	外反する口縁をもち、胴部の張り出しが口縁以上にならない。大型のもの。	体部内面横方向のヘラケズリ、外面風化。	
76	第28図	土師器	甕か鍋	C−3区 褐灰色土層	3mm前後の砂粒多く含む。 良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄褐色	口径:23.4	外反する口縁をもち、胴部の張り出しが口縁以上にならない。	体部内面横方向のヘラケズリ、外面ヨコナデ。厚みの不均一な粗製品。	
77	第29図	土師器	甑	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 やや良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:27.9 底径:15.1 器高:25.9	底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部で緩く外反する。底部付近に径6mmの貫通孔。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ、外面縦方向のハケメ。	
78	第29図	土師器	甑	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	−	牛角状の把手	ナデ	
79	第29図	土師器	甑	C−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	−	牛角状の把手	内面ケズリ、外面ナデ	
80	第29図	土師器	甑	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 やや不良	(外)灰白色 (内)にぶい黄橙色	底径:14.4	底部付近に径6mmの貫通孔。	ヨコナデ	底部
81	第30図	土師器	土製支脚	B−4区 褐灰色土層	大粒の砂粒含む。 良	(外)にぶい黄橙色	−	三又突起タイプのもの。	外面ナデ。	上端部
82	第30図	土師器	土製支脚	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 良	(外)明黄褐色	−	三又突起タイプのもの。	外面ナデ。	上端部
83	第30図	土師器	土製支脚	B−2区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 やや不良	(外)にぶい黄橙色	底径:12.4	上げ底を呈する。	外面ナデ。底部ケズリか。	底部

遺物番号	挿図番号	品目	器種	出土地点 土　層	胎土焼成	色調（外） 色調（内）	法量（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備　考
84	第30図	土師器	土製 支脚	C−5区 褐灰色土層	0.5mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)にぶい黄橙色	底径:12.6	上げ底を呈する。	外面ナデ。底部ケズリか。	底部
85	第30図	土師器	土製 支脚	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒多く含む。 良	(外)にぶい黄橙色	底径:11.0	上げ底を呈する。	外面ナデ。底部ケズリ。	底部
86	第30図	土師器	土製 支脚	B−3・B−4区 褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)にぶい黄橙色	底径:11.0	上げ底を呈する。	外面ナデ・ケズリ。底部ケズリ。	底部
87	第31図	土師器	竈	B−4区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒多く含む。 良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄褐色	口径:30.8		外面ヨコナデ、内面縦方向のケズリ。	口縁から胴部にかけての破片。内面に煤付着。
88	第31図	土師器	竈	B−4区 褐灰色土層	3mm大の砂粒含む。 やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)灰黄褐色	−		外面縦方向のハケメ、内面縦方向のケズリ。	底部の破片。
89	第31図	土師器	竈	B−5区 褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 やや良好	(外)にぶい黄褐色	−		一部にハケメ。	焚口部分上部付近の破片。
90	第31図	土師器	竈	B−4区 褐灰色土層	1mm大の砂粒多く含む。 良	(外)にぶい黄橙色	−		ナデ。	焚口部分底部付近の破片。
91	第31図	土師器	竈	B−3区 褐灰色土層	1mm大の砂粒多く含む。 良好	(外)にぶい黄橙色	−		ナデ。	焚口部分上部付近の破片。
92	第31図	土師器	製塩 土器	C−3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やや不良	(外)にぶい橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:10cm前後	体部は開き気味に立ち上がり、口縁付近で内湾し端部を内側に括れさせる。	内外面とも丁寧なナデ仕上げである。	
93	第31図	土師器	擂鉢	褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 密良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	−	3〜4mmの間隔で6本の条溝が観察できる。	風化	14世紀前後
94	第32図	須恵器	坏蓋	B−3区 褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 密やや不良	(外)灰色 (内)灰色	口径:12.2 最大径:14.7 器高3.2 摘部径:4.4	口縁端部内面に返りをもつもの。輪状摘み。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢA・B期
95	第32図	須恵器	坏蓋	B−2・3、C−2・3区 褐灰色土層	密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:14.6 最大径:17.1 器高:3.0 摘部径:4.8	口縁端部内面に返りをもつもの。輪状摘み。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢA・B期
96	第32図	須恵器	坏蓋	B−2・3、C−3区 褐灰色土層	2mm以下の砂粒含む。 密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:13.6 最大径:16.3 器高:3.5 摘部径:6.0	口縁端部内面に返りをもつもの。輪状摘み。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢA・B期
97	第32図	須恵器	坏蓋	B−4、C−2・3区 褐灰色土層	3mm以下の砂粒含む。 密不良	(外)灰白色 (内)灰白色	口径:13.7 最大径:15.7 器高:3.05 摘部径:3.5	口縁端部内面に返りをもつ。宝珠形の摘みが押しつぶされたような形。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。	高広ⅢA・B期
98	第33図	須恵器	坏蓋	B−1・2区 褐灰色土層	2mm大の砂粒含む。 密やや不良	(外)灰色 (内)灰色	口径:15.2 器高:2.5 摘部径:4.8	口縁端部が下垂し、頂部に輪状摘みをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢB期頃
99	第33図	須恵器	坏蓋	B−4、C−4区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)褐灰色 (内)にぶい褐色	口径:15.8 器高:2.2 摘部径:5.2	口縁端部が下垂し、頂部に輪状摘みをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢB期頃
100	第33図	須恵器	坏蓋	B−2・4、C−2区 褐灰色土層	1mm前後の砂粒含む。 密やや不良	(外)灰色 (内)灰色	口径:14.8 器高:2.8 摘部径:5.0	口縁端部が下垂し、頂部に輪状摘みをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢB期頃
101	第33図	須恵器	坏蓋	C−2・3区 褐灰色土層	密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:15.4 器高:2.0 摘部径:4.0	口縁端部が下垂し、頂部に輪状摘みをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢB期頃
102	第33図	須恵器	坏蓋	C−2区 褐灰色土層	3mm以下の砂粒含む。 密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:13.3 器高:2.2 摘部径:3.9	口縁端部が下垂し、頂部に輪状摘みをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢB期頃
103	第33図	須恵器	坏蓋	C−2区 褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 密やや不良	(外)灰色 (内)灰色	口径:14.0 器高:2.4 摘部径:4.6	口縁端部が下垂し、頂部に輪状摘みをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは糸切り。	高広ⅢB期頃
104	第33図	須恵器	坏身	B−1区 褐灰色土層	密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:8.5 器高:2.8	やや丸みをもつ底部より体部が内湾気味に立ち上がり、口縁は斜上方に向けのびる。短頸壺の蓋の可能性もある。	底部外面に丁寧な回転ヘラケズリ。内面底部ナデ。	高広ⅡB期
105	第33図	須恵器	坏身	B−4、C−3区 褐灰色土層	2mm以下の砂粒含む。 密不良	(外)灰白色 (内)褐灰色	口径:16.9 器高:5.8 高台径:9.7	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部にはハの字状の高台がつく。	底部の切り離しはヘラ切りによる。	蓋94〜103に伴うものか
106	第33図	須恵器	坏身	B−2区 褐灰色土層	3mm以下の砂粒含む。 密不良	(外)灰色 (内)灰色	口径:12.4 器高:4.8 高台径:7.9	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部にはハの字状の高台がつく。	底部の切り離しは回転糸切りによる。	蓋94〜103に伴うものか
107	第33図	須恵器	坏身	B−1・2区 褐灰色土層	2mm以下の砂粒含む。 密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:13.7 器高:5.3 高台径:9.4	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部にはハの字状の高台がつく。	底部の切り離しは回転糸切りによる。内面底部ナデ。	蓋94〜103に伴うものか
108	第33図	須恵器	坏身	C−2・3区 褐灰色土層	密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:13.2 器高:− 高台径:−	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がる。底部に高台の痕跡。	底部の切り離しは静止糸切り。	蓋94〜103に伴うものか
109	第33図	須恵器	坏身	B−3・4、C−4区 褐灰色土層	密やや不良	(外)灰赤色 (内)灰色	口径:14.7 器高:4.7 高台径:8.6	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部にはハの字状の高台がつく。	底部の切り離しは静止糸切り。体部外面にヘラ記号。	蓋94〜103に伴うものか

遺物番号	挿図番号	品目	器種	出土地点 土　層	胎土焼成	色調（外） 色調（内）	法量（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備　考
110	第33図	須恵器	坏身?	B−4区 褐灰色土層	2mm大の砂粒含む。 密不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:− 器高:− 高台径:8.4	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部にはハの字状の高台がつく。	底部の切り離しはヘラ切りによる。内面底部ナデ。	蓋94～103に伴うものか
111	第33図	須恵器	坏身?	B−1区 褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:− 器高:− 高台径:9.0	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部にはハの字状の高台がつく。	底部の切り離しは回転糸切り。	蓋94～103に伴うものか
112	第33図	須恵器	坏身?	B−1・2区 褐灰色土層	密やや良好	(外)黄灰色 (内)黄灰色	口径:− 器高:− 高台径:8.7	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部にはハの字状の高台がつく。	底部の切り離しは回転糸切り。	蓋94～103に伴うものか
113	第33図	須恵器	坏身	B−1区 褐灰色土層	2mm以下の砂粒含む。 密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:12.3 器高:4.5 高台径:9.1	体部が直線的に外傾して伸びる。底部端に低い高台が貼り付けられている。	底部の切り離しは回転糸切りによる。	高広Ⅳ・Ⅴ期
114	第33図	須恵器	坏身	C−3区 褐灰色土層	密良	(外)灰白色 (内)灰白色	口径:12.5 器高:4.6 底径:8.3	無高台。体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がる。	底部の切り離しは回転糸切り。	高広ⅣA期
115	第33図	須恵器	坏身	B−3・C−3区 褐灰色土層	密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:12.0 器高:3.8 底径:8.5	無高台。体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がる。	底部の切り離しは回転糸切り。	高広ⅣA期
116	第33図	須恵器	坏身?	C−3区 褐灰色土層	2mm以下の砂粒含む。 密やや良好	(外)褐灰色 (内)褐灰色	口径:− 器高:− 底径:7.4	無高台。体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がる。	底部の切り離しは回転糸切り。	高広ⅣA期か
117	第33図	須恵器	坏身?	B−4区 褐灰色土層	密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:− 器高:− 底径:7.6	無高台。上げ底気味の底部より体部が直線的に外傾して伸びる。	底部の切り離しは回転糸切り。	高広ⅣA期か
118	第34図	須恵器	皿	B−3区 褐灰色土層	2mm以下の砂粒含む。 密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:17.6 器高:3.9 高台径:13.5	底部より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部で外反する。底部端に低い高台をもつ。	底部外面には回転糸切りが施されている。	高広ⅣA・B期に同様の形態あり。
119	第34図	須恵器	高坏	B−1区 褐灰色土層	2mm以下の砂粒含む。 密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:16.7	口縁部が内湾気味に緩やかに開き、坏部は浅い。	内外面回転ナデ。	透かしは観察できなかった。受部の破片
120	第34図	須恵器	高坏	B−4・6、C−4区 褐灰色土層	0.5mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)灰色 (内)灰色	口径:25.4	口縁が大きく開き、端部付近で屈曲し先端は上下に肥厚され凹面をもつ。	内外面回転ナデ。内面底部ナデ。	透かしは不明。受部の破片
121	第34図	須恵器	甕	B−2・3区 褐灰色土層	密良好	(外)褐灰色 (内)灰色	口径:18.4	肩部が良く張り出し、口縁は外反する。	口縁部内外面回転ナデ。体部内面同心円当具痕、外面タタキ。	口縁部
122	第34図	須恵器	壷甕類	B−2・C−2区 褐灰色土層	密良好	(外)暗灰黄色 (内)黄灰色	口径:13.6	小型の壷甕類。口縁端部を肥厚させ、凹面を形成する。	内外面回転ナデ。	口縁部
123	第34図	須恵器	壷	B−4区 褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	−	胴部に突帯が巡る。	内外面回転ナデ。	
124	第34図	須恵器	長頸瓶	B−3・4・5、C−5区 褐灰色土層	密良	(外)灰色 (内)灰色	高台径:7.8 胴部最大径:15.3	胴部上方に最大径。口頸部は胴部からつぼんで立ち上がった後、大きく外反。底部に高台をもつ。	頸部と肩部に2条の沈線が巡り、底部は糸切りによる切り離し。	高広ⅢB期
125	第34図	須恵器	壷	B−3・4区 褐灰色土層	密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:8.0	斜上方に向け真っ直ぐに立ち上がる口縁の破片。	内外面回転ナデ。	
126	第34図	須恵器	甑	C−2区 褐灰色土層	3mm以下の砂粒含む。 密良好	(外)灰色 (内)灰色	底径:5.0	平底を有する。	肩部に2条の沈線が巡り、底部に「×」のヘラ記号がある。	甑A7・A8型
127	第34図	中世須恵器	壷甕類	C−6区 褐灰色土層	2mm前後の砂粒含む。 密不良	(外)灰色 (内)灰白色	−		外面格子状のタタキ、内面はナデ。	小片のため産地は不明。胴部片
128	第35図	土師質土器	無高台の皿	B−5区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	口径:10.5 器高:2.3 底径:5.3	平坦な底部より逆「ハ」の字状に大きく開き、口縁に向け先細りする。	底部の切り離しは糸切りによる。	
129	第35図	土師質土器	高台付皿	C−4区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密良	(外)にぶい橙色 (内)橙色	口径:11.0 受部高:0.7	皿部は浅く横方向に直線的に開く。	風化	
130	第35図	土師質土器	高台付皿	C−3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密良	(外)にぶい橙色 (内)橙色	口径:11.9 受部高:0.8	皿部は浅く外方向に直線的に開く。	口縁部内外面回転ナデ。	
131	第35図	土師質土器	高台付皿	B−4区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや良好	(外)にぶい黄褐色 (内)灰黄色	口径:11.8 受部高:0.9	皿部は浅く外方向に直線的に開く。	口縁部内外面回転ナデ。	
132	第35図	土師質土器	高台付皿	B−3区 褐灰色土層	2mm以下の砂粒含む。 密良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:11.1 受部高:0.8	皿部は浅く外方向に直線的に開く。	口縁部内外面回転ナデ。	
133	第35図	土師質土器	無高台の坏	C−3区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	口径:12.2 器高:4.7 底径:6.0	上げ底気味の底部より体部が斜上方へ向け真っ直ぐに伸びる。	内外面に回転ナデによる凸凹痕。切り離しは回転糸切り。	
134	第35図	土師質土器	無高台の坏	C−3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やや良好	(外)にぶい黄褐色 (内)橙色	口径:11.3 器高:3.8 底径:4.8	低い高台状となる底部より体部が内湾して立ち上がり、端部へ向け開き気味に伸びる。	内外面に回転ナデによる凸凹痕。切り離しは糸切り。	
135	第35図	土師質土器	無高台の坏	B−4区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密良好	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄橙色	口径:11.3 器高:4.2 底径:5.5	低い高台状の底部より体部が斜上方へ向け真っ直ぐに伸び、端部を丸くおさめる。	内外面に回転ナデによる凸凹痕。切り離しは回転糸切り。	

遺物番号	挿図番号	品目	器種	出土地点 土　　層	胎土焼成	色調（外） 色調（内）	法量（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備　考
136	第35図	土師質土器	無高台の坏	B-3区 褐灰色土層	4mm大の砂粒含む。 密やや良好	(外)灰黄褐色 (内)にぶい黄橙色	口径:13.5 器高:4.4 底径:5.8	低い高台状の底部より体部が斜上方へ向け真っ直ぐに伸び、端部を丸くおさめる。	内外面に回転ナデによる凸凹痕。切り離しは糸切り。	
137	第36図	土師質土器	無高台の坏	B-4区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:11.4 器高:4.0 底径:5.6	底部より内湾気味に立ち上がり、先端へ向け緩く外反して端部に至る。体部下半に弱い膨らみ。	回転ナデによる凸凹痕は目立たない。切り離しは回転糸切り。	第20図41、第36図138・139と同形態
138	第36図	土師質土器	無高台の坏	C-3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やや良好	(外)橙色 (内)にぶい橙色	口径:12.1 器高:4.1 底径:5.6	上げ底気味の底部より内湾気味に立ち上がり、先端へ向け真っ直ぐに伸びる。体部下半に弱い膨らみ。	回転ナデによる凸凹痕は目立たない。切り離しは回転糸切り。	第20図41、第36図137・139と同形態
139	第36図	土師質土器	無高台の坏	C-3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密良	(外)橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:11.2 器高:4.0 底径:5.5	上げ底気味の底部より内湾気味に立ち上がり、先端へ向け緩く外反して端部に至る。体部下半に弱い膨らみ。	回転ナデによる凸凹痕は目立たない。切り離しは回転糸切り。	第20図41、第36図137・138と同形態
140	第36図	土師質土器	不明	C-5区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)にぶい橙色	口径:12.1	内湾気味に立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。	内外面回転ナデ。	口縁部
141	第36図	土師質土器	不明	C-5区 褐灰色土層	密良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	口径:12.2	斜上方へ向け開き気味に立ち上がり、口縁部は外方に向け先細りする。	内外面回転ナデ。	口縁部
142	第36図	土師質土器	不明	C-4区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい橙色	口径:13.0	内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに肥厚する。	内外面回転ナデの凸凹痕が著しい。	口縁部
143	第36図	土師質土器	不明	B-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	口径:17.0	内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。	内外面回転ナデ。	口縁部
144	第36図	土師質土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	口径:16.6	内湾気味に立ち上がった後、斜上方へ向け真っ直ぐに伸びる。	内外面回転ナデの凸凹痕が著しい。	口縁部
145	第36図	土師質土器	不明	B-3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密不良	(外)灰白色 (内)黒褐色	底径:4.1	無高台。上げ底気味の底部より体部が斜め上方へ向け伸びる。	内面底部に回転ナデ痕。外面風化	底部 内黒
146	第36図	土師質土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。密良好	(外)灰黄褐色 (内)灰黄褐色	底径:6.2	無高台。平坦な底部より体部が開き気味に伸びる。低い高台状を呈する。	底部の切り離しは回転糸切りによる。	底部
147	第36図	土師質土器	不明	C-4区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密不良	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色	底径:6.4	無高台。上げ底気味の底部より体部が内湾気味に伸びる。低い高台状を呈する。	底部の切り離しは糸切りによる。	底部
148	第36図	土師質土器	不明	C-3区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密良	(外)にぶい橙色 (内)にぶい橙色	底径:6.8	無高台。上げ底気味の底部より体部が内湾気味に伸びる。	底部の切り離しは糸切りによる。	底部
149	第36図	土師質土器	不明	B-4区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密やや良好	(外)灰褐色 (内)にぶい赤褐色	底径:5.5	無高台。上げ底気味の底部より体部が内湾気味に伸びる。低い高台状を呈する。	底部の切り離しは糸切りによる。	底部
150	第36図	土師質土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密良好	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	底径:5.4	無高台。上げ底気味の底部より体部が内湾気味に伸びる。	底部の切り離しは回転糸切りによる。	底部
151	第36図	土師質土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密良好	(外)にぶい橙色 (内)にぶい橙色	底径:5.8	無高台。上げ底気味の底部より体部が内湾気味に伸びる。	底部の切り離しは回転糸切りによる。	底部
152	第36図	土師質土器	不明	C-2区 褐灰色土層	微砂粒含む。 密不良	(外)橙色 (内)黒褐色	高台径:7.5 高台高:1.0	高台をもつ底部。「ハ」の字状に開く高台。体部は内湾気味に立ち上がる。	風化	底部 内黒
153	第36図	土師質土器	不明	B-3区 褐灰色土層	密良	(外)にぶい橙色 (内)浅黄橙色	高台径:7.8 高台高:1.4	高台をもつ底部。「ハ」の字状に開く高台。体部は内湾気味に立ち上がる。	高台取り付け部分ヨコナデ。	底部
154	第36図	土師質土器	不明	B-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密良	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色	高台径:8.6 高台高:1.4	高台をもつ底部。「ハ」の字状に開く高台。	高台内糸切り後ナデ。	底部
155	第36図	土師質土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	高台径:9.0 高台高:1.6	高台をもつ底部。「ハ」の字状に開く高台。体部は内湾気味に立ち上がる。	風化	底部
156	第36図	土師質土器	不明	C-3区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密良好	(外)にぶい橙色 (内)にぶい橙色	高台径:7.2 高台高:1.5	高台をもつ底部。「ハ」の字状に開く高台。体部は内湾気味に立ち上がる。	体部内外面回転ナデ。糸切り後、高台貼り付け。	底部
157	第36図	土師質土器	不明	C-4区 褐灰色土層	2mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)橙色 (内)橙色	高台径:7.7 高台高:1.3	高台をもつ底部。「ハ」の字状に開く高台。体部は斜め上方へ向け直線的に立ち上がる。	体部内外面回転ナデ。	底部
158	第36図	土師質土器	不明	B-5区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色	高台径:8.0 高台高:1.8	高台をもつ底部。径の割りに長めの高台をもつ。	体部内外面回転ナデ。	底部
159	第36図	土師質土器	不明	C-5区 褐灰色土層	1mm以下の砂粒含む。 密やや不良	(外)にぶい黄橙色 (内)にぶい黄橙色	底径:4.4 脚部高:2.7	台付きの底部。鼓形に近い形状の脚部。	風化	底部
160	第37図	緑釉陶器	皿	C-3区 褐灰色土層	硬質の須恵質。 緻密良好	灰色の素地に濃緑色の釉薬。	口径:12.6	口縁部付近が屈曲する。端部には切り込んでつくるタイプの輪花。	濃緑色の釉薬が均一に塗布されている。	東海系。時期は9世紀末～10世紀に入る頃。
161	第37図	緑釉陶器	皿	B-5区 褐灰色土層	硬質の須恵質。 緻密良好	灰色の素地に濃緑色の釉薬。	底径:5.5	「ハ」の字状に開く高台が貼り付けられている。	濃緑色の釉薬が全面に塗布されている。	160と同一個体と考えられる。

遺物番号	挿図番号	品目	器種	出土地点 土　層	胎土焼成	色調（外） 色調（内）	法量（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備　考
162	第37図	瓷器系陶器	甕	B-4区 褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 密良好	(外)灰褐色 (内)灰褐色	口径:不明	口唇部は上と下に摘み出し、外側は外反し内側は1段受け部がつくいわゆるN字状口縁。	内外面ヨコナデか。	13世紀後半頃と考えられる。
163	第37図	瓷器系陶器	甕	A-4区 褐灰色土層	2mm大の砂粒含む。 密良好	(外)灰褐色 (内)灰黄褐色	底径23cm前後	平底を有する。	内外面ヨコナデか。	162と同一個体か。
164	第38図	備前	甕	B-5区 褐灰色土層	3mm大の砂粒含む。 密良好	(外)灰褐色 (内)褐灰色	口径45cm前後	口縁部が垂直に立ち上がり、端部は丸く折り曲げられ玉縁状になる。	内外面ヨコナデか。	中世4期。 15世紀前葉～中葉。
165	第38図	備前	壷甕類	C-4区 褐灰色土層	3mm大の砂粒含む。 密良好	(外)褐灰色 (内)暗赤褐色	底径20cm前後	平底。体部との境は肥厚する。	内外面ヨコナデか。	底部
166	第38図	備前	擂鉢	C-5区 褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 密良好	(外)暗青灰色 (内)暗青灰色	口径:28.3	片口のつく口縁部。	口縁部内外面ヨコナデ。無釉で焼き締まっている。	168と同一個体か。
167	第38図	備前	擂鉢	B-5・6区 褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 密良	(外)暗赤褐色 (内)暗赤褐色	口径:27.5	口縁端部は上下に肥大化する。	内面に7本1組の条溝。	中世4期。 15世紀前葉～中葉。
168	第38図	備前	擂鉢	褐灰色土層	1mm大の砂粒含む。 密良好	(外)暗青灰色 (内)暗青灰色	底径:12.4	平坦な底部より体部が斜上方へ向け真っ直ぐに立ち上がる。	内面に条溝が刻まれている。	166と同一個体か。15世紀頃。
169	第38図	瀬戸・美濃	深皿	C-6区 褐灰色土層	緻密良好	灰白色の素地にオリーブ黄色の釉薬。	口径:26.6	大きく開き気味に立ち上がり、口縁部は内外に摘み出され凹面を形成する。	外面に沈線状の凸凹痕が巡る。	口縁部
170	第38図	瀬戸・美濃	深皿	B-5区 褐灰色土層	緻密良好	(外)灰白色 (内)灰白色	底径:12.4	平底の底部より体部が逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる。	底部外面糸切り。体部外面回転ナデ。	底部片
171	第38図	瀬戸・美濃	深皿	A-4区 褐灰色土層	緻密良好	内外面灰白色。内面の一部にオリーブ黄色の釉薬。	底径:不明	底部と体部の境にボタン状の脚が取り付けられている。	脚部周辺ナデ。	底部片
172	第38図	中国青磁	碗	C-3区 褐灰色土層	緻密良好	(外)にぶい黄色 (内)にぶい黄色	口径:16.3	口縁部が外反し端部を丸くおさめる。	浅黄橙の素地。二次的に火を受けたのか青磁釉がにぶい黄色を呈す。	上田D類。14～15世紀頃のものと考えられる。
173	第38図	中国青磁	碗	B-5区 褐灰色土層	緻密良好	(外)オリーブ灰色 (内)オリーブ灰色	口径16.4cm前後	口縁部が外反し端部を丸くおさめる。	灰白色の素地にいわゆる青磁釉が施されている。	上田D類。14～15世紀頃のものと考えられる。
174	第38図	中国青磁	碗	褐灰色土層	緻密良好	(外)灰オリーブ色 (内)灰オリーブ色	高台径:5.7	直立気味のしっかりとした高台をもつ。	内面見込み部分には文様が施され、高台外底面は無釉である。	14～15世紀代。
175	第38図	中国青磁	碗	褐灰色土層	緻密良好	(外)灰オリーブ色 (内)灰オリーブ色	高台径:6.0	直立気味のしっかりとした高台をもつ。	内面見込み部分には文様が施され、高台外底面は無釉である。	14～15世紀代。
176	第38図	中国青磁	碗	褐灰色土層	緻密良好	(外)灰オリーブ色 (内)灰オリーブ色	底径8.2cm前後	碁笥底の碗底部。	外面の底部付近に1条の沈線。	
177	第38図	中国白磁	皿	C-6区 褐灰色土層	緻密不良	(外)灰白色 (内)灰白色	口径:10.2	丸みをもって立ち上がる口縁部の破片。	透明釉が施されている。	178と同一個体か。
178	第38図	中国白磁	皿	褐灰色土層	緻密不良	(外)灰白色 (内)灰白色	底径:4.15	高台裏に抉りを入れ、波状を呈する。	体部下半部を露胎にしたものであり、見込みに胎土目状の痕跡が残る。	森田D群に相当する。15世紀代。
179	第38図	中国龔黒釉陶器	碗	C-6区 褐灰色土層	緻密良好	(外)黒褐色 (内)褐色	口径:12.0	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で屈曲させ端部は外反する。	灰白色の素地に黒釉が施されている。	16世紀初頭までのもの。
192	第42図	土師器	土製支脚	B-3区 整地層	1mm前後の砂粒含む。 良	(外)にぶい黄褐色	－	三又突起タイプのもの。	強いナデ調整。	
193	第42図	土師器	坏	B-4区 整地層	1mm以下の砂粒含む。 やや不良	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色	口径:13.1	浅い椀形を呈し、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。	底部外面手持ちヘラケズリ。	
194	第42図	土師器	不明品	C-3区 整地層	1mm前後の砂粒含む。 良	(外)にぶい黄褐色 (内)にぶい黄橙色	口径25cm前後	体部が垂直に立ち上がり口縁部で緩く外反する。	体部外面が横方向のナデ、内面に横方向のヘラケズリ。	口縁端小片
195	第43図	須恵器	坏蓋	B-3区 整地層	0.5nm大の砂粒含む。 密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:15.3 最大径:18.6 器高:2.6 摘部径:6.0	口縁端部内面に返りをもつもの。輪状摘み。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢA・B期
196	第43図	須恵器	坏蓋	B-3区 整地層	3mm以下の砂粒含む。 密不良	(外)灰色 (内)灰色	口径:13.3 最大径:16.4	口縁端部内面に返りをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。	高広ⅢA・B期
197	第43図	須恵器	坏蓋	B－3・C－3区 整地層	1mm前後の砂粒含む。 密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:15.4 器高:2.7 摘部径:6.7	口縁端部が下垂し、頂部に輪状摘みをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢB期頃
198	第43図	須恵器	坏蓋	B-4区 整地層	0.5mm大の砂粒含む。 密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:15.8 器高:4.2 摘部径:7.4	口縁端部が下垂し、頂部に輪状摘みをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは不明。	高広ⅢB期頃
199	第43図	須恵器	坏蓋	B－3・C－3区 整地層	2mm以下の砂粒含む。 密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:13.2 器高:3.2 摘部径:5.5	口縁端部が下垂し、頂部に輪状摘みをもつ。	摘み部周辺回転ヘラケズリ、内面天井部ナデ。天井部の切り離しは静止糸切り。	高広ⅢB期頃

遺物番号	挿図番号	品目	器種	出土地点 土　層	胎土焼成	色調（外） 色調（内）	法量（cm）	形態の特徴	調整・手法の特徴他	備　考
200	第43図	須恵器	坏蓋	C−3区 整地層	1mm前後の砂粒含む。 密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:16.0	下垂する口縁。	天井部外面回転ヘラケズリ。	高広ⅢB期頃
201	第43図	須恵器	坏身	B−3・4区 整地層	1mm前後の砂粒含む。 密良好	(外)黄灰色 (内)黄灰色	口径:18.0	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部に高台がつく。	高台外底面はナデ、ヘラ記号あり。糸切りかどうかは不明。	蓋195～200に伴うものか
202	第43図	須恵器	坏身	B−3・4、C−4区 整地層	微砂粒含む。 密やや良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:15.9 器高:4.8 高台径:7.1	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部に「ハ」の字状の高台がつく。	高台外底面はナデ、ヘラ記号あり。糸切りかどうかは不明。	蓋195～200に伴うものか
203	第43図	須恵器	坏身	C−4区 整地層	2mm以下の砂粒含む。 密不良	(外)灰色 (内)黄灰色	口径:15.4 器高:5.1 高台径:8.1	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部に「ハ」の字状の高台がつく。	高台外底面に静止糸切り痕。	蓋195～200に伴うものか
204	第43図	須恵器	坏身	C−4区 整地層	1mm前後の砂粒含む。 密やや不良	(外)灰色 (内)灰色	口径:13.8 器高:4.5 高台径:10.35	体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、底部に「ハ」の字状の高台がつく。	高台外底面に糸切り痕。	蓋195～200に伴うものか
205	第43図	須恵器	坏身	C−3区 整地層	2mm以下の砂粒含む。 密良	(外)灰色 (内)灰色	口径:12.6 器高:4.3 高台径:9.6	体部が直線的に外傾して伸びる。底部端に低い高台が貼り付けられている。	底部外面の切り離しは糸切りによる。	高広Ⅳ・Ⅴ期
206	第43図	須恵器	坏身	C−4区 整地層	1mm前後の砂粒含む。 密不良	(外)にぶい橙色 (内)にぶい橙色	口径:12.4 器高:4.3 底径:9.4	無高台の坏身。体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、口縁部が括れる。	底部外面に回転糸切りが施されている。	高広ⅣA期
207	第43図	須恵器	坏身	B−3区 整地層	密やや不良	(外)オリーブ灰色 (内)オリーブ灰色	口径:14.3 器高:3.6 底径:9.5	無高台の坏身。体部が丸みをもちながら曲線的に立ち上がり、口縁部が括れる。	底部外面に静止糸切りが施されている。	高広ⅣA期
208	第43図	須恵器	皿	B−3区 整地層	密不良	(外)灰黄色 (内)灰黄色	口径:14.6 器高:2.6 底径:11.2	平坦な底部より体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反し端部を丸くおさめる。	底部外面に回転糸切りが施されている。	高広ⅣA・B期に同様の形態あり。
209	第43図	須恵器	甕	B−3、C−4区 整地層	1mm前後の砂粒含む。 密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:16.4	肩部が良く張り出し、口縁は外反する。	口縁部内外面回転ナデ。体部内面同心円当具痕、外面タタキ痕。	口縁部
210	第43図	須恵器	壺甕類	C−3区 整地層	1mm前後の砂粒含む。 密良好	(外)黄灰色 (内)黄灰色	口径:14.6	小型の壺甕類。口縁端部を肥厚させ、凹面を形成する。	内外面回転ナデ。	口縁部
211	第43図	須恵器	壺	C−3区 整地層	密良好	(外)灰色 (内)灰色	口径:11.9	斜上方に向け真っ直ぐに立ち上がる口縁の破片。	口縁部外面に2条の沈線。	

第３表　禅定寺遺跡出土金属製品・鉄滓観察表

遺物番号	挿図番号	品　目	出土地点 土　層	法　量				備　考
				全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
2	第５図	銭貨	SB01、 PT３・４	銭径 2.35mm		銭厚 1.30mm	残存重量 1.4	熙寧元寶
6	第９図	鉄滓	SB02、 PT１	3.2	2.4	1.6	17.3	磁石に付着する。
7	第９図	鉄滓	SB02、 PT２	3.4	2.2	1.65	9.5	磁石に付着しない。
50	第22図	鉄滓	SK05	5.1	3.8	2.5	50.5	磁石に付着しない。
185	第40図	大刀	C−３区 褐灰色土層	6.0	3.2	0.6	12.1	
186	第40図	鍔	C−４区 褐灰色土層	5.8	3.5	1.1	48.5	磁石に付着しない。
187	第40図	紡錘車?	C−３区 褐灰色土層	4.35	−	0.6	11.5	
188	第40図	不明品	C−４区 褐灰色土層	8.5	3.0	0.4	11.6	復元直径11.4cm前後
189	第40図	不明品	C−４区 褐灰色土層	8.2	1.1	0.5	4.5	
190	第40図	椀形鍛冶滓	B−３区 褐灰色土層	7.0	6.4	3.9	181.8	磁石に付着しない。底部に砂粒の付着が認められる。
191	第40図	鉄滓	C−５区 褐灰色土層	4.6	3.7	3.2	42.3	磁石に付着しない。
212	第44図	椀形鍛冶滓	C−４区 整地層	5.8	5.1	3.0	109.1	磁石に付着する。底部に砂粒の付着が認められる。

第４表　禅定寺遺跡出土石器観察表

遺物番号	挿図番号	品目	石　材	出土地点	法　量				備　考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
180	第39図	石鏃	黒曜石	C－４区 褐灰色土層	残存長 2.3	6.0	2.2	0.8	凹基無茎式
181	第39図	打製石斧	流紋岩	C－６区 褐灰色土層	残存長 10.2	刃部幅 4.9	2.4	134.5	
182	第39図	石製丸鞆	無斑晶質流紋岩 またはトカライト	B－４区 褐灰色土層	表面縦 21.19mm 裏面縦 30.32mm	表面横 43.98mm 裏面横 45.31mm	8.13～9.21mm	24.9	３箇所に潜り孔。
183	第39図	不明品	軽石	C－３区 褐灰色土層	8.3	5.1	2.9	32.7	表裏が使用により滑らか。
184	第39図	砥石	凝灰岩	C－２・３区 褐灰色土層	14.7	7.7	7.5	1250	使用部分が窪む。

第５表　禅定寺遺跡遺跡出土木器観察表

遺物番号	挿図番号	品目	樹　種	出土地点	法　量			備　考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
3	第５図	柱根	不明	SB－01、PT12	残存長 51.3	9.6	8.5	丸太材なのか、角材なのか不明。
8	第９図	柱根	不明	SB－02、PT41	残存長 23.7	9.8	8.4	丸太材なのか、角材なのか不明。

第６表　平成10年度禅定寺遺跡出土中世陶磁器一覧表

青磁碗												青磁皿坏				
蓮B0	蓮B1	蓮B2	蓮B3	蓮B4	雷C1	雷C2	雷C3	龍D	龍E	景	不明その他	龍Ⅳ	稜花A	稜花B	景	不明その他
			4					7			破片 11 碁笥底の碗 1					

白磁皿							青花碗						青花皿					
A	B	C	D	E1	E2	不明その他	B	C	D	E	華南	不明その他	B1	C	華南C	B2	E	不明その他
			8			5											1	

天目	褐釉	その他の中国製品	中国製品合計	朝鮮王朝			東南アジア	国産品・その他	備　考
				碗皿	瓶	不明			
4	2		42	1				中世須恵器 5 土師器擂鉢 2 緑釉陶器 5 瀬戸灰釉折縁深皿 7 瀬戸鉄釉天目 1 瀬戸灰釉皿 3 肥前系陶器 5 肥前系陶器(岸嶽系) 2 肥前小壺 3 備前小擂鉢 17 備前壺甕類 128 瓷器系壺甕類 15	その他不明陶磁器・近現代の陶磁器も出土

第７表　禅定寺遺跡土坑一覧表

名称	挿図番号	検出地点	平面形	規模(cm)〔上縁長軸×短軸×深さ最大〕	出土遺物	性格	備　考
SK−01	第13図	B−5区	形の崩れた隅丸方形	133×118×35.0	土師器×36・須恵器×9・土師質土器×52	不明	
SK−02	第15図	C−5区	歪な円形	215×190×88.5	土師器×6・須恵器×13・土師質土器×4	不明	土坑を取り囲むように5つのピットを検出
SK−03	第17図	C−4区	円形	80.0×　×20.7	土師器×24・須恵器×6・土師質土器×23・軽石×1	不明	SK−03(新)−SK−04(古)
SK−04	第19図	C−3・4区	長方形	148以上×78×20.7	土師器×28・須恵器×8・土師質土器×10	土壙墓?	SK−03(新)−SK−04(古)
SK−05	第21図	C−3区	楕円形	162×98×20.9	土師器×40・須恵器×13・土師質土器×44・鉄滓×1	不明	
SK−06	第23図	B・C−7区	形の崩れた楕円形	97×78×15.0		不明	
SK−07	第41図	第2遺構面 B−3区	円形	160×　×47.8		不明	第2遺構面

第８表　SB01ピット一覧

名称	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号	備　考	名称	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号	備　考
PT1	30	29	38.7				PT12	43	−	46.8	柱×1	第5図3	
PT2	27	26	30.3	縄文土器×1			PT13	30	−	24.7			
PT3	39	−	36.5	須恵器×2・土師質土器×2・銭貨×1	第5図1・第5図2	地鎮跡か	PT14	26	26	20.7			
PT4	39	−	26.0				PT15	27	27	23.0			張り出し
PT5	31	26	27.5				PT16	27	26	21.5			張り出し
PT6	31	30	41.1	土師器×1			PT17	36	−	30.7	須恵器×1・土師器×15		張り出し
PT7	33	30.5	11.9				PT18	28	−	16.7			張り出し
PT8	43	42	51.4	石鏃×1			PT19	39	35	49.2			張り出し
PT9	47	44	62.4	須恵器×1・瓷器系×1									
PT10	27	−	20.0										
PT11	32	−	40.9										

第９表　SB01各ピット間距離一覧表

単位（cm）

建物桁行	PT1−PT2 308(10.2)	PT12−PT9 310(10.2)	PT12−PT10 320(10.6)	PT11−PT12 330(10.9)	PT2−PT3 245(8.1)	PT2−PT4 242(8.0)	PT9−PT8 240(7.9)
	PT10−PT8 225(7.4)	PT11−PT8 215(7.1)	PT3−PT5 243(8.0)	PT4−PT5 245(8.1)	PT8−PT7 241(8.0)		
建物梁間	PT1−PT14 195(6.4)	PT1−PT13 224(7.4)	PT5−PT6 240(7.9)	PT6−PT7 158(5.2)	PT13−PT12 165(5.4)	PT14−PT12 190(6.3)	
建物〜張り出し部まで	PT1−PT15 123(4.1)	PT2−PT16 119(3.9)	PT3−PT17 132(4.4)	PT3−PT18 133(4.4)	PT4−PT17 124(4.1)	PT4−PT18 125(4.1)	PT5−PT19 121(4.0)
張り出し部桁行	PT15−PT16 315(10.4)	PT16−PT17 255(8.4)	PT16−PT18 243(8.0)	PT17−PT19 240(7.9)	PT18−PT19 253(8.3)		

※右（　）内の単位は尺。１尺＝30.3cmで計算。

第10表　SB02ピット一覧

名称	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号	備考	名称	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号	備考
PT1	63	47	20.7	土師器×4・須恵器×4・鉄滓×1	第9図6		PT22	35	33	28.8			張り出し
PT2	−	33	58.0	土師器×6・鉄滓×1	第9図7		PT23	30	28	17.3			張り出し
PT3	−	−	−			SK−04と切り合う。未検出	PT24	30	28	44.0			張り出し
PT4	36	35	40.2	土師質土器×1			PT25	21	20	14.6			張り出し
PT5	32	30	76.5	土師器×4・須恵器×1			PT26	53	49	24.0			張り出し
PT6	41	32	51.0				PT27	29	26	24.8			張り出し
PT7	32	29	58.4				PT28	22	22	36.5	須恵器×3・土師器×1		張り出し?
PT8	33	33	43.4				PT29	28	25	35.3			張り出し?
PT9	38	30	40.8	須恵器×1			PT30	18	18	22.0			張り出し?
PT10	34	33	30.8				PT31	31	26	46.7	須恵器×2		張り出し?
PT11	41	39	40.5	土師器×5・須恵器×1			PT32	30	26	34.0			張り出し?
PT12	36	36	33.2	土師質土器×1			PT33	24	22	18.0			張り出し?
PT13	39	33	27.5			張り出し	PT34	23	20	5.1			張り出し?
PT14	36	30	14.5			張り出し	PT35	29	26	19.8			張り出し?
PT15	53	−	39.2	須恵器×2・土師器×15	第9図4・5	張り出し	PT36	28	26	18.1			張り出し?
PT16	31	25	34.3			張り出し	PT37	33	32	45.8			張り出し?
PT17	34	29	53.0	須恵器×3・土師器×1・土師質土器×1		張り出し	PT38	27	27	20.0			張り出し?
PT18	34	−	56.8			張り出し	PT39	37	37	54.2			張り出し?
PT19	17	16	24.6			張り出し	PT40	28	26	31.1			張り出し?
PT20	33	28	30.1			張り出し	PT41	28	27	65.6	柱×1	第9図8	張り出し?
PT21	26	26	49.5			張り出し	PT42	41	37	33.6			張り出し?

第11表　SB02各ピット間距離一覧表

単位（cm）

建物桁行	PT1−PT2 435(14.4)	PT10−PT11 421(13.9)	PT9−PT8 440(14.5)	PT2−PT3 (320)(10.6)	PT11−PT12 325(10.7)	PT8−PT7 322(10.6)	PT3−PT4 (317)(10.5)
	PT12−PT5 326(10.8)	PT7−PT6 328(10.8)					
建物梁間	PT1−PT10 220(7.3)	PT2−PT11 260(8.6)	PT3−PT12 (246)(8.1)	PT4−PT5 263(8.7)	PT10−PT9 228(7.5)	PT11−PT8 230(7.6)	PT12−PT7 232(7.7)
	PT5−PT6 228(7.5)						
建物～張り出し部まで	PT1−PT13 130(4.3)	PT2−PT14 125(4.1)	PT3−PT15 (121)(4.0)	PT4−PT16 110(3.6)	PT4−PT19 132(4.4)	PT6−PT20 100(3.3)	PT6−PT22 110(3.6)
	PT7−PT23 110(3.6)	PT8−PT24 112(3.7)	PT9−PT25 125(4.1)	PT10−PT27 325(10.7)			
張り出し部桁行	PT13−PT14 420(13.9)	PT25−PT24 440(14.5)	PT14−PT15 315(10.4)	PT24−PT23 325(10.7)	PT15−PT16 337(11.1)	PT23−PT22 324(10.7)	PT25−PT26 286(9.4)
	PT16−PT17 75(2.5)	PT16−PT18 90(3.0)	PT22−PT21 115(3.8)				
張り出し部梁間	PT19−PT18 98(3.2)	PT19−PT17 120(4.0)	PT20−PT21 110(3.6)	PT26−PT27 335(11.1)			

※右（　）内の単位は尺。1尺＝30.3cmで計算。

第12表　SB03ピット一覧

名称	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号	備考	名称	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号	備考
PT1	37	37	27.0	須恵器×1・土師器×2			PT13	30	－	38.8	土師器×2・土師質土器×2		
PT2	42	39	36.5	土師器×4			PT14	24	－	31.0			
PT3	34	34	27.2	土師質土器×1			PT15	26	－	42.1			
PT4	35	34	23.2				PT16	30	25	34.2			
PT5	34	33	32.9				PT17	30	26	36.2	土師器×1・土師質土器×1		
PT6	37	33	19.1				PT18	32	－	30.4			
PT7	20	16	21.5				PT19	38	－	33.5			
PT8	14	－	17.3				PT20	33	27	42.3			
PT9	20	20	17.3				PT21	22	20	39.7	須恵器×1・土師器×2・土師質土器×1		
PT10	23	22	19.0				PT22	27	19	25.2			
PT11	24	－	33.3				PT23	26	24	29.7	土師質土器×2	第10図9	
PT12	27	27	26.2	土師質土器×1									

第13表　SB03各ピット間距離一覧表

単位（cm）

建物桁行	PT1−PT2 226(7.5)	PT17−PT18 225(7.4)	PT17−PT19 210(6.9)	PT16−PT14 195(6.4)	PT16−PT15 205(6.8)	PT16−PT13 215(7.1)	PT2−PT3 265(8.7)
	PT18−PT20 260(8.6)	PT18−PT21 253(8.3)	PT19−PT20 280(9.2)	PT19−PT21 273(9.0)	PT14−PT11 278(9.2)	PT14−PT12 263(8.7)	PT15−PT11 265(8.7)
	PT15−PT12 253(8.3)	PT13−PT11 257(8.5)	PT13−PT12 242(8.0)	PT3−PT4 247(8.2)	PT3−PT5 250(8.3)	PT20−PT22 245(8.1)	PT20−PT23 247(8.2)
	PT21−PT22 257(8.5)	PT21−PT23 260(8.6)	PT11−PT10 240(7.9)	PT12−PT10 253(8.3)	PT4−PT6 222(7.3)	PT5−PT6 215(7.1)	PT22−PT7 228(7.5)
	PT22−PT8 238(7.9)	PT23−PT7 222(7.3)	PT23−PT8 234(7.7)	PT10−PT9 232(7.7)			
建物梁間	PT1−PT17 175(5.8)	PT2−PT18 175(5.8)	PT2−PT19 162(5.3)	PT3−PT20 170(5.6)	PT3−PT21 190(6.3)	PT4−PT23 194(6.4)	PT4−PT22 175(5.8)
	PT5−PT23 165(5.4)	PT5−PT22 150(5.0)	PT6−PT7 155(5.1)	PT6−PT8 155(5.1)	PT17−PT16 190(6.3)	PT18−PT14 181(6.0)	PT18−PT15 175(5.8)
	PT18−PT13 175(5.8)	PT19−PT14 190(6.3)	PT19−PT15 190(6.3)	PT19−PT13 186(6.1)	PT20−PT12 182(6.0)	PT20−PT11 195(6.4)	PT21−PT12 162(5.3)
	PT21−PT11 177(5.8)	PT22−PT10 192(6.3)	PT23−PT10 176(5.8)	PT7−PT9 195(6.4)	PT8−PT9 197(6.5)		

※右（　）内の単位は尺。1尺＝30.3cmで計算。

第14表　SB04ピット一覧

名称	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号	備考	名称	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号	備考
PT1	32	－	15.3				PT13	39	39	30.2	須恵器×1・土師器×2・土師質土器×2		
PT2	34	－	38.8	須恵器×5・土師器×4・土師質土器×8	第11図13		PT14	－	－	－			調査区外。未検出
PT3	－	－	－			SK－04と切り合う。未検出	PT15	28	25	31.3	須恵器×1・土師器×1		
PT4	40	35	38.8	土師器×13	第11図11・12		PT16	29	20	36.6			張り出し
PT5	48	－	43.7	土師器×3・須恵器×1			PT17	22	22	19.9			張り出し
PT6	24	－	14.2	土師質土器×3			PT18	23	21	24.0	土師器×3		張り出し
PT7	23	22	40.3				PT19	15	15	20.0			張り出し
PT8	41	－	26.8				PT20	38	34	22.6			張り出し
PT9	40	－	33.6	土師器×1	第11図10		PT21	19	18	8.9			張り出し
PT10	33	28	26.2				PT22	15	14	26.7			張り出し
PT11	27	26	38.6	須恵器×1・土師器×1・土師質土器×1			PT23	29	29	42.5	土師器×7		SB－04?
PT12	26	25	39.3	土師器×4・土師質土器×2									

第15表　SB04各ピット間距離一覧表

単位（cm）

建物桁行	PT1－PT3 (226)(7.5)	PT2－PT3 (215)(7.1)	PT14－PT13 (225)(7.4)	PT3－PT4 (245)(8.1)	PT13－PT12 250(8.3)	PT4－PT5 240(7.9)	PT12－PT11 245(8.1)
	PT5－PT6 230(7.6)	PT5－PT7 238(7.9)	PT11－PT10 217(7.2)				
建物梁間	PT6－PT8 240(7.9)	PT6－PT9 246(8.1)	PT7－PT8 230(7.6)	PT7－PT9 235(7.8)	PT1－PT15 218(7.2)	PT2－PT15 214(7.1)	PT8－PT10 186(6.1)
	PT9－PT10 176(5.8)	PT15－PT14 (240)(7.9)					
建物～張り出し部まで	PT1－PT16 161(5.3)	PT2－PT16 166(5.5)	PT3－PT17 (190)(6.3)	PT4－PT18 181(6.0)	PT4－PT19 190(6.3)	PT5－PT20 205(6.8)	PT6－PT21 200(6.6)
	PT6－PT22 190(6.3)	PT7－PT21 210(6.9)	PT7－PT22 198(6.5)				
張り出し部桁行	PT16－PT17 235(7.8)	PT17－PT18 241(8.0)	PT17－PT19 245(8.1)	PT18－PT20 239(7.9)	PT19－PT20 235(7.8)	PT20－PT21 213(7.0)	PT20－PT22 225(7.4)
P23からの梁間	PT5－PT23 232(7.7)	PT23－PT11 213(7.0)					

※右（　）内の単位は尺。1尺＝30.3cmで計算。

第16表　掘立柱建物以外の遺物出土ピット一覧表

単位（cm）

ピット番号	区	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号	ピット番号	区	直径最大	直径最小	深さ最大	出土遺物	遺物挿図番号
P1	A・B2	36	32	57.7	土師質土器×2・須恵器×1	第24図54	P21	B5	22	22	22.0	土師器×8	
P2	B2	29	－	33.5	土師質土器×1		P22	B5	21	19	20.3	土師器×1	
P3	B2	29	26	35.6	土師器×3		P23	B5	24	－	41.9	須恵器×1・土師質土器×1	
P4	B2	23	23	26.5	須恵器×1		P24	B5	20	20	26.8	土師質土器×2	
P5	C2	22	21	11.7	土師器×2		P25	B5・6	22	20	33.2	土師質土器×7	
P6	C2	25	24	18.7	土師質土器×1		P26	B5・6	26	－	17.4	須恵器×1	
P7	C2	35	28	47.4	土師器×4		P27	B・C5	29	29	39.7	土師器×1	
P8	C2	20	19	17.9	土師器×1		P28	C5	－	30	25.6	土師器×1	
P9	B3	22	21	29.6	土師器×3・土師質土器×1	第24図60	P29	C5	24	21	36.8	須恵器×1・土師器×1・土師質土器×4	
P10	B4	32	31	15.5	須恵器×1		P30	C5	30	29	13.4	須恵器×2・土師器×1・土師質土器×3	
P11	B4	27	16	27.9	土師器×3・土師質土器×1		P31	C5	29	25	40.8	土師器×2・土師質土器×2	
P12	B4	27	27	16.5	土師器×3		P32	C5	28	27	47.0	土師器×4・土師質土器×14	第24図55
P13	B4	33	27	42.5	土師器×10・須恵器×2		P33	C5	22	19	38.8	土師器×3・土師質土器×3	第24図53・57
P14	B4	16	15	33.0	土師器×4		P34	C5	28	22	27.8	土師器×2・土師質土器×1	
P15	B4	17	－	26.1	土師器×2・土師質土器×1		P35	B6	29	28	15.8	土師質土器×1	第24図56
P16	B4・5	39	29	13.0	土師器×1・土師質土器×1	第24図51	P36	B・C6	21	21	41.0	土師質土器×1	第24図58
P17	C4	20	16	37.0	土師器×3		P37	C6	22	22	21.4	土師器×1	
P18	C4	48	36	40.4	須恵器×2・土師器×1・土師質土器×4	第24図59	P38	C6	22	20	12.9	須恵器×1	
P19	C4	29	28	46.5	土師器×1	第24図52	P39	C6	33	28	29.0	土師器×1	
P20	B5	21	19	15.4	土師器×1・土師質土器×1								

第６章　自然科学的分析

禅定寺遺跡出土木製品の樹種調査結果

㈱吉田生物研究所　　汐見　真
京都造形芸術大学　　岡田　文男

１．資料　　資料は出土した木製品２点である。
２．方法　　剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、プレパラートを作成する。このプレパラートを顕微鏡で観察して樹種を同定する。
３．結果　　樹種同定結果の表と顕微鏡写真を示し、以下に主な解剖学的特徴を記す。

第５図３（柱根）　ブナ科クリ属クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大導管（～500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小導管が単独あるいは２～３個集まって火炎状に配列している。柾目では導管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織がみられ、軸方向要素として導管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維がみられる。

以上の組織的特徴からクリと同定した。

第９図８（柱根）　ブナ科クリ属クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大導管（～500 μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小導管が単独あるいは２～３個集まって火炎状に配列している。柾目では導管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織がみられ、軸方向要素として導管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維がみられる。

以上の組織的特徴からクリと同定した。

【参考文献】

島地謙・伊藤隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版　1988年
島地謙・伊藤隆夫「図説木材組織」地球社　1982年
伊藤隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記録Ⅰ～Ⅳ」京都大学木質科研究所　1995年～
北村資料・村田源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社　1979年

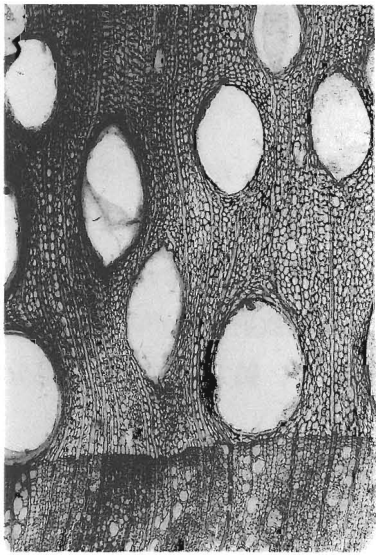
【使用顕微鏡】

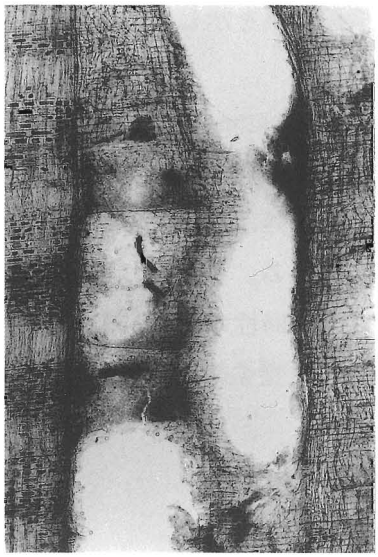
Nikon MICROFLEEX UFX-DX Type115

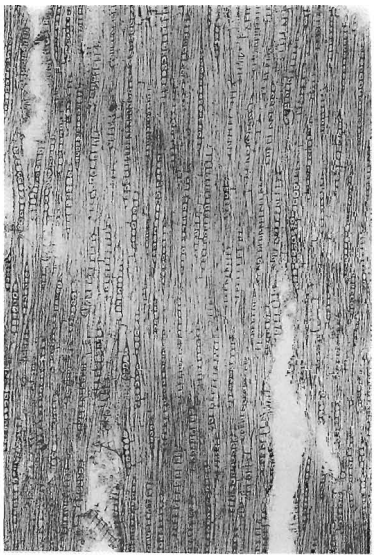
禅定寺遺跡出土木製品樹種同定表

資料番号	報告書掲載番号	品名	樹種
188	第5図3	柱根	ブナ科クリ属クリ
32	第9図8	柱根	ブナ科クリ属クリ

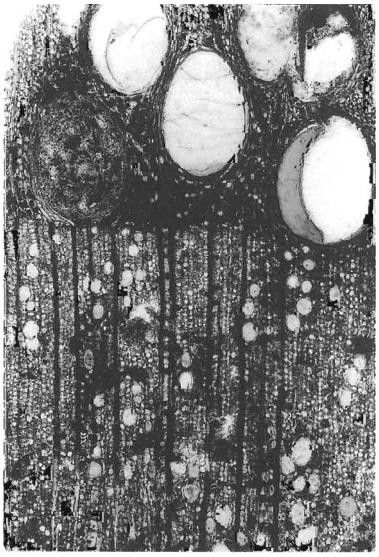
第5図3（柱根）　ブナ科クリ属クリ

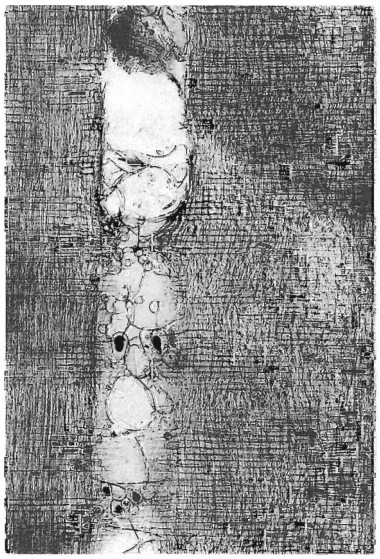

木口×40

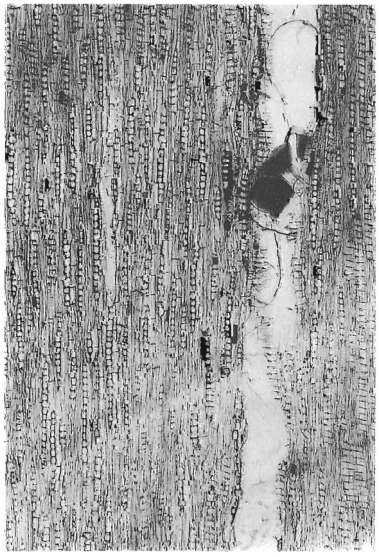

柾目×40


板目×40

第9図8（柱根）　ブナ科クリ属クリ


木口×40


柾目×40


板目×40

第7章　追　補

昭和58（1983）年度八雲幼稚園移転新築
工事に伴う禅定寺遺跡発掘調査概要報告

例　　言

1．本章は、八雲村の依頼を受けて八雲村教育委員会が昭和58（1983）年度に実施した八雲村幼稚園移転新築工事予定地内の埋蔵文化財発掘調査の概要を取りまとめたものである。

報告書の作成にあたっては、松江市と合併する以前の平成15年度に作成し、印刷については合併後の平成18年度に行った。従って、本文の一部に合併前の内容の記述があることをお断りしておく。

2．本章で扱う遺跡の所在地及び調査面積は次のとおりである。

禅定寺遺跡　島根県松江市八雲町東岩坂110番地外９筆

本調査面積　A区　　約300m²

　　B・C区　約540m²

3．現地調査期間は次のとおりである。

確認調査　昭和58年10月18日～12月10日

本 調 査　昭和59年１月12日～３月９日

4．調査組織は以下のとおりである。

［昭和58年度］　現地調査

調 査 主 体　八雲村教育委員会　教育長　小松正雄

調査指導者　村上勇（現：広島県立美術館）

調査担当者　宮本徳昭（社会教育係）

作　業　員　石原粂一、石原貞子、石原茂子、石原常子、石原文夫、石原文雄、石原美智子
石原幸夫、稲田秀夫、岩田悟郎、曽田　稔、為石重徳、外谷幸子、三好澄江

［平成15年度］　報告書作成

調 査 主 体　八雲村教育委員会　教育長　泉和夫

事　務　局　三好淳（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者　川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員　田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

遺 物 整 理　高尾万里子

5．本章の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。（順不同、敬称略。所属は平成15年当時。）

広江耕史（島根県教育庁文化財課）、西尾克己・林建亮・池淵俊一・守岡正司（島根県埋蔵文化財発掘調査センター）

6．本章の編集と執筆は、昭和58年度調査の記録を基に上記の協力者の助言を得ながら川上が行った。よって、掘立柱建物跡については現地を確認したわけではなく、図上で復元したものである。従って、建物跡の軒数等については不正確といわざるを得ない。

7．本書で使用した方位は磁北を示す。

8．本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

SB…掘立柱建物跡　P…ピット　SK…土坑　SD…溝　T…トレンチ

SX…性格不明遺構

9．本遺跡出土遺物及び調査記録は松江市教育委員会で保管している。

第１節　調査に至る経緯

八雲村では、村北部を中心に昭和48年以降、民間の住宅団地の開発が相次いだ。これに伴い昭和30年以降減少していた本村の人口は、住宅団地の開発が始まってから毎年100人以上の増加が続いており、今後も県都松江市のベットタウンとして増加の傾向を示している。同時に、児童数も年々増加し、既存の教育施設は既に手狭な状態となっている。今後、益々児童数の増加が見込まれており、施設及び環境面の改善が急務となっている。

これに対処するため、八雲村では小学校の増築工事、中学校・学校給食センターの移転改築工事等が計画された。今回はその第１番目として、八雲幼稚園の移転新築工事を実施することとなった。建設予定場所としては八雲保育所の隣接地にあたる水田・畑地並びに山林部分が選定された。

協議を受けた八雲村教育委員会では、ひとまず開発予定地内の分布調査を実施することとした。建設予定地周辺は、禅定寺古墳群・禅定寺横穴墓群・禅定寺遺跡が存在しており、遺跡の密集地帯として周知されている場所であった。今回の分布調査においては、古墳・横穴等の遺構は確認できず、畑地及び水田の耕作土層中からも遺物等は発見されなかった。しかし、立地や字名から禅定寺遺跡が開発予定地内まで広がっていると考えられることから範囲確認調査の必要を決定し、その旨を八雲村に回答した。

八雲村は、昭和58年10月６日付けで文化財保護法第57条の３の手続きをし、それを受けて八雲村教育委員会も同日付けで文化財保護法第98条の２第１項の手続きを行った。この後、予想以上に遺跡の範囲が広がっていたことから調査期間の延長が必要となり、昭和59年１月24日に発掘調査期間延長の内容変更通知を提出している。

第２節　調査の経過

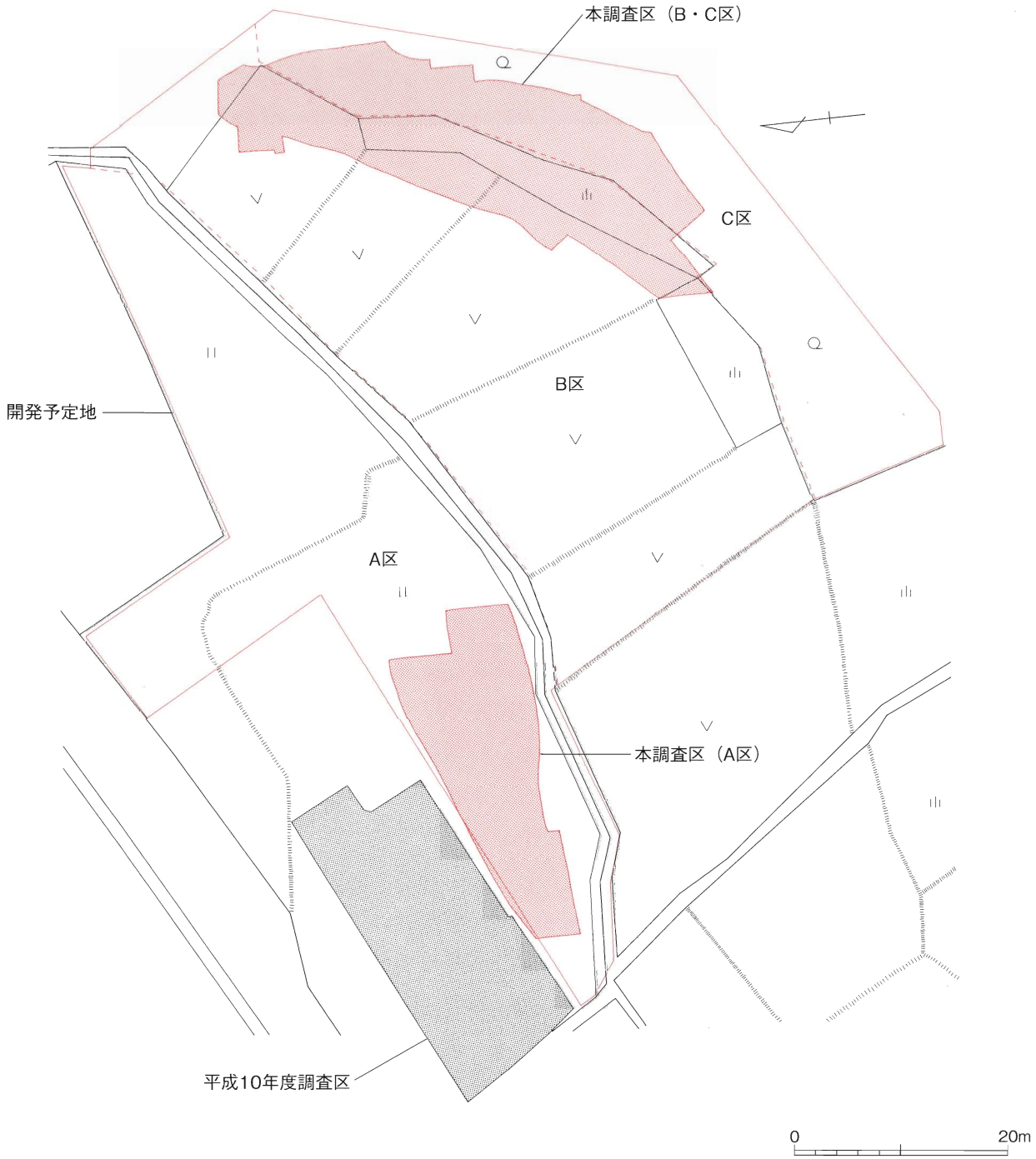
調査はまず、遺跡の範囲と性格を把握し、本調査に備える意味での試掘調査を実施している。工事用基準杭を利用して直線を設け、これと直交するように10×10mのグリッドを組み、グリッド毎に４×４ｍトレンチ34本を設定した。この後、昭和58年10月18日から掘削作業に取りかかり、必要が認められれば随時トレンチの拡幅を行っている。範囲確認調査が進展していくにつれ、遺構・遺物が予想以上に遺存しており、発掘調査期間の延長が必要となった。村との協議で、発掘調査を最優先に実施しながら、遺構の検出されなかったトレンチ周辺については工法を変更して工事に入ることとなった。随時遺構の精査・写真撮影を行い、12月10日に試掘調査を終了した。試掘調査の結果、開発予定地の約４分の１にあたる800m^{2}の範囲で遺物の散布と柱穴等の遺構が確認されたため、引き続き八雲村教育委員会が主体となり本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は試掘調査結果を基に調査区をA区・B区・C区の３箇所に分け実施している。昭和59年１月12日から表土層を重機により除去することから始め、これと併行して１月14日より手掘りによる掘削作業を開始した。随時遺構の精査、写真撮影を行い、３月９日に全体写真の撮影と撤収作業を行い現地での調査を終了した。

第３節　遺跡の概要

今回調査を行った禅定寺遺跡は、水田、畑地、及び丘陵斜面に位置している。現地調査では便宜的に水田をA区、畑地をB区、丘陵斜面をC区の３つに分け実施している。レベルは水田に位置するA区が最も低く標高28.25～28.75mを測る。B区は標高31.00m前後、C区が標高35.50m前後である。以下、検出された遺構について区毎に概略を記す。

なお、出土遺物については確認調査時に試掘トレンチから出土したものか、本調査時に出土したものか判断できなかったため、区毎に一括して取り扱っている。



第45図　調査区配置図（1:600）

1. A区の調査

A区は標高標高28.25～28.75mを測る水田中に位置する。この場所は第４章で取り扱った平成10年度調査区の隣接地にあたる。遺構としては溝状遺構１本（SD01）と76個のピットが検出されており、ピットの中から掘立柱建物跡３棟（SB01～03）を復元することができた。ピット内からは土師質土器[註1]・中国青磁片などが出土しており、柱根や河原石の根石をもつものもある。また、遺構外からは須恵器・土師器・備前擂鉢・中国青磁が出土している。

第46図　A区遺構位置図（1/200）

1．SB01（第48図）

調査区の標高28.25～28.75mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット６個（Ｐ１～Ｐ６）があり、これと対応するピットを選び出してSB01とした。南西側の梁間中央の柱と南東側の桁行の柱を欠いているが、N－70.5°－Eを主軸とする梁間２間×桁行５間の建物跡として復元した。梁間２間×桁行４間の建物跡としても復元できることから、建物跡が重複している可能性も考えられる。梁間２間×桁行５間として復元した場合の規模は、梁間長4.55と4.70m、桁行長12.80と12.90mである。柱間距離は、梁間が2.30～2.40m、桁行が2.50～2.65mを測る。ピットは円形または楕円形を呈し、現状での規模は長軸径で21～59cm、深さ最大20～51cmを測る。SB02・03と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。出土遺物としてはＰ２より土師器、Ｐ６より須恵器、Ｐ１～Ｐ４・P11の底部より根石と考えられる河原石が出土している。

2．SB02（第49図）

SB01と床面を共有するように柱の並びがあり、SB02とした。北西側の梁間中央の柱を欠いているが、梁間２間×桁行２間の総柱となる可能性もある。規模は梁間長4.15と4.30m、桁行長6.00と6.10mを測る。柱間距離は梁間が2.05～2.10m、桁行が2.97～3.13mを測る。ピットの現状での規模は長軸径で22～32cm、深さ最大26～34cmを測る。SB01・03と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。標高は28.25～28.75mを測り、主軸はN－69°－Eである。

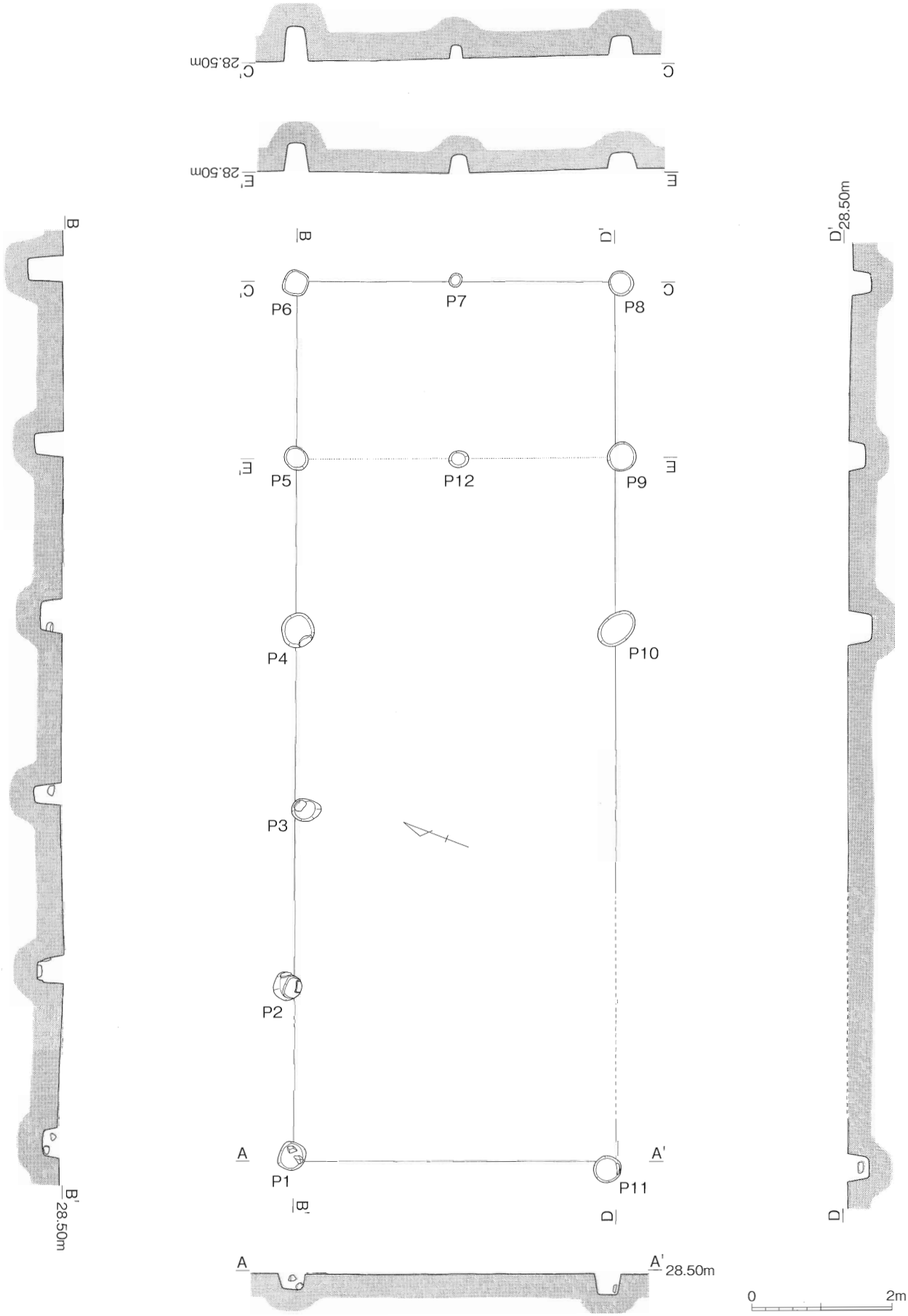
3．SB03（第50図）

調査区の標高28.25～28.75mを測る場所に、南西－北東に向け一直線に並ぶピット５個（PT１～PT５）があり、これとほぼ対応するピットを選び出してSB03とした。南西側の梁間と北西側の桁行の柱を欠いているため、杭列とすべきものかもしれない。梁間２間×桁行３間、或いは梁間２間×桁行４間としても復元できるものであり、梁間２間×桁行４間として復元した場合の規模は、梁間長7.70m、桁行長3.40mを測る。柱間距離は梁間側が1.60～1.80m、桁行側が1.48～2.40mを測る。ピットの現状での規模は長軸径で26～38cm、深さ最大16～54cmを測る。SB01・02と切り合い関係が認められたが、新旧関係は不明である。主軸はN－68°－Eである。出土遺物としてはＰ８・９の底部より根石と考えられる河原石が出土している。

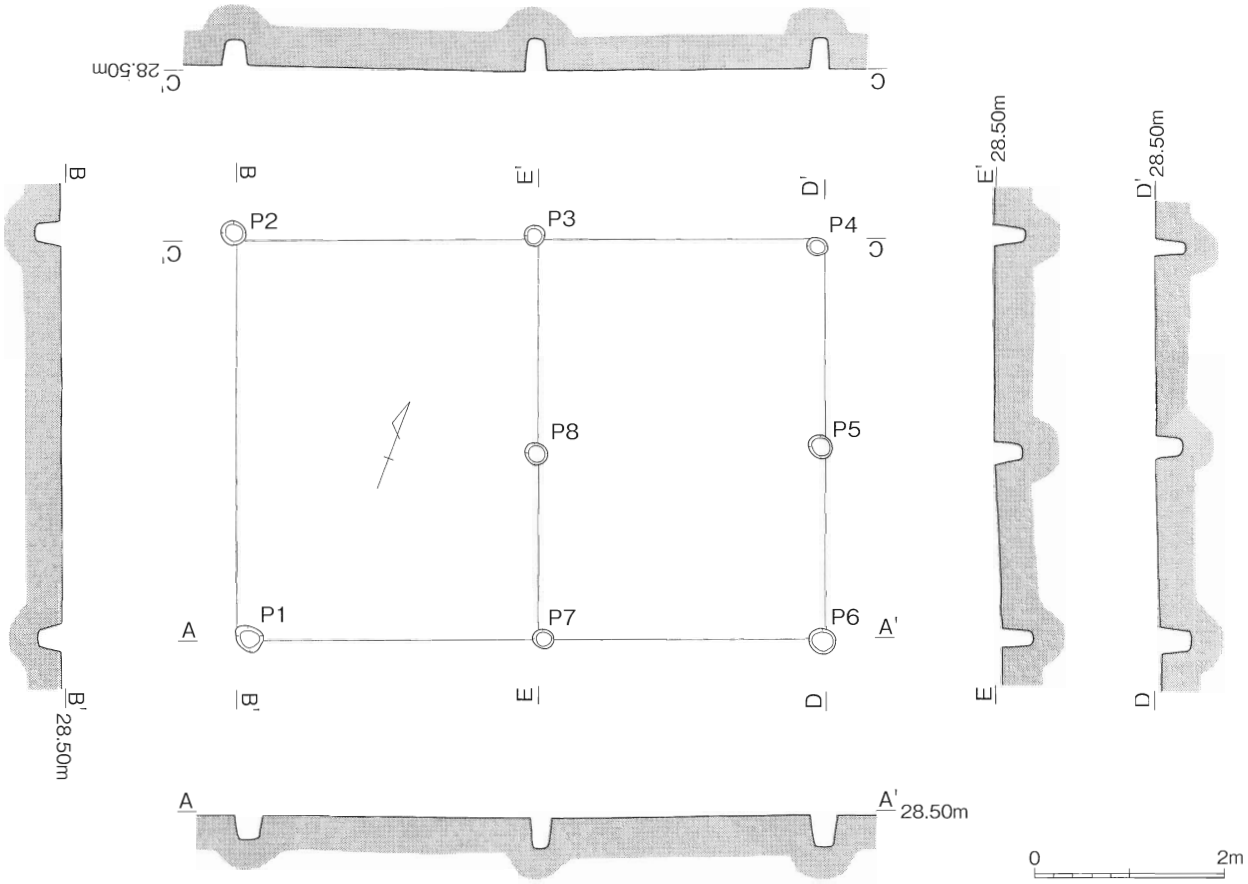
4．A区出土遺物（第47図）

A区からは土師器・土師質土器・中国青磁・柱根などが出土したという記録が残っているが、現在A区出土遺物として確認できるものは須恵器76点、備前擂鉢２点、瓷器系壷甕類胴部の破片１点だけである。この内、実測可能な須恵器２点を掲載した。１は壷底部の破片である。やや丸みをもつ底部より体部が内湾気味に立ち上がっている。底部外面には「ハ」の字に開くしっかりとした高台が貼り付けられており、高台端部に凹面をもつ。調整は内面の底部から体部にかけて回転ナデによる凹凸痕が顕著である。底径は9.4cmを測る。２は口縁端部が下垂する坏蓋口縁部の破片である。調整は内外面回転ナデである。口径は14.3cmを測る。

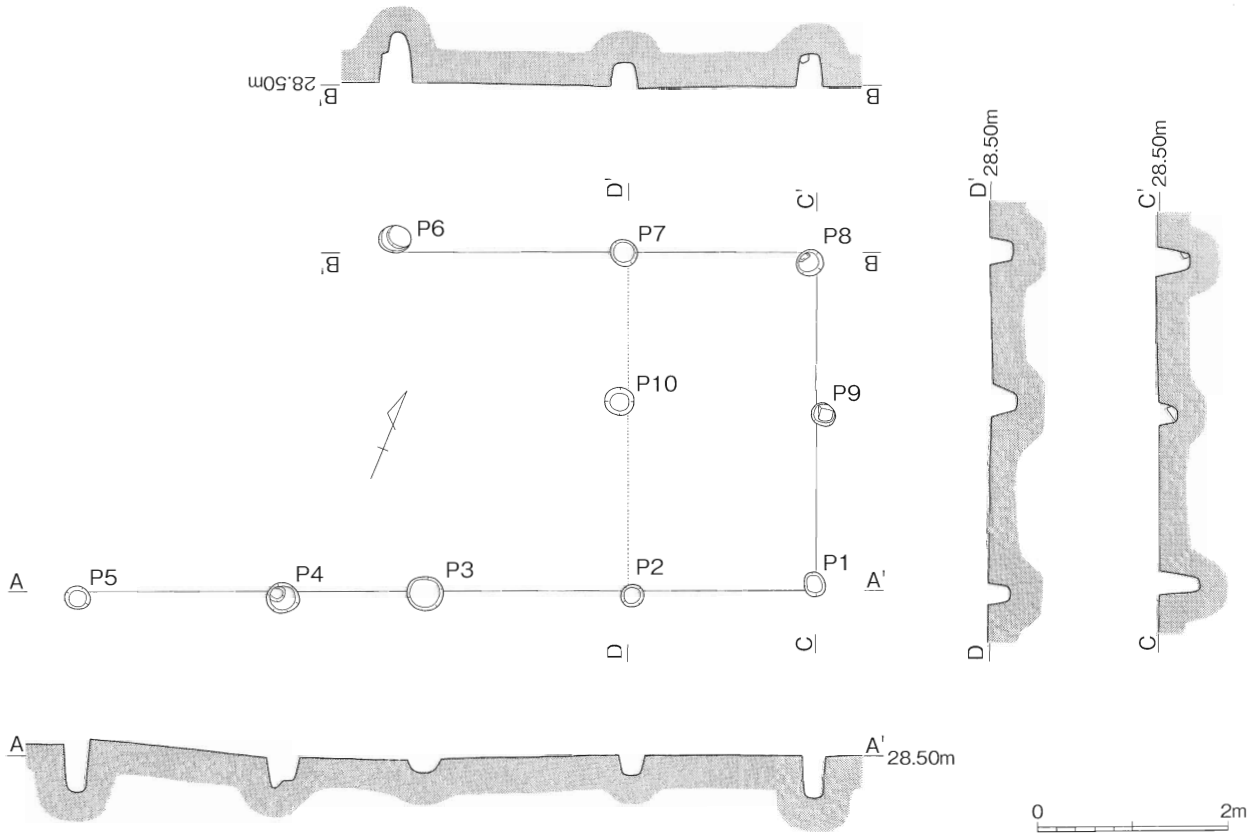
第47図　A区出土遺物実測図（S＝1/3）



第48図　SB01実測図（S＝1/80）



第49図　SB02実測図（S＝1/80）



第50図　SB03実測図（S＝1/80）

2. B・C区の調査

現地調査では平坦な畑地部分を便宜的にB区、北西向きの緩斜面をC区として調査を実施している。しかし、B区のうち本調査を実施したのはC区に隣接した南東部分だけであり、ここから検出された遺構はC区と一連のものと考えられるため、ここでは一括して取り扱うこととした。

B・C区からは5つの加工段が見つかっており、その平坦面から溝8本（SD02～09）、土坑2個（SK01・02）、性格不明遺構2個（SX01・02）とピット234個を検出している。検出した多数の柱穴から24棟（SB04～27）の掘立柱建物跡を復元したが、これらは谷側にあたる部分が消失しており、建物の全容を窺えるものは殆どなかった。また、加工段の斜面からも土坑3個（SK03～05）とピット4個が検出されている。以下、各加工段ごとに遺構の概要を記す。

1．第1加工段

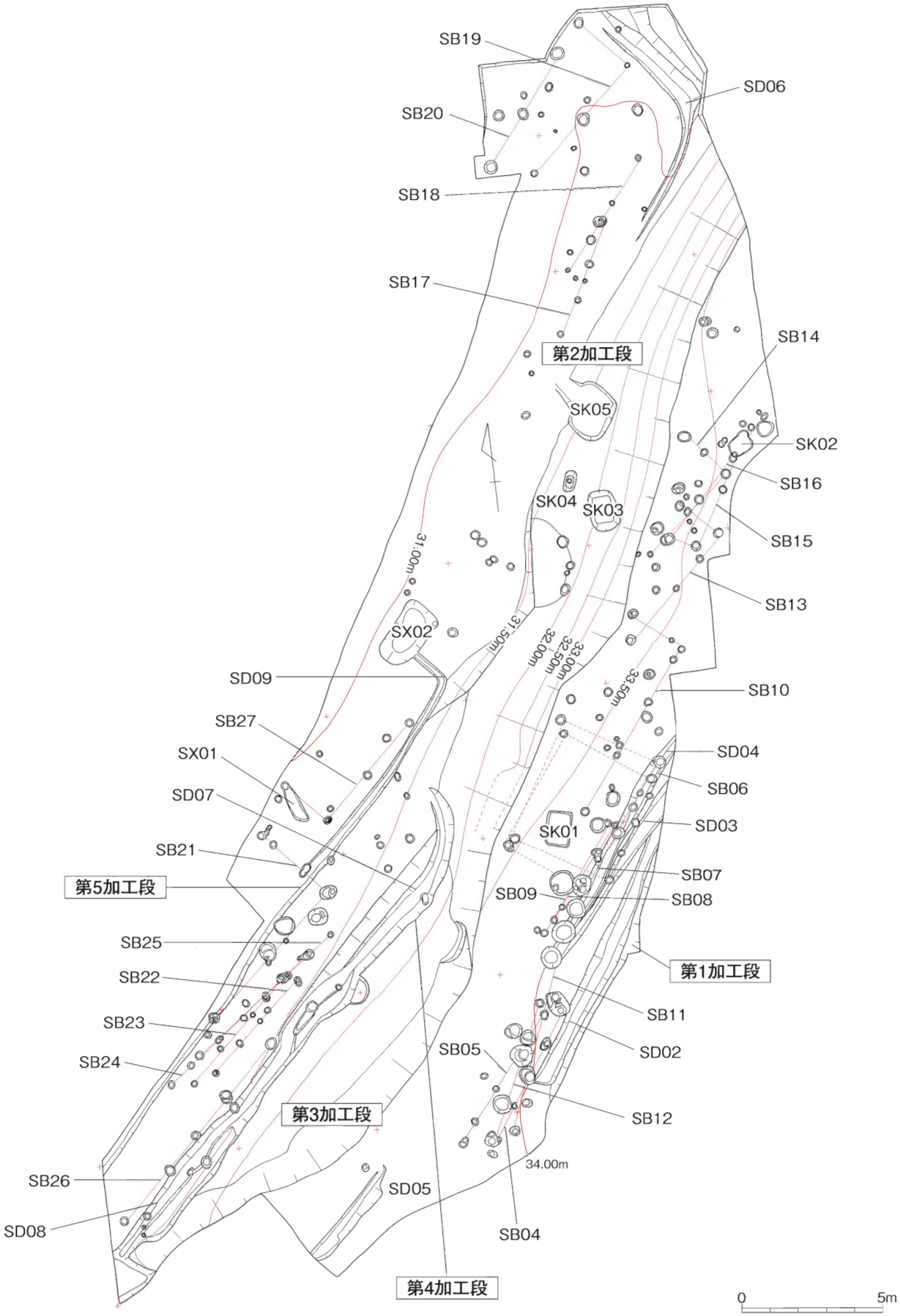
調査区の最高所を南西から北東に向けて横断する加工段であり、標高33.00～34.50mを測る場所に位置する。今回は加工斜面の下に作られた平坦部の調査だけを行っている。平坦部の規模は現状で長さ約40m、幅約5.4mを測る。標高は33.75m前後であり、南東側が高く北西側が低い。この平坦面からは溝4本（SD02～05）、土坑2個（SK01・02）とピット120個を検出しており、ピットの中から掘立柱建物跡13棟（SB04～16）を復元した。

溝SD02～05（第51図～第54図） 第1加工段平坦面の標高33.75～34.25mを測る位置で溝4本が検出された。この内SD02～04は複雑に切り合っているが、新旧関係は判らない。これらの溝は掘立柱建物跡に伴う壁帯溝と考えられ、主軸から推定するとSD02に伴う建物はSB04・05・06、SD03はSB07・08、SD04はSB09・10と考えられる。SD05については平坦面の南西に単独で位置しており、ピットも1個しか検出されていない。規模と主軸はSD02が長さ10.68m以上・幅42.5～63.5cm・深さ最大17cm・主軸N－31.5°－E、SD03が長さ7.7m以上・幅26～60cm・深さ最大14cm・主軸N－40.5°－E、SD04が長さ8.89m以上・幅34～60cm・深さ最大11cm・主軸N－36°－E、SD05が長さ4.1m以上・幅35～65cm・深さ最大10cm・主軸N－45°－Eを測る。

SB04（第52図） 第1加工段の標高33.75～34.25mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット5個（P1～5）があり、SB04とした。桁行4間の建物として復元できるものであり、長さは5.15m、柱間距離は1.20～1.35mである。ピットの規模は長軸径で23～55cm、深さ最大11～86cmを測る。主軸はN－34°－Eであり、SD02とほぼ同方向に伸びるものである。

SB05（第52図） 第1加工段の標高33.75～34.25mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット4個（P6～9）があり、SB05とした。桁行3間の建物として復元できるものであり、長さは6.0m、柱間距離は1.85～2.1mである。ピットの規模は長軸径で22～53cm、深さ最大12～65cmを測る。主軸はN－37.5°－Eであり、SD02とほぼ同方向に伸びるものである。

SB06（第52図） 第1加工段の標高33.25～34.25mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット5個（P10～14）とこれに直交するピットがあり、SB06とした。桁行4間×梁間2間の建物として復元できるものであり、長さは梁間3.8m、桁行4.6m、柱間距離は桁行1.05～1.25mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で24～45cm、深さ最大21～67cmを測る。主軸はN－30.5°－Eであり、SD02とほぼ同方向に伸びるものである。

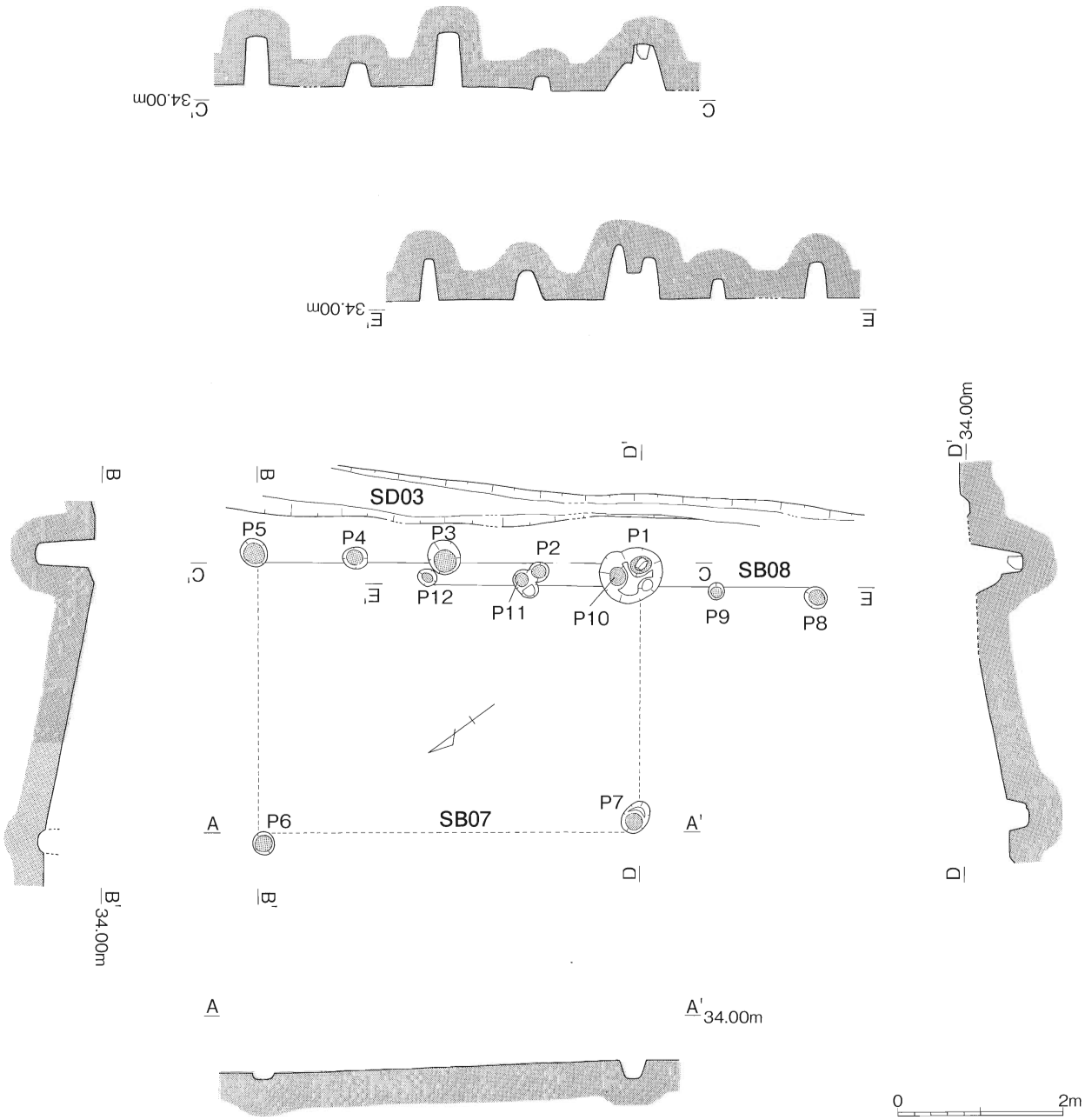


第51図　B・C区遺構位置図（S=1/200）

第52図　第１加工段SD02、SB04・05・06実測図（S＝1/80）

SB07（第53図） 第１加工段の標高33.25～34.00mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット５個（Ｐ１～Ｐ５）とこれに直交するピット２個（Ｐ６・Ｐ７）があり、SB07とした。桁行４間×梁間１間の建物として復元できるものであり、長さは梁間3.2と3.5m、桁行4.45と4.65m、柱間距離は桁行1.10～1.25mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で25～43cm、深さ最大９～67cmを測る。主軸はN－36°－Eであり、SD03とほぼ同方向に伸びるものである。遺物としてはP１より根石と考えられる河原石が出土している。

SB08（第53図） 第１加工段の標高33.75～34.00mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット５個（Ｐ８～P12）があり、SB08とした。桁行４間の建物として復元できるものであり、長さは4.7m、柱間距離は1.15～1.20mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で21～59cm、深さ最大17～67cmを測る。主軸はN－39.5°－Eであり、SD03とほぼ同方向に伸びるものである。



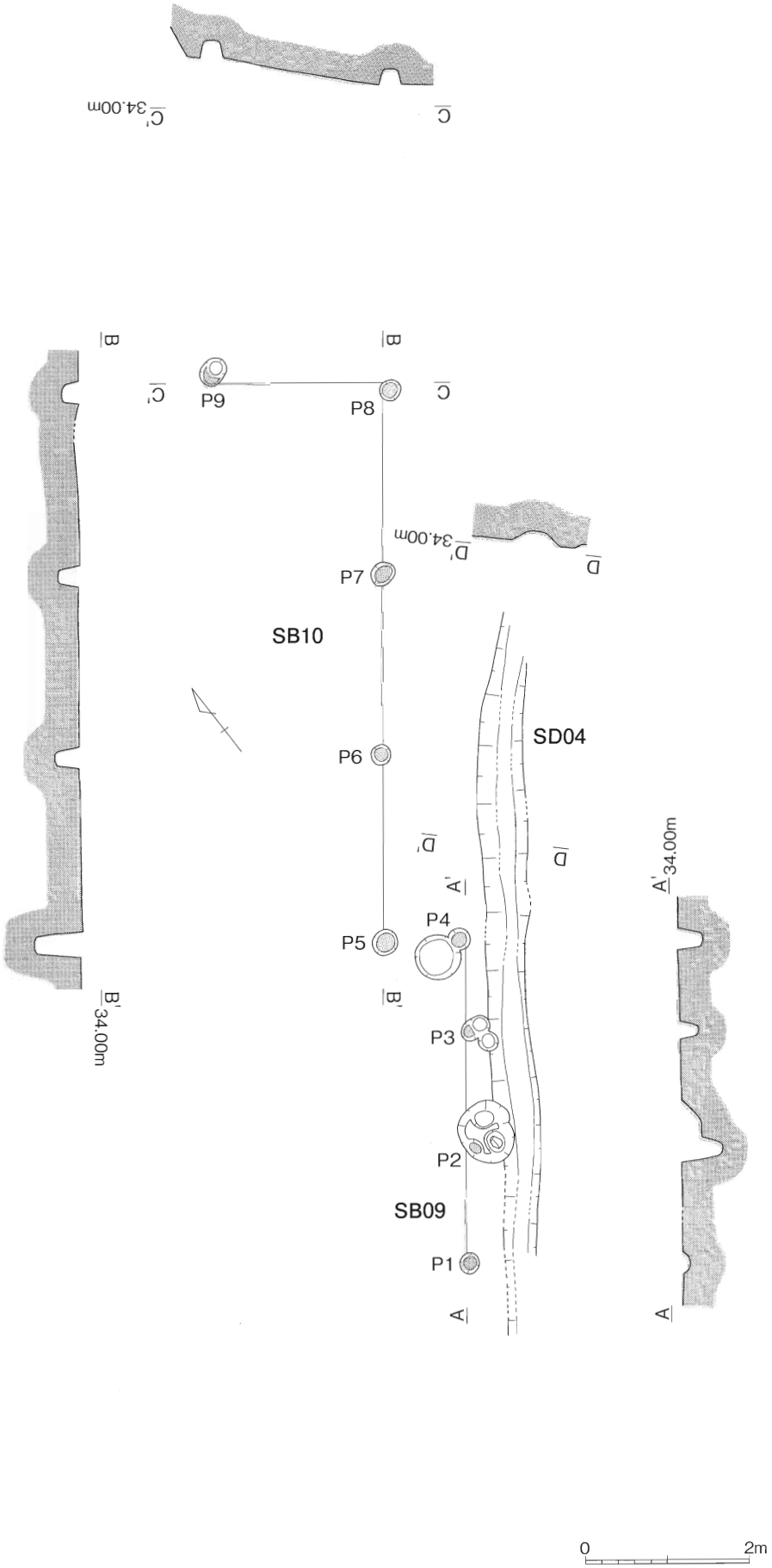
第53図　SD03、SB07・08実測図（S＝1/80）

SB09（第54図）

第１加工段の標高33.75～34.00mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット４個（Ｐ１～Ｐ４）があり、SB09とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは4.0m、柱間距離は1.15～1.45mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で23～28cm、深さ最大９～51cmを測る。主軸はN－36°－Eであり、SD04とほぼ同方向に伸びるものである。

SB10（第54図）

第１加工段の標高33.25～34.00mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット４個（Ｐ５～Ｐ８）とこれに直交するピット１個（Ｐ９）があり、SB10とした。桁行３間、梁間１間の建物として復元でき、長さは梁間2.2m、桁行6.8m、桁行側の柱間距離は2.25～2.30mを測る。ピットは円形または楕円形を呈しており、規模は長軸径で26～33cm、深さ最大20～59cmを測る。主軸はN－38°－Eであり、SD04とほぼ同方向に伸びるものである。



第54図　SD04、SB09・10実測図（S＝1/80）

SB11（第55図） 第１加工段の標高33.75～34.25mを測る場所に、南南西－北北東に向け等間隔に並ぶピット４個（Ｐ１～Ｐ４）があり、SB11とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは6.4m、柱間距離は2.1～2.25mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で34～80cm、深さ最大11～60cmを測る。

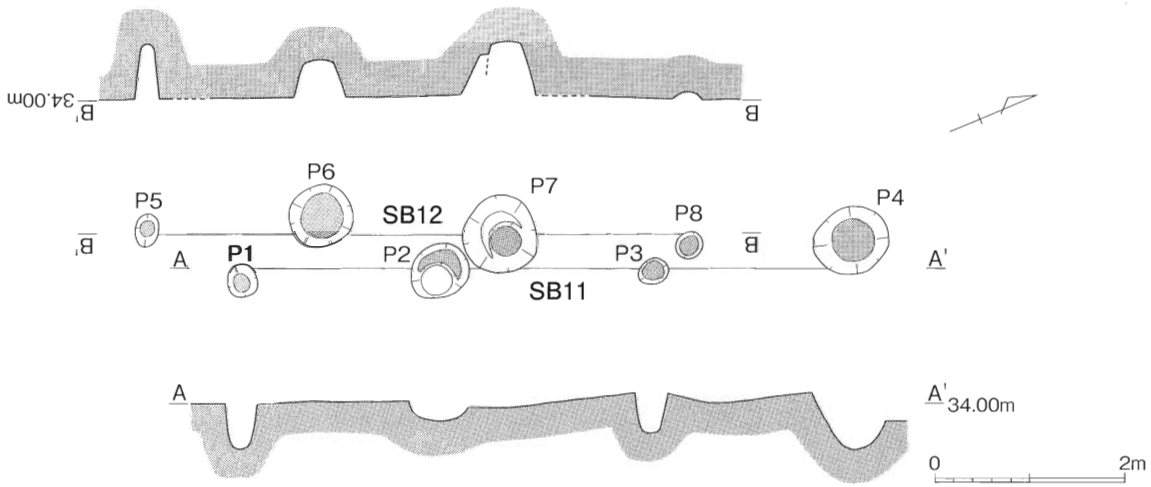
SB12（第55図） 第１加工段の標高33.75～34.25mを測る場所に、南南西－北北東に向け等間隔に並ぶピット４個（Ｐ５～Ｐ８）があり、SB12とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは5.65m、柱間距離は1.85～1.95mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で30～65cm、深さ最大９～57cmを測る。主軸はN－23°－Eである。

SB13（第56図） 第１加工段の標高33.25～33.75mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット３個（Ｐ１～Ｐ３）とこれに直交するピット１個（Ｐ４）があり、SB13とした。桁行２間×梁間１間の建物として復元できるものであり、長さは梁間1.7m、桁行５m、柱間距離は桁行2.5mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で24～38cm、深さ最大８～39cmを測る。主軸はN－45.5°－Eであり、SB14とほぼ同方向を向くものである。

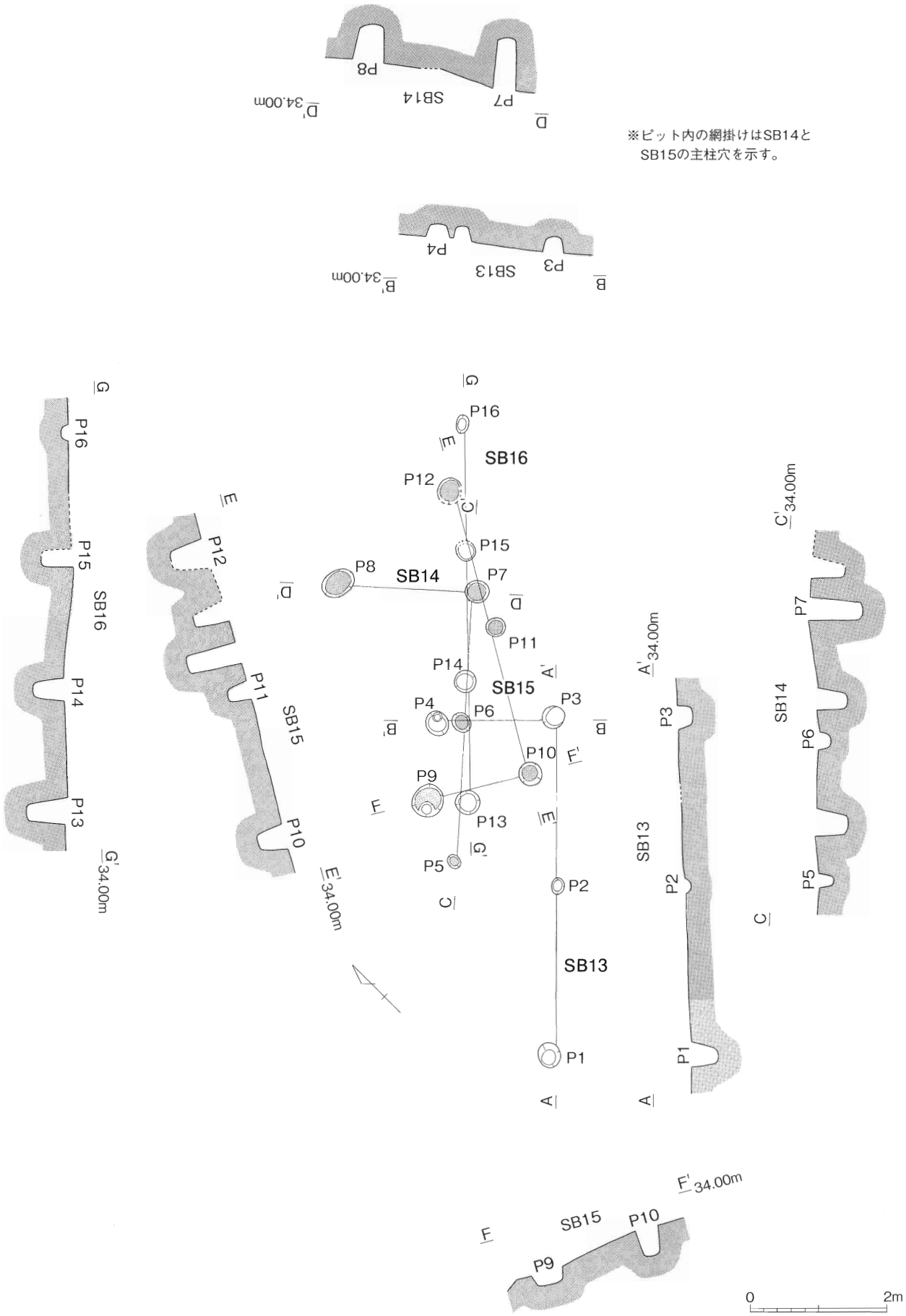
SB14（第56図） 第１加工段の標高33.25～33.75mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット３個（Ｐ５～Ｐ７）とこれに直交するピット１個（Ｐ８）があり、SB14とした。桁行２間×梁間１間の建物として復元できるものであり、長さは梁間2.0m、桁行3.95m、柱間距離は桁行1.95～2.05mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で22～49cm、深さ最大17～78cmを測る。主軸はN－48.5°－Eであり、SB13とほぼ同方向を向くものである。

SB15（第56図） 第１加工段の標高33.25～33.75mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット３個（P10～P12）とこれに直交するピット１個（Ｐ９）があり、SB15とした。桁行２間×梁間１間の建物として復元できるものであり、長さは梁間1.55m、桁行4.30m、柱間距離は桁行2.15～2.20mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で29～49cm、深さ最大21～48cmを測る。主軸はN－31°－Eである。

SB16（第56図） 第１加工段の標高33.25～33.75mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット４個（P13～16）があり、SB16とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは5.5m、柱間距離は1.80～1.90mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で28～36cm、深さ最大12～60cmを測る。主軸はN－45°－Eである。



第55図　SB11・12実測図（S＝1/80）

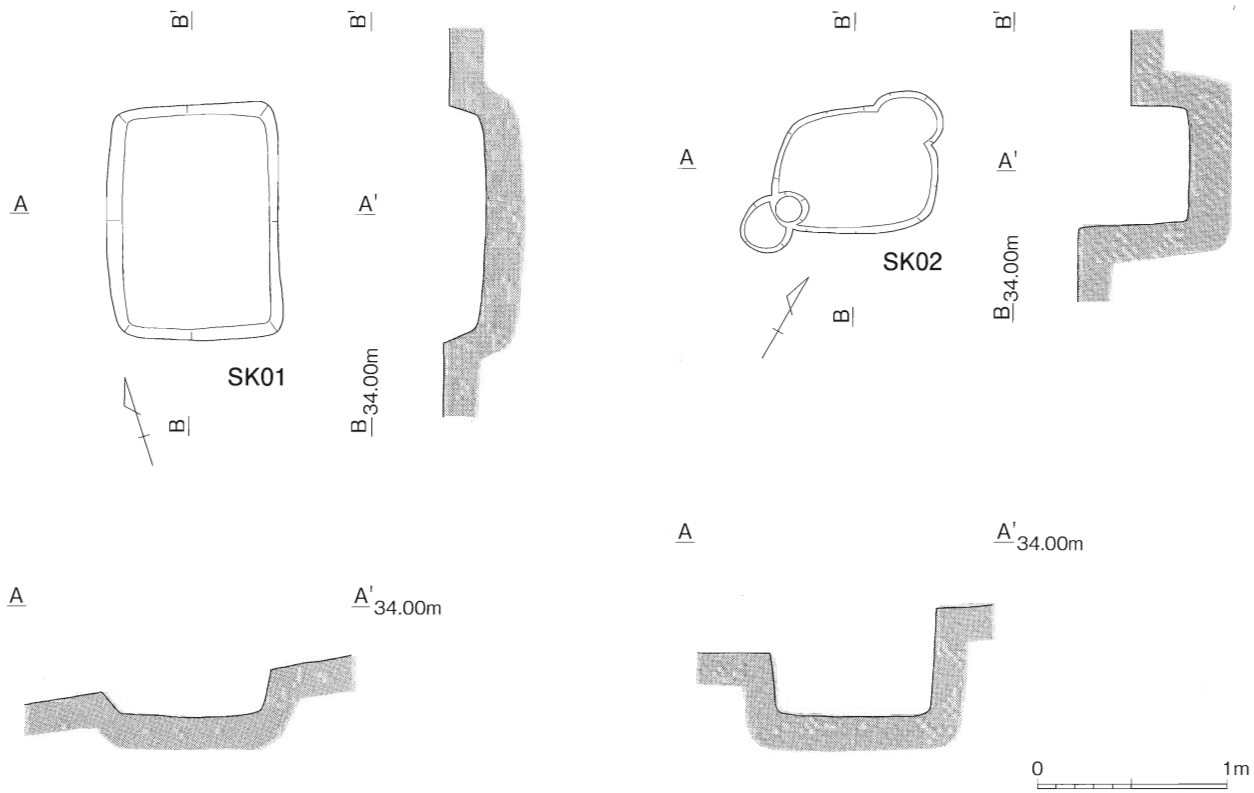


第56図　SB13～16実測図（S＝1/80）

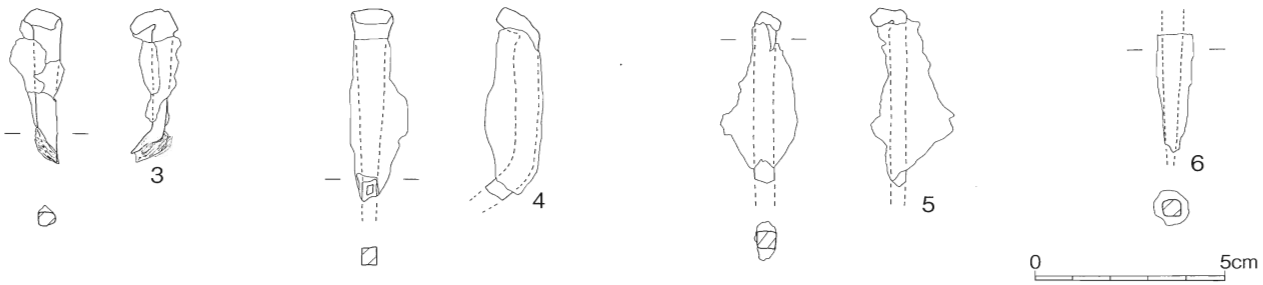
SK01（第57図） 第１加工段平坦面の標高33.25～33.75mを測る位置で検出された土壙である。平面形は長方形を呈し、主軸はN－18°－Eである。規模は長辺1.24m、短辺0.89m、深さ最大25.0cmを測る。遺物としては埋土中より鉄製角釘４点が出土している。深さの浅い点が気になるが、座棺墓の可能性が考えられる。

SK01出土遺物（第58図） ３～６は鉄製角釘である。３は完形であり、頭部は折り曲げられ、先端部分は先細りに仕上げられている。折れ曲がっているため引き延ばしての計測はできないが、本来は全長約４cm程度のものと考えられる。先端付近には木質が残存している。４・５は頭部の破片であり、頭部は折り曲げられている。４は残存長5.0cm、５が4.7cmを測る。６は先端部分の破片であり、先細りに仕上げられている。残存長3.1cmを測る。全体に木質が残る。

SK02（第57図） 第１加工段平坦面の標高33.25～33.75mを測る位置で検出された焼土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、長辺0.86m、短辺0.68m、深さ最大57cmを測る。平坦な底部より壁は垂直に近く立ち上がっており、壁面は熱を受け赤変している。SB16のP15、SB15のP12と切り合っており、調査日誌にはこれらのピットよりも古いという記載がある。



第57図　SK01・02実測図（S＝1/40）



第58図　SK01出土遺物実測図（S＝1/2）

2．第２加工段

調査区のほぼ中央を南西から北東に向けて横断する加工段であり、南東側の斜面は第３加工段の斜面へと続く。また、第４加工段・第５加工段の斜面とも切り合っているが、いずれも新旧関係は判らない。北東側の斜面は平面「L」字状にカットしてあり、屈曲して南西側へ伸びている。斜面の下には平坦面が作られており、溝１本（SD06）と多数のピットを検出した。平坦面での標高は30.50～31.25mであり、第１加工段平坦面との比高差は約2.75mを測る。斜面からも性格不明の土坑３個（SK03～05）を検出しているが、この加工段に伴うものではないと考えられるため、「6.その他の遺構」の項で取り扱った。

溝SD06（第59図） 第２加工段平坦面の標高30.50～31.25mを測る場所から検出されたものであり、南西から北東のN－37°－Eに向けて伸び、中途で「く」の字に屈曲してN－40°－Wの南西側へ向きを変える。加工段の斜面に沿って巡るものであり、現状での規模は長さ約9.5m、幅23～70cm、深さ最大35cmを測る。建物跡に付随する壁帯溝と考えられ、溝の西側からは掘立柱建物跡４棟（SB17～20）を復元した。

SB17（第59図） 第２加工段の標高30.75～31.25mを測る場所に、南南西－北北東に向け等間隔に並ぶピット４個（P１～P４）があり、SB17とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは4.3m、柱間距離は1.35～1.6mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で22～34cm、深さ最大25～39cmを測る。主軸はN－27.5°－Eである。

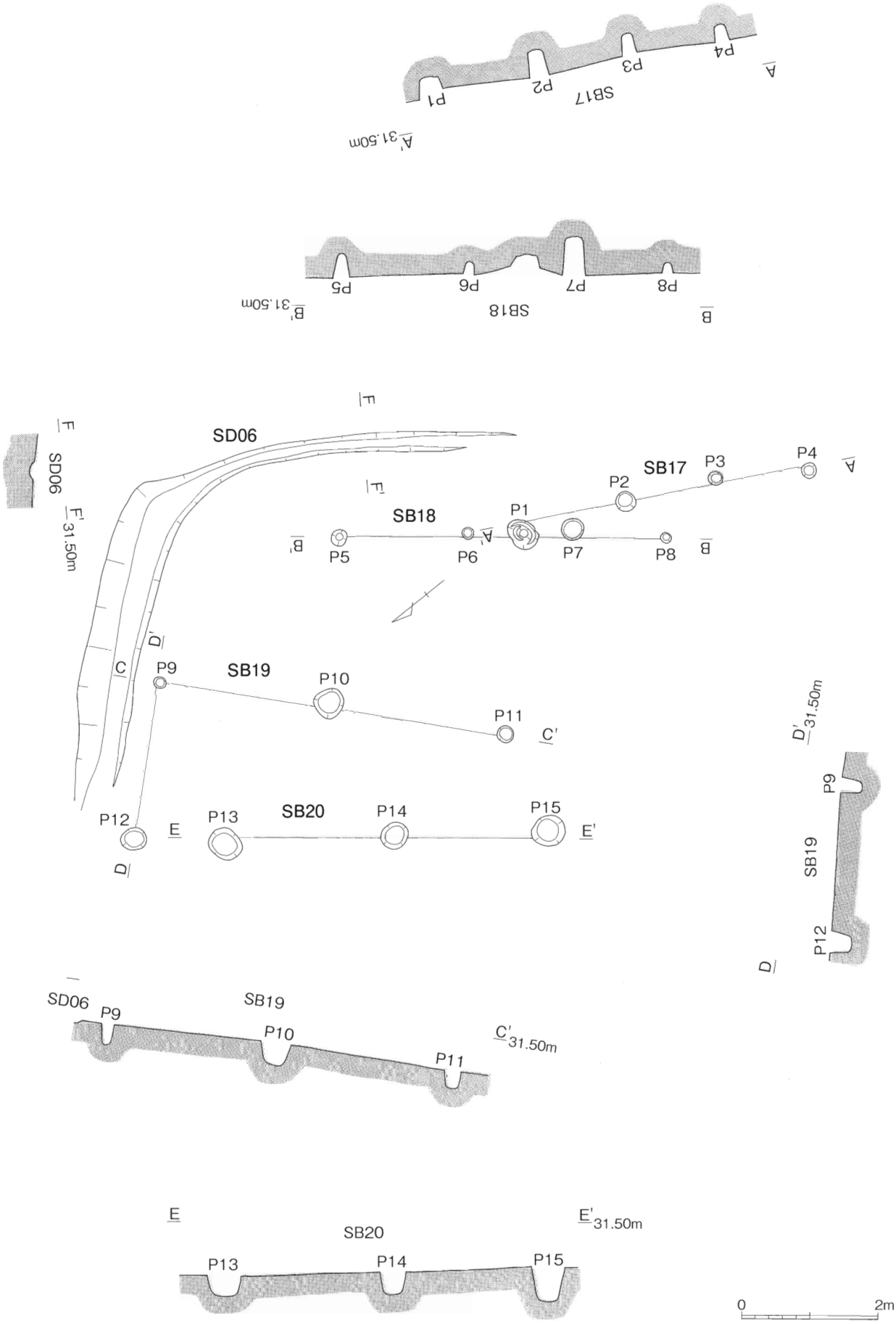
SB18（第59図） 第２加工段の標高30.75～31.25mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット４個（P５～P８）があり、SB18とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは4.75m、柱間距離は1.40～1.85mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で17～33cm、深さ最大15～57cmを測る。主軸はN－39°－Eであり、SD06の南西－北東の軸とほぼ同方向に伸びるものである。

SB19（第59図） 第２加工段の標高30.50～31.00mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット３個（P９～P11）とこれに直交するピット１個（P12）があり、SB19とした。桁行２間×梁間１間の建物として復元できるものであり、長さは梁間2.30m、桁行5.1m、柱間距離は桁行2.50～2.60mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で19～45cm、深さ最大26～32cmを測る。主軸はN－48°－Eであり、SD－05とほぼ同方向に伸びるものである。

SB20（第59図） 第２加工段の標高30.50～31.00mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット３個（P13～P15）があり、SB20とした。桁行２間の建物として復元できるものであり、長さは4.72m、柱間距離は2.25～2.50mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で42～50cm、深さ最大28～50cmを測る。主軸はN－39°－Eである。

3．第３加工段

調査区のほぼ中央を南西から北東に向けて伸びる加工段であり、北東側の斜面は第２加工段の斜面と繋がっている。図面を観察する限りでは斜面下に長さ18.1m、幅2.25mを測る平坦面が作られている。しかし、記録写真やレベルからは平坦面と呼ぶには若干傾斜がきつく起伏もある。ピット等の遺構も検出されていないことから、本来は第４加工段の加工斜面であったものが浸食や開墾により崩れたものと思われる。



第59図　第２加工段SD06、SB17～20実測図（S＝1/80）

4．第４加工段

調査区の南西側で検出された加工段であり、南西－北東方向へ向け伸びている。斜面の下には平坦面が作り出されており、検出した範囲での規模は長さ約20m、幅2.0～2.45mを測る。この平坦面からは溝２本（SD07・08)、掘立柱建物跡６棟（SB21～26）と多数のピットが検出された。第４加工段の加工斜面と第２加工段の加工斜面とは切り合っている。また、第５加工段によって平坦面が削られているようだが、いずれも新旧関係は不明である。平坦面での標高は31.00～31.75mを測り、第１加工段平坦面との比高差は約2.5m、第２・第５加工段との比高差は約0.25mを測る。

溝SD07・08（第60・61図） 第４加工段の平坦面からは２本の溝が検出された。加工斜面と平行に南西－北東方向に伸びるものであり、北東側は斜面下方にあたる北西に向け屈曲している。その主軸はSD07がN－48.5°－E、SD08がN－47.5°－Eであり、ほぼ一直線となっている。規模はSD07が長さ約11m、幅50～92cm、深さ最大15cm、SD08が長さ約10.2m、幅55～80cm、深さ最大12cmを測る。位置関係から推定するとSD07に伴う建物がSB21、SD08に伴うものがSB26と考えられる。SB22～25についてはどちらとも判断しがたい。

SB21（第60図） 第４加工段の標高31.00～31.50mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット３個（Ｐ１～Ｐ３）とこれに直交するピット３個（Ｐ４～６）があり、SB21とした。桁行２間×梁間２間の建物として復元できるものであり、長さは梁間2.60m、或いは3.20m、桁行6.0m、柱間距離は桁行3.0mである。ピットの規模は長軸径で28～60cm、深さ最大13～57cmを測る。主軸はN－48.5°－Eであり、SD07とほぼ同方向に伸びるものである。

SB22（第60図） 第４加工段の標高31.25～31.75mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット４個（Ｐ７～P10）があり、SB22とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは4.45m、柱間距離は1.40～1.50mである。ピットの規模は長軸径で22～32cm、深さ最大15～34cmを測る。主軸はN－48°－Eであり、SD07・08とほぼ同方向に伸びるものである。

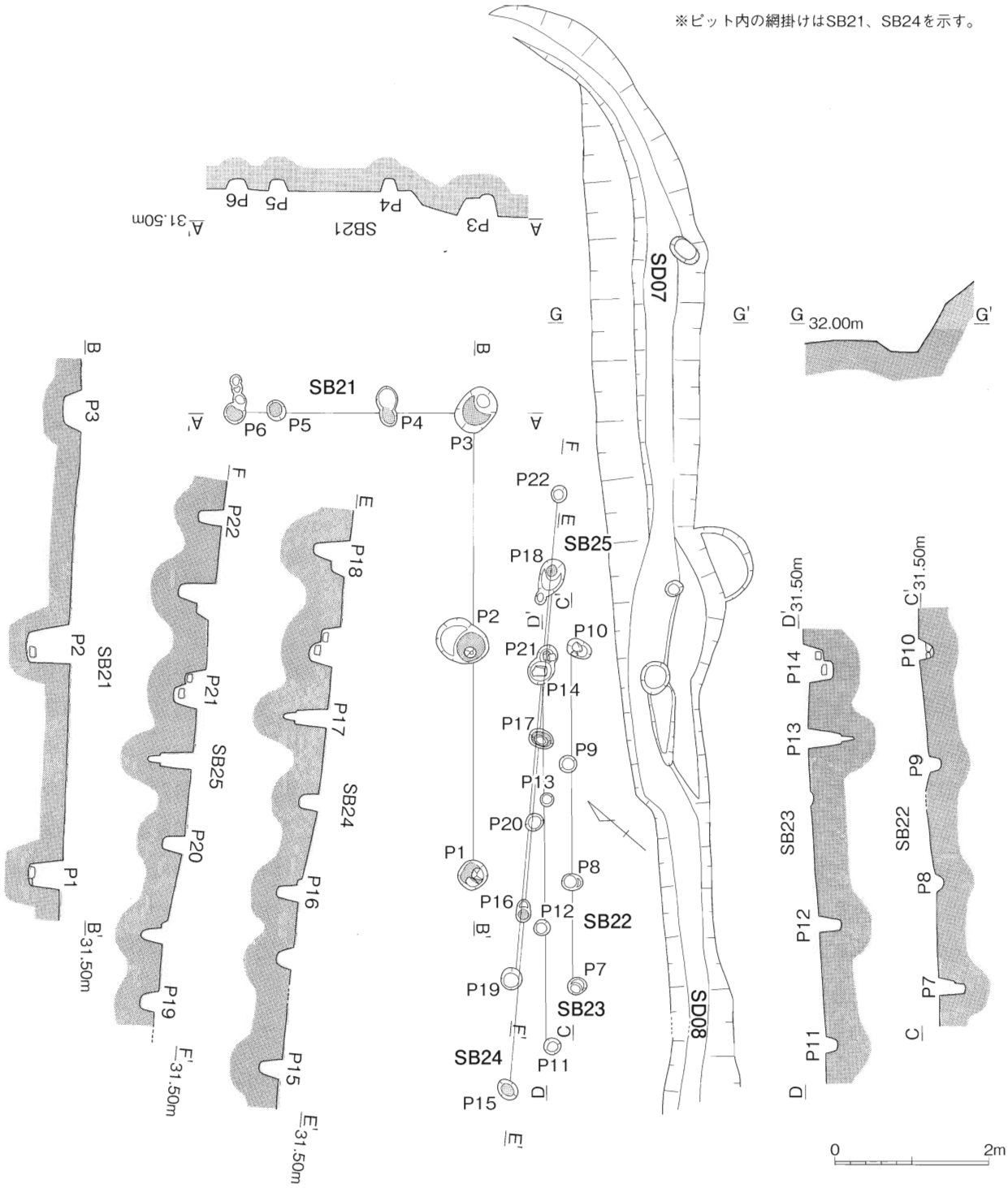
SB23（第60図） 第４加工段の標高31.00～31.50mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット４個（P11～P14）があり、SB23とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは4.9m、柱間距離は1.55～1.65mである。ピットの規模は長軸径で18～38cm、深さ最大５～32cmを測る。主軸はN－48°－Eであり、SD07・08とほぼ同方向に伸びるものである。

SB24（第60図） 第４加工段の標高31.00～31.50mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット４個（P15～P18）があり、SB24とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは6.8m、柱間距離は2.20～2.30mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で20～34cm、深さ最大29～60cmを測る。主軸はN－54.5°－Eである。

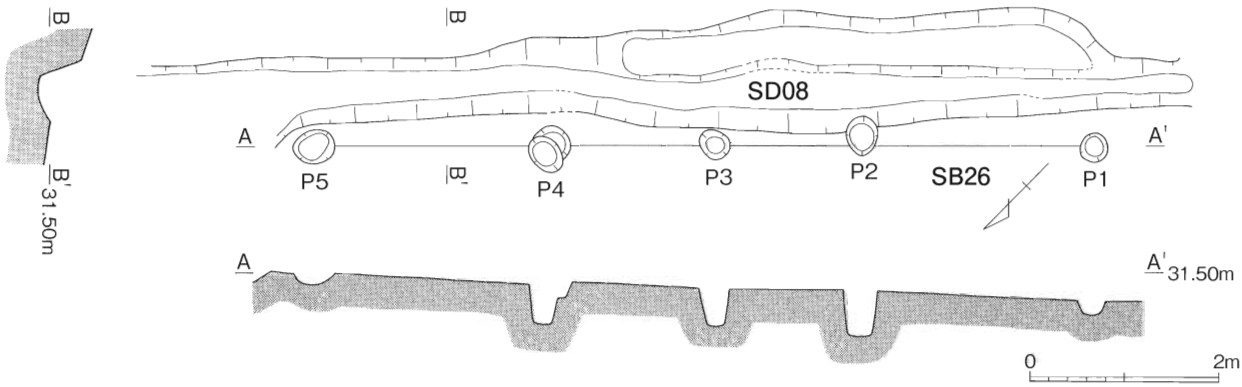
SB25（第60図） 第４加工段の標高31.00～31.50mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット４個（P19～P22）があり、SB25とした。桁行３間の建物として復元できるものであり、長さは6.36m、柱間距離は2.10～2.16mである。ピットは円形または楕円形を呈しており、現状での規模は長軸径で21～28cm、深さ最大23～32cmを測る。主軸はN－54.5°－Eである。

SB26（第61図） 第４加工段の標高31.00～31.50mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット５個（Ｐ１～Ｐ５）があり、SB26とした。桁行４間の建物として復元できるものであり、長さは8.26m、柱間距離は1.60～2.50mである。ピットの規模は長軸径で31～45cm、深さ最大14～50cmを測る。主軸はN－46.5°－Eであり、SD08とほぼ同方向に伸びるものである。

※ピット内の網掛けはSB21、SB24を示す。



第60図　SD07、SB21～25実測図（S＝1/80）



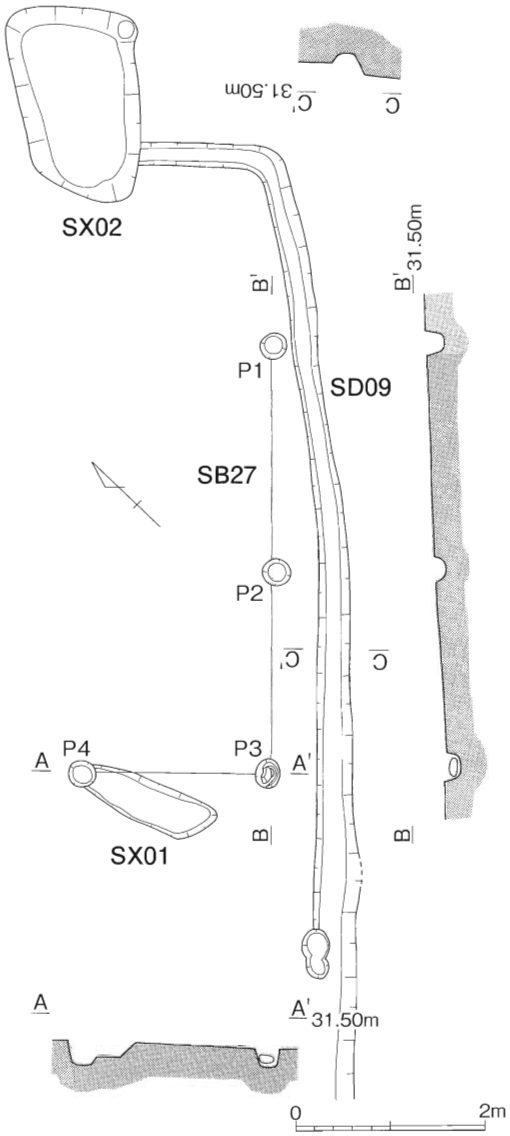
第61図　SD08、SB26実測図（S＝1/80）

5．第５加工段

第４加工段の北西側に位置する加工段であり、南西から北東方向に向け伸びている。斜面下には平坦面が作り出されており、ここから溝１本（SD09）、性格不明遺構２個（SX01・02）と多数のピットを検出した。第２加工段の加工斜面と第４加工段の平坦面と切り合っているが、新旧関係は判らない。平坦面での標高は30.75～31.25mを測り、第２加工段の平坦面とほぼ同レベルに位置している。第４加工段の平坦面とは比高差約25cmを測る。

溝SD09（第62図）　第５加工段平坦面の標高31.00～31.25mを測る位置で検出されたものであり、南西から北東のN－45.5°－Eに向けて伸び、北東側でほぼ直角に折れ曲がり斜面下方となるN－42°－Wの南東側へ向きを変える。加工段の斜面と平行に伸びるものであり、規模は長さ約9.50m、幅20～47cm、深さ最大17cmを測る。溝の西側で掘立柱建物跡１棟（SB23）を復元した。

SB27（第62図）　第５加工段の標高31.00～31.25mを測る場所に、南西－北東に向け等間隔に並ぶピット３個（P１～P３）とこれに直交するピット１個（P４）があり、SB27とした。桁行２間×梁間１間の建物として復元できるものであり、長さは梁間1.95m、桁行4.55m、柱間距離は桁行2.15～2.40mである。ピットの規模は長軸径で29～30cm、深さ最大13～26cmを測る。主軸はN－46°－Eであり、SD09とほぼ同方向に伸びるものである。



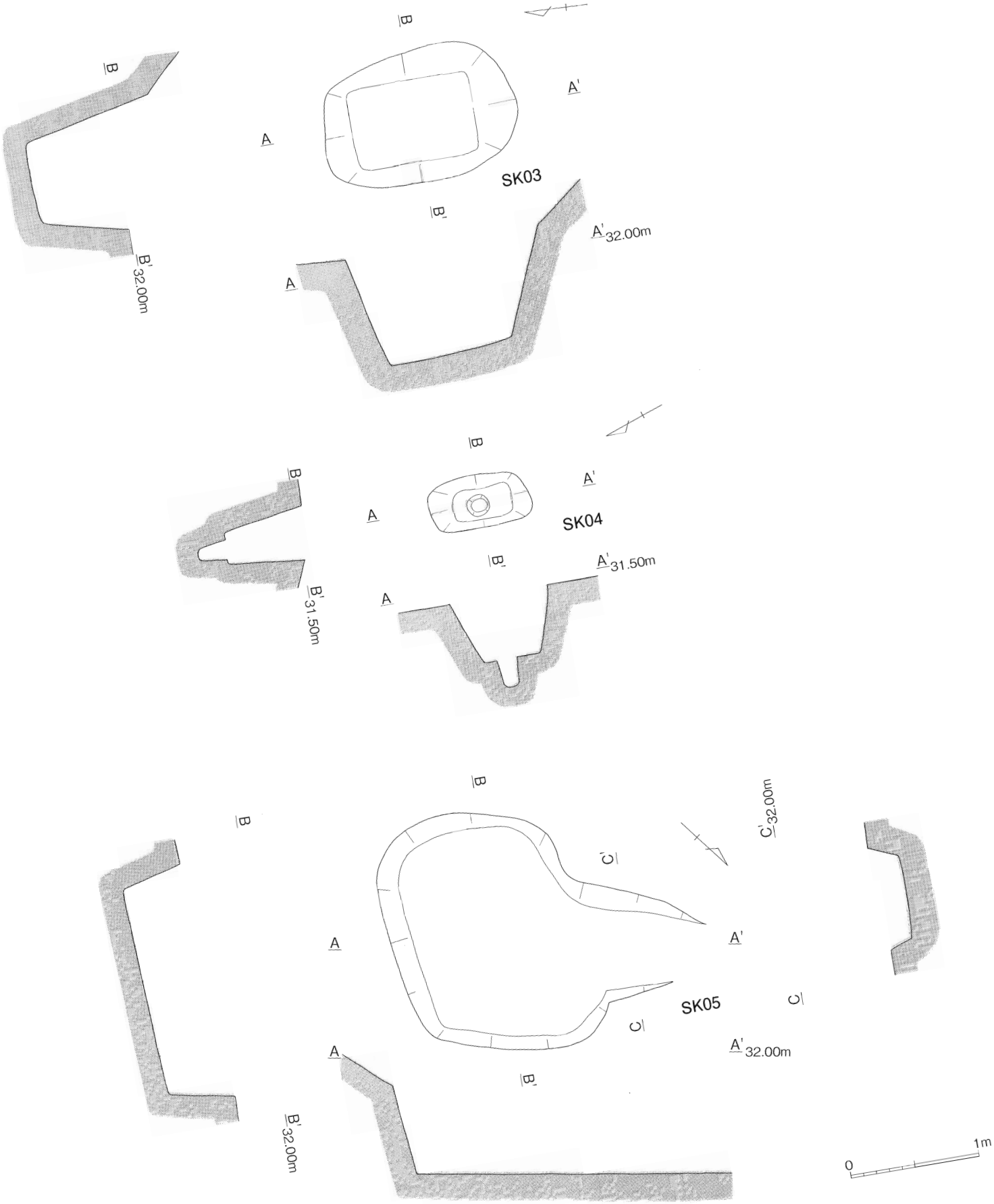
第62図　SD09、SB27実測図（S＝1/80）

6．その他の遺構

SK03（第63図）　第２加工段の標高31.75～32.50mを測る加工斜面から検出された土坑である。平面形は上部が隅丸の長方形、底部が長方形を呈し、上縁の長軸1.48m、短軸1.02m、底部の長辺0.95m、短辺0.65m、深さは最大で1.04mを測る。底部中央に小ピットがないものの、形態等から落とし穴かSK01と同様の座棺墓と考えられる。

SK04（第63図）　第２加工段の標高31.50～32.00mを測る加工斜面から検出された土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、上縁の長軸0.76m、短軸0.40m、深さ最大63cmを測る。底部中央には直径16cm、深さ最大23cmを測る小ピットが開けられていることから落とし穴かもしれない。

SK05（第63図）　第２加工段の標高31.25～32.00mを測る加工斜面から検出された土坑である。長方形の長辺中央部に溝状の施設が付随する。写真を見る限りでは、天井部が崩れた横穴墓の羨道から玄室部分といった印象を受ける。横穴墓とした場合、羨道は現状で長さ0.9m、幅0.51～0.65mを測る。玄室はやや歪な長方形を呈し、長辺193cm、短辺143cmを測る。開口方向は北西方向のN－41°－Wである。



第63図　SK03～05実測図（S=1/40）

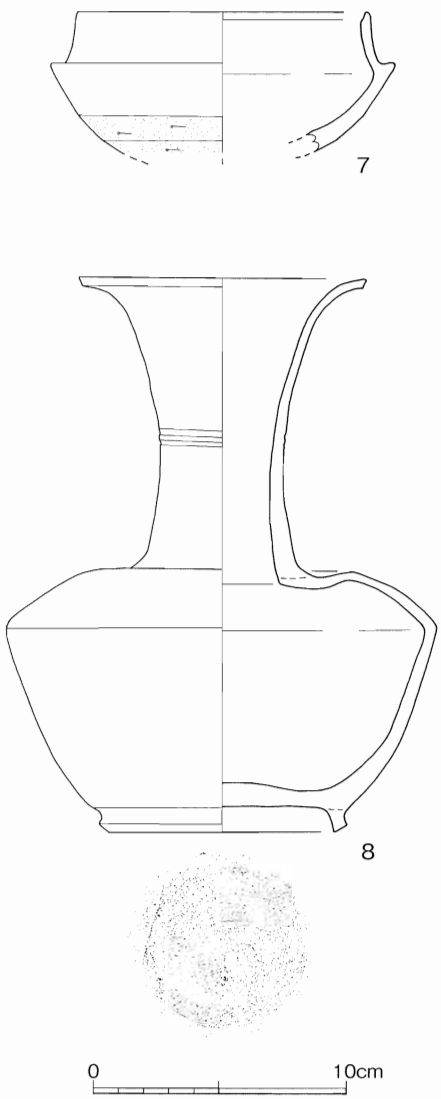
7．B・C区出土遺物（第64・65図）

7～9は須恵器である。7は受け部をもつ坏身であり、口縁端部内面に段を有する。調整は底部外面が丁寧な回転ヘラケズリ、その他には回転ナデが施されている。法量は口径11.5cm、受部径12.5cm、最大径13.5cmを測る。C区より出土した。時期は大谷編年の出雲2期[註2]と考えられる。8は長頸瓶である。底部は平底で高台が貼り付けられ、胴部は上方に最大径をもつ。口頸部は胴部から僅かに窄んで立ち上がった後、大きく外反する。頸部外面に2条の沈線が施されており、底部の切り離しは回転糸切りである。法量は口径11.3cm、底径8.9cm、器高22.0cmを測る。C区より出土した。時期は高広ⅢB期[註3]に相当し、7世紀末から8世紀前葉頃と考えられる。9は大甕口縁の破片である。斜め上方に向け立ち上がり、端部は外方に折り曲げられている。外面は沈線で区画され、区画面には波状文が施されている。口径47.0cmを測る。B区より出土した。

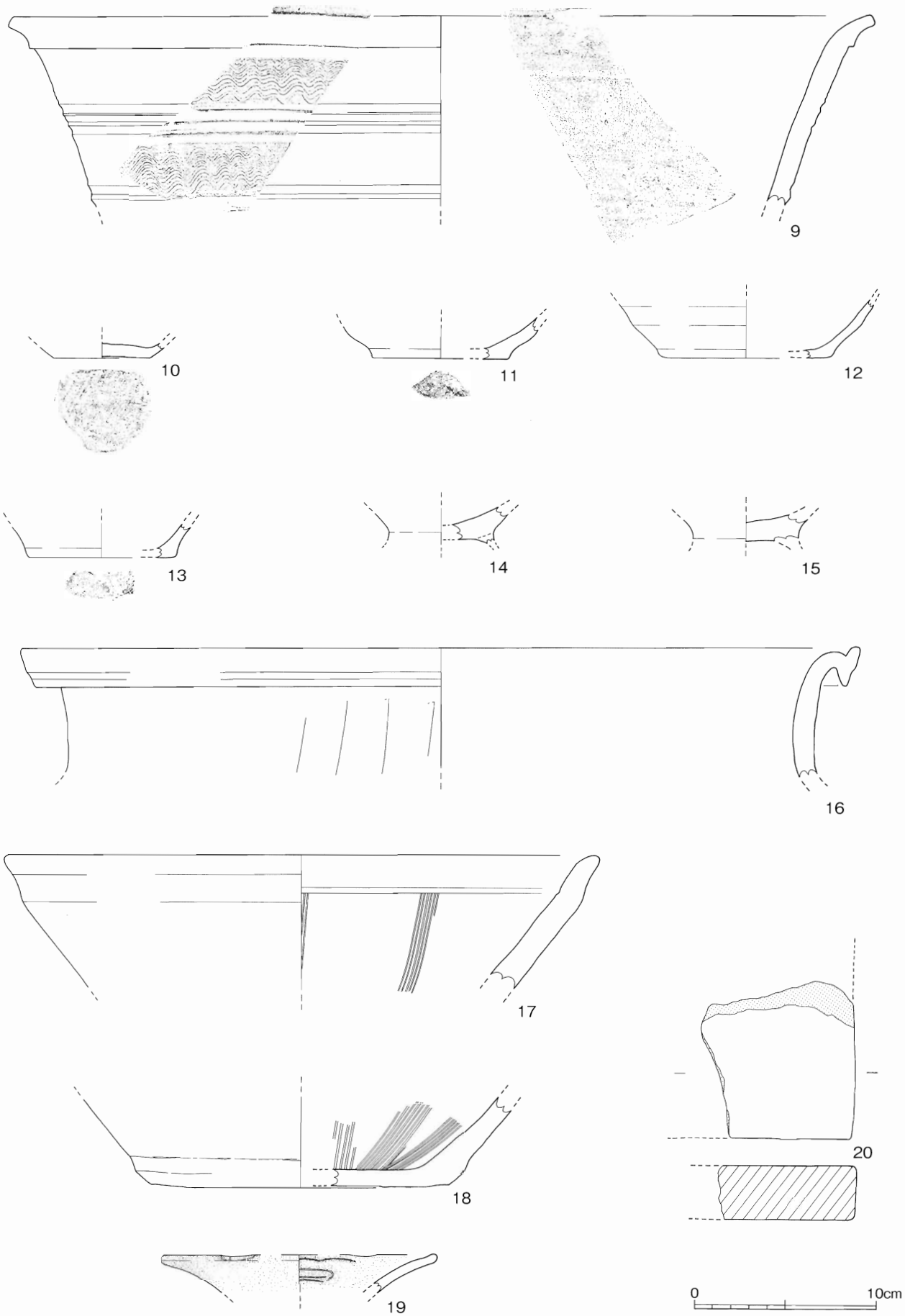
10～15は土師質土器底部の破片である。10～13は無高台のものであり、いずれもB区より出土している。底部の切り離しは10が静止糸切り、その他のものは風化が著しく不明である。底径は10が5.4cm、11が7.4cm、12が9.5cm、13が不明である。14・15は高台をもつものであり、C区より出土している。高台端部を欠くため、径を復元することはできなかった。　16～18は国産陶器であり、いずれもB区より出土している。16は瓷器系の甕口縁部の破片である。口縁端部が上下に拡張されたいわゆる「N字状口縁」をもつものであり、常滑焼の編年では6a型式[註4]に比定されている。時期は13世紀頃と考えられる。17は越前焼の擂鉢である。体部は斜上方に真っ直ぐに立ち上がり、口縁部を内湾させた後、端部を僅かに外反させる。口縁部内面に1条の沈線をもち、ここより下に6本1組みの条溝が刻まれている。口径32.5cmを測る。時期は戦国から桃山時代（15～16世紀か）のものと考えられる[註5]。18は備前焼の擂鉢である。平坦な底部より体部が斜め上方に向け伸び、内面には7本1組の条溝が放射状に刻まれている。底径16.3cmを測る。

19は中国青磁の稜花皿である。体部が大きく開き気味に立ち上がり、口縁付近で更に開く。波状の口縁をもち、内面には文様が描かれている。口径は小片のため不明である。B区より出土した。時期は15～16世紀[註6]。

20は素焼きの塼である。平面は方形を呈し、厚さは3.0cmを測る。焼成不良のため表面が風化しており調整は不明である。色調は灰白色を呈し、胎土に0.2～0.7cmの砂粒を多く含む。



第64図　B・C区遺構外出土遺物実測図（S=1/3）



第65図　B・C区遺構外出土遺物実測図（S＝1/3）

3. 出土地点不明遺物（第66～68図）

ここでは、昭和58年度の発掘調査で出土した遺物のうち、どの調査区から出土したものか判らない遺物を取り扱う。

土師器（第66図21・22） 21・22は口縁が外反する甕である。風化のため外面の調整は判らないが、内面の頸部以下に縦方向のヘラケズリが観察できる。口径は21が26.4cm、22が23.2cmを測る。

中世須恵器（第66図23） 23は甕底部である。平坦な底部より体部が斜上方に向け立ち上がり、内面底部付近には指頭圧痕が巡る。切り離しは静止糸切りである。底径25.6cmを測る。

土師質土器（第66図24～26） 24は皿である。体部と底部の境が強いナデにより段をなし、体部は逆「ハ」の字状に短く立ち上がっている。底部の切り離しは糸切りである。口径7.5cm、底径4.0cm、器高2.2cmを測る。25は口縁部の破片である。斜め上方に向け直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。口径13.2cmを測る。26は無高台の底部片である。底径は5.2cmを測り、切り離しには回転糸切りが施されている。

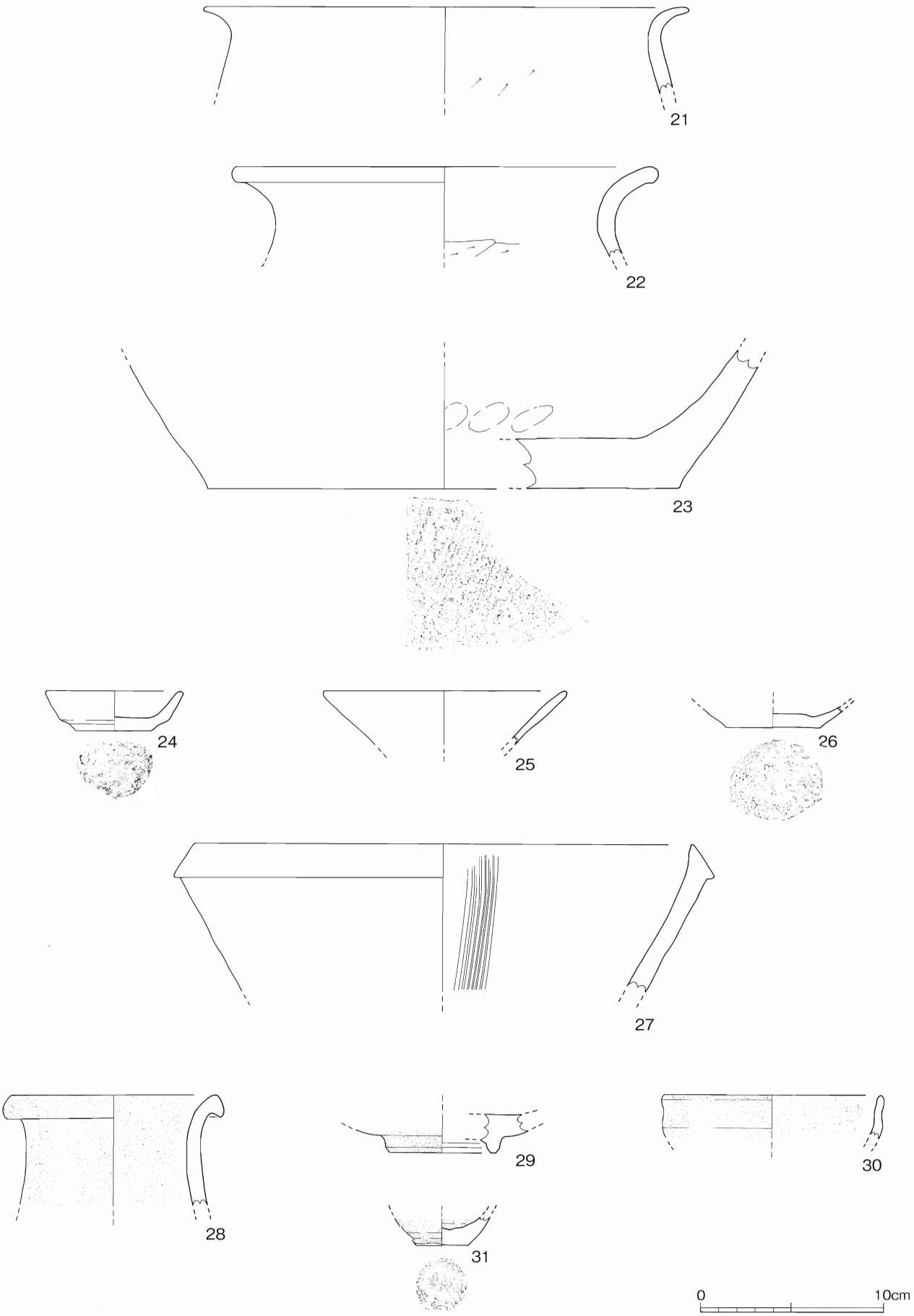
国産陶器（第66図27） 27は備前焼の擂鉢である。体部は斜上方に向け立ち上がり、端部は肥厚され面をもつ。内面には7条1組の条溝が刻まれている。中世3期[註7]。14世紀中葉～15世紀前葉。

貿易陶磁（第66図28～31） 28は中国白磁の四耳壷か、水注と考えられる。口頸部は口縁に向けややすぼんで立ち上がり、口縁部で外反し、端部は外方に折り返されている。口径11.2cmを測る。11世紀後半から12世紀頃[註8]と考えられる。29は中国青磁碗の底部の破片である。しっかりとした高台をもつもので、畳付けと高台内面は無釉である。底径5.8cmを測る。14～15世紀頃[註9]のものと考えられる。30は中国製黒釉陶器碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部に括れをもつ。口径11.8cmを測る。16世紀初頭までのもの。31は中国南方産の瓶である。平坦な底部より体部はやや丸みをもって立ち上がっており、底部外面に回転糸切り痕を残す。にぶい橙色の素地に黒褐色の釉が施されているが、底部は無釉である。底径2.9cmを測る。16世紀代のものと考えられる。

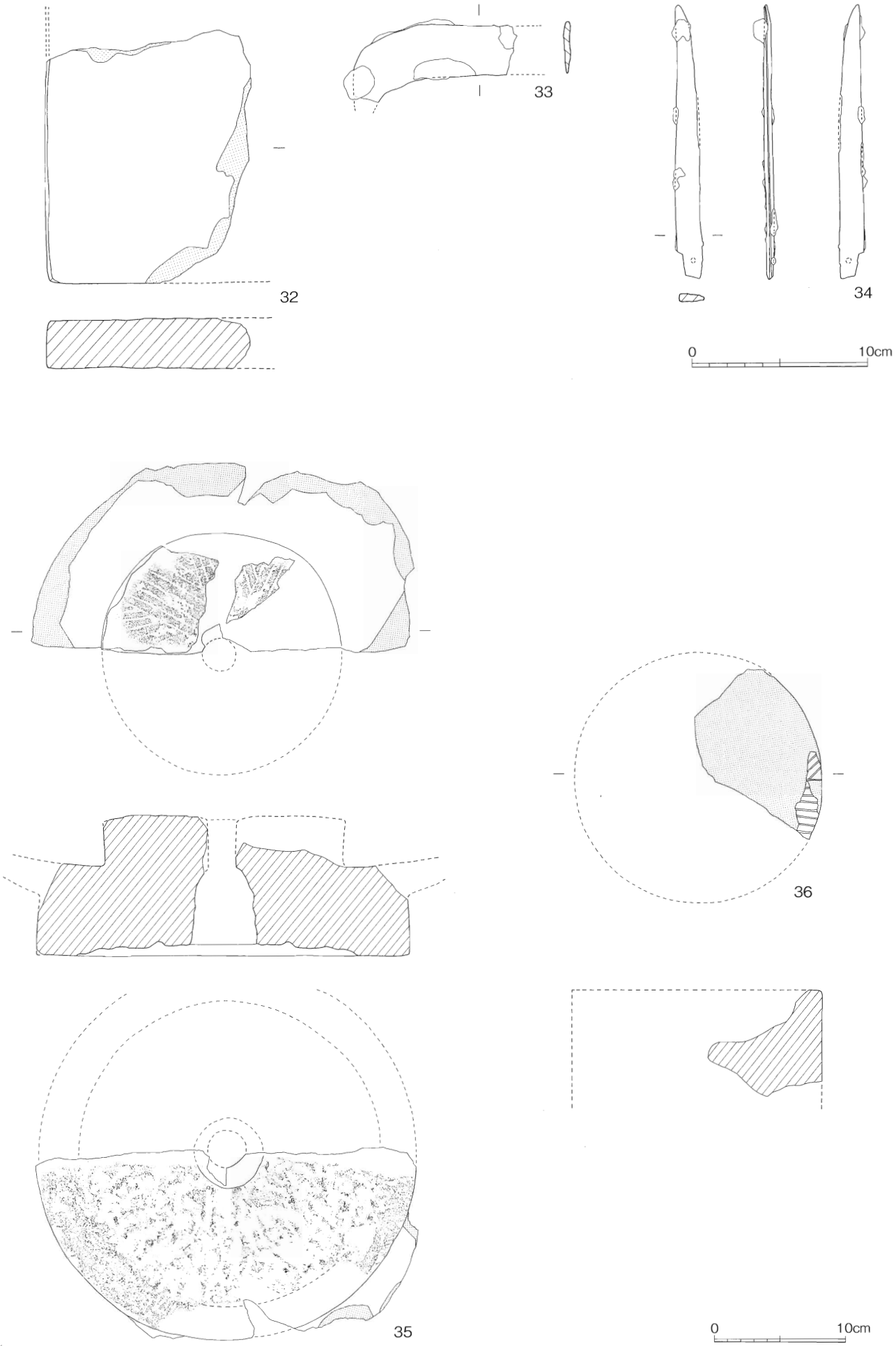
塼（第67図32） 32は素焼の塼である。平面は方形を呈し、厚さは2.7～2.8cmを測る。表面は風化しており、調整は不明である。色調は灰白色を呈し、胎土に0.2～0.7cmの砂粒を多く含む。

鉄器（第67図33・34） 33は鎌である。先端付近で刃部・棟ともに大きく曲がる。残存長8.7cm、幅3.0cm、厚さ最大0.3cmを測る。34は刀子である。刀身関は両関で、刀身長14.2cm、刀身幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。茎は長さ1.35cmで、茎尻の幅1.1cm、厚さ0.3cmを測り、断面は方形を呈する。

石器（第67図35・36） 35は挽臼であり、茶臼の下臼と考えられる。高台内を除く外面部は丁寧に研磨されており、所々に擦痕が観察できる。臼部上面の溝は単位あたり8本以上の条溝が7～8mm間隔で刻まれている。全体に摩滅しており、深さは0.5～1mm程度である。臼部直径は18.3cm、高さ3.7cmを測る。受鉢は大部分が欠損しており、口縁部の形態や直径は判らない。浅い皿状と考えられ、現状での深さは最大で1.1cmを測る。高台は高さ4.7cm、直径28.5cmを測るものであり、高台内には幅3.3cmを測る畳付け状の平坦部が巡る。その内側は鑿で荒く削られ1.1cmの深さに掘り窪められている。中央部には直径5cmの穴が穿たれ、心孔に通じている。36も石製挽臼である。直径18.7cmを測り、35とほぼ同じであるが、高さが7.2cm以上もあり、同一個体ではない。恐らく35に伴う上臼の破片と考えられる。側面は丁寧に研磨されており、下面の条溝は6～8.8mm間隔で刻まれている。小片のため単位あたりの本数は確定できなが、現状では9本観察できる。



第66図　出土地点不明遺物実測図（S＝1/3）



第67図　出土地点不明遺物実測図（塼1/3・鉄器1/3・石器1/4）

第４節　まとめ

昭和58年度に行った禅定寺遺跡の調査は、水田中のA区と丘陵及び平坦部のB・C区の２つにに分け本調査が行われている。ここでは若干の補足説明を加え、まとめとしたい。

A区からは溝状遺構１本（SD01）、掘立柱建物跡３棟（SB01～03）と多数のピットが検出されている。建物跡の覆土からは須恵器・土師器・備前擂鉢・中国青磁が出土し、ピット内からは土師質土器・中国青磁片などが出土したという。しかし、遺物の出土状況など判然とせず、遺構の時期等は不明といわざるを得ない。但し、この調査区は平成10年度調査区に隣接する水田中に位置しており、第４・５章の掘立柱建物跡等と不可分の関係にあったと考えられる。なお、平成10年度調査区と同様に整地層上に掘立柱建物跡が建っていたと考えられるが、詳細は不明である。

次に、B・C区からは５つの加工段（第１～第５加工段）が検出され、これらの平坦面からは溝８本（SD02～09）、土坑２個（SK01・02）、性格不明遺構２個（SX01・02）とピット234個を検出している。検出した多数の柱穴から24棟（SB04～27）の掘立柱建物跡を復元したが、これら加工段や加工段平坦面から検出された遺構の時期や切り合いの新旧関係は不明である。各加工段から検出された遺構の内訳は次のとおりである。

第17表　B・C区各加工段検出遺構一覧表

<table>
<tr><th colspan="2">加工段</th><th colspan="2">溝（壁帯溝）</th><th colspan="3">掘立柱建物跡</th><th colspan="2">土坑</th><th>ピット</th><th>出土遺物</th></tr>
<tr><td rowspan="5">第１加工段</td><td rowspan="4">平坦部</td><td rowspan="4">４本</td><td>SD02</td><td colspan="2">SB04・05・06</td><td rowspan="4">13棟</td><td rowspan="5">SK01・02</td><td rowspan="5">２個</td><td rowspan="5">多数</td><td rowspan="5">第20表調査C区出土遺物</td></tr>
<tr><td>SD03</td><td colspan="2">SB07・08</td></tr>
<tr><td>SD04</td><td colspan="2">SB－09・10</td></tr>
<tr><td>SD05</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td colspan="2">SB11・12・13・14・15・16</td></tr>
<tr><td>加工斜面</td><td colspan="3"></td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">第２加工段</td><td>平坦部</td><td>１本</td><td>SD06</td><td colspan="2">SB17・18・19・20</td><td>４棟</td><td colspan="2"></td><td>多数</td><td>第19表調査B区出土遺物</td></tr>
<tr><td>加工斜面</td><td colspan="3"></td><td colspan="3"></td><td>SK03・04・05</td><td>３個</td><td>４個</td><td>第20表調査C区出土遺物</td></tr>
<tr><td rowspan="2">第３加工段</td><td>平坦部</td><td colspan="3"></td><td colspan="3"></td><td colspan="2"></td><td></td><td>第20表調査C区出土遺物</td></tr>
<tr><td>加工斜面</td><td colspan="3"></td><td colspan="3"></td><td colspan="2"></td><td></td><td>第20表調査C区出土遺物</td></tr>
<tr><td rowspan="3">第４加工段</td><td rowspan="2">平坦部</td><td rowspan="2">２本</td><td>SD07</td><td>SB21</td><td rowspan="2">SB22・23・24・25</td><td rowspan="2">６棟</td><td colspan="2" rowspan="2"></td><td rowspan="2">多数</td><td rowspan="3">第19表調査B区出土遺物</td></tr>
<tr><td>SD08</td><td>SB26</td></tr>
<tr><td>加工斜面</td><td colspan="3"></td><td colspan="3"></td><td colspan="2"></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">第５加工段</td><td>平坦部</td><td>１本</td><td>SD09</td><td colspan="2">SB27</td><td>１棟</td><td>SX01・02</td><td>２個</td><td>多数</td><td rowspan="2">第19表調査B区出土遺物</td></tr>
<tr><td>加工斜面</td><td colspan="3"></td><td colspan="3"></td><td colspan="2"></td><td></td></tr>
</table>

※出土遺物の中には試掘調査で出土した遺物も含まれている。

遺構のうち加工段と溝、及び掘立柱建物跡は密接な関係にあるようである。基本的に丘陵斜面を断面「L」字状にカットして平坦面を作り出し、壁際には壁帯溝が巡っている。掘立柱建物跡は、この加工段及び壁帯溝と平行に桁行を配置しているが、斜面下側となる桁行と梁間のピットは殆ど検出されていない。出雲地域においてこのような掘立柱建物の構築手法は弥生時代から比較的よくみられるものであり、各小地域ごとに竪穴住居と掘立柱建物の割合に時期差が存在することが指摘されている。B・C区からは竪穴住居は検出されておらず、掘立柱建物のみによって構成されている。古墳時代では、掘立柱建物が居住用の主要な建物になるのは７～８世紀に入ってからであることが指摘されている[註10]。出土した遺物は量的には高広ⅢA・B期（７世紀中頃から８世紀前半頃）の須恵器蓋坏と高広ⅣA期（８世紀代）の坏身が中心であるが、土師質土器や中世陶磁器の割合も高い。現時点では７世紀以降の集落跡としておきたい。

第18表　昭和58年度禅定寺遺跡発掘調査A区遺物数量表

弥生土器	土師器	須恵器	中世須恵器	土師質土器	土製品	中国青磁	中国白磁	中国青花
		76						

中国天目	中国褐釉	国産陶磁器（中近世）	不明陶磁器・近代陶磁器等	塼	合計
		3			79

第19表　昭和58年度禅定寺遺跡発掘調査B区遺物数量表

弥生土器	土師器	須恵器	中世須恵器	土師質土器	土製品	中国青磁	中国白磁	中国青花
	2	5		107		4	0	1

中国天目	中国褐釉	国産陶磁器（中近世）	不明陶磁器・近代陶磁器等	塼	合計
1		5	9	1	135

第20表　昭和58年度禅定寺遺跡発掘調査C区遺物数量表

弥生土器	土師器	須恵器	中世須恵器	土師質土器	土製品	中国青磁	中国白磁	中国青花
	3	37		27				

中国天目	中国褐釉	国産陶磁器（中近世）	不明陶磁器・近代陶磁器等	塼	合計
		4	2		73

第21表　昭和58年度禅定寺遺跡発掘調査調査出土地点不明遺物数量表

弥生土器	土師器	須恵器	中世須恵器	土師質土器	土製品	中国青磁	中国白磁	中国青花
1	24	22	1	63	1	7	5	

中国天目	中国褐釉	国産陶磁器（中近世）	不明陶磁器・近代陶磁器等	塼	合計
2	3	48	14	2	193

第22表　昭和58年度禅定寺遺跡出土中世陶磁器一覧表

青磁碗												青磁皿坏				
蓮B0	蓮B1	蓮B2	蓮B3	蓮B4	雷C1	雷C2	雷C3	龍D	龍E	景	不明その他	龍Ⅳ	稜花A	稜花B	景	不明その他
								1			破片 5 盤 1 蓮弁文 3		1			

白磁皿							青花碗						青花皿					
A	B	C	D	E1	E2	不明その他	B	C	D	E	華南	不明その他	B1	C	華南C	B2	E	不明その他
																	1	

天目	褐釉	その他の中国製品	中国製品合計	朝鮮王朝			東南アジア	国産品・その他	備　考
				碗皿	瓶	不明			
3 （黒釉2・褐釉1）		白磁四耳壷または水注 3 中世前半（12世紀代）の白磁破片 2 器種不明褐釉陶器 2 褐釉茶入 1	23					塼 5 備前擂鉢 15 備前壷甕類 16 越前擂鉢 2 瓷器系甕 15 肥前系陶器（砂目）1 肥前系陶器（灰釉碗）1 肥前系陶器（鉢）2 肥前系磁器（広東碗）1 肥前系磁器（陶胎）1 肥前系磁器（その他）6 中世須恵器甕 1	その他不明陶磁器・近現代の陶磁器等 25

［註］

註１　底部に糸切りをもつ中世土師器を便宜的に土師質土器とした。(P－71)

註２　大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』1994年３月（P－89）

註３　島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』－和田団地造成工事に伴う発掘調査－　1984年３月（P－89）

註４　中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社　1995年（P－89）

註５　越前古陶とその再現－九右衛門窯の記録－　平成６年８月　出光美術館（P－89）
小原貴樹「米子平野出土の中世陶磁器」『松江考古第８号』1992年12月　松江考古学談話会（P－89）

註６　貿易陶磁研究集会四国大会資料集　『城館出土の貿易陶磁器』　－織豊前夜の西国大名と貿易－
2000年６月　日本貿易陶磁研究会（P－89）

註７　乗岡実『備前焼擂鉢の編年について』第３回中近世備前焼研究会資料　2000年11月　中近世備前焼研究会
乗岡実『中世備前焼擂鉢・甕の編年案』2002年１月（P－91）

註８　註４と同じ。(P－91)

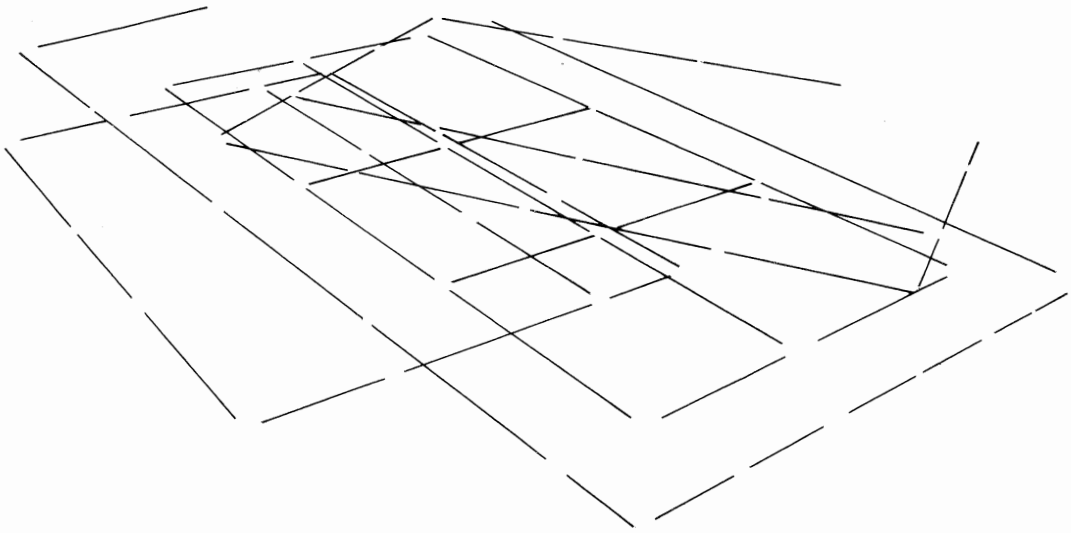
註９　上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』NO.２　1982年（P－91）

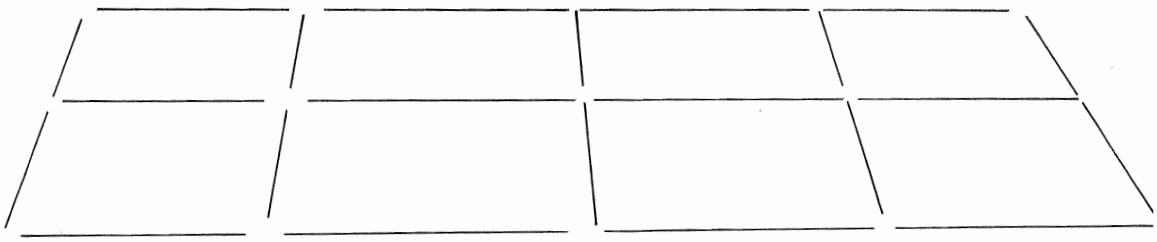
註10　島根県教育委員会『柳Ⅱ遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡』
一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅳ　1996年８月（P－94）

［参考文献］

・岡田善治「会見町・浅井土居屋敷跡の陶磁器」『松江考古第８号』1992年12月　松江考古学談話会
・島根県教育委員会『才ノ峠遺跡』一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ　1993年３月
・八重樫忠郎『平泉出土の輸入陶磁』貿易陶磁研究NO.16　1996年
・『石台遺跡』－馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告－　島根県教育委員会　1986年３月

図　　版





SB－01・02・04全景（東から）

SB－03全景（南東から）

SB－01・02・04全景（東から）

SB－03全景（南東から）

図版 2

発掘調査前の禅定寺遺跡（東から）

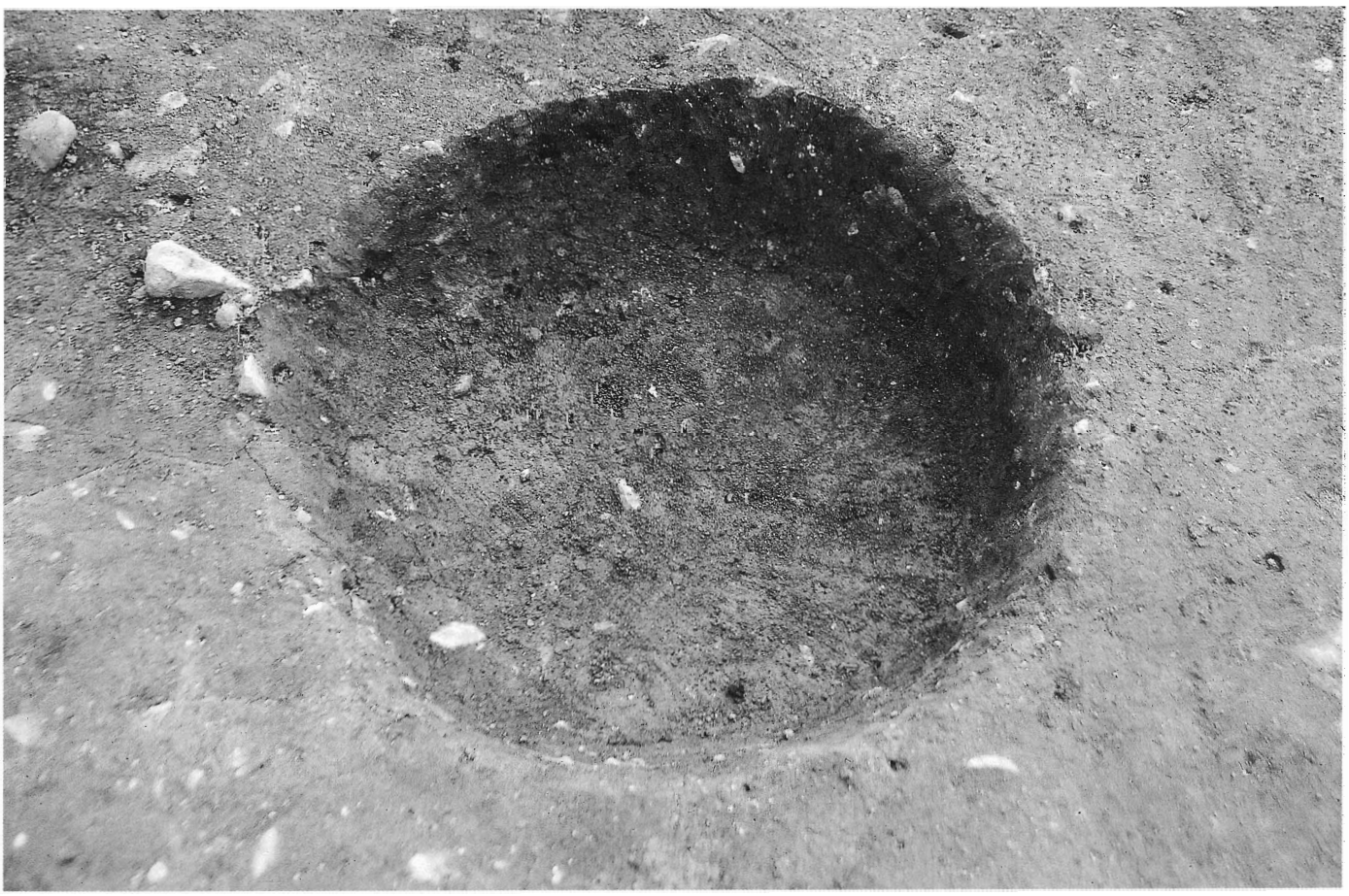
発掘調査後の禅定寺遺跡（北東から）

SK－01全景（北北東から）

SK－01遺物出土状況（南から）

図版 4

SK－02全景（北東から）



SK－03全景（東から）

SK－03遺物出土状況（東から）

SK－04全景（北東から）

図版 6

SK－05全景（北西から）

B－３・４区遺構外遺物出土状況（南西から）

遺構外遺物出土状況（鍔40－186・土師質土器35－129）

遺構外遺物出土状況（甑29－77）

図版 8

遺構外遺物出土状況（石製丸鞆39ー182・須恵器33ー105）

第 2 遺構面全景（北北東から）

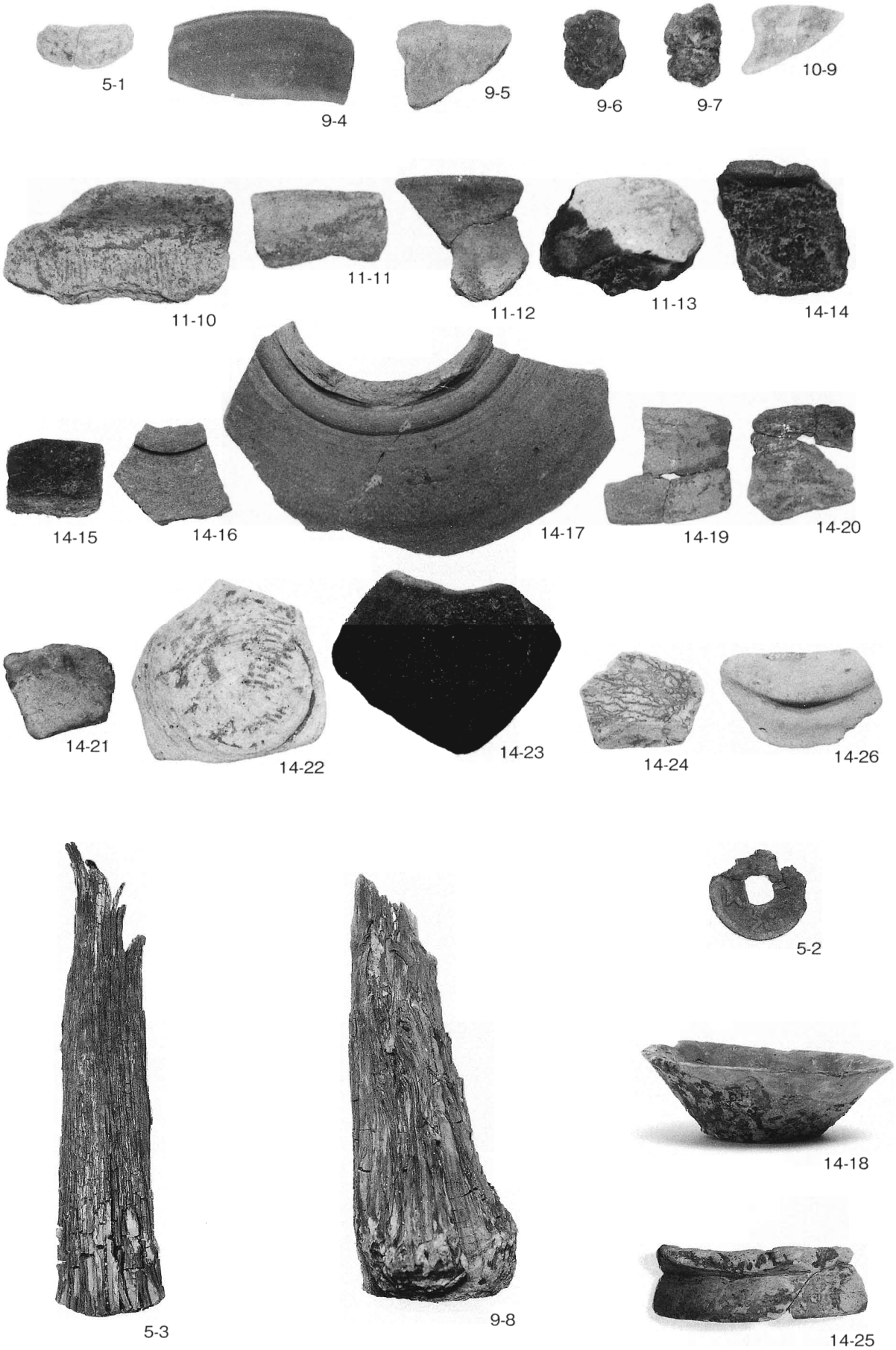
SD－03・04全景（北西から）

SD－01・02、SK－07全景（北から）

図版 10

発掘作業風景

現在の禅定寺遺跡（児童福祉センターを西から望む）



SB－01～04、SK－01出土遺物

16-27

16-28

16-29

18-30

18-31

18-32

18-33

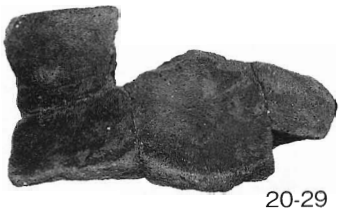
18-34

18-35

18-36

18-37

18-38


20-29

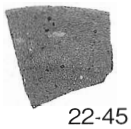
20-40

20-41

20-42

22-43

22-44


22-45

22-46

22-47

22-48

22-49

22-50

24-51

24-52

24-53

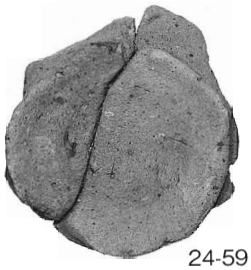
24-54

24-55

24-56

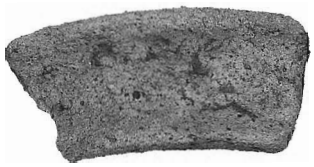
24-57

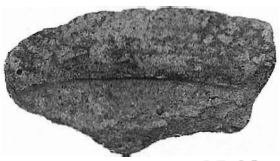
24-58


24-59

24-60

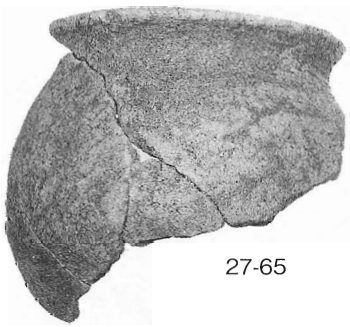
SK－02～05、ピット内出土遺物

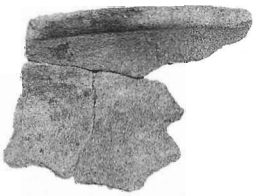

25-61

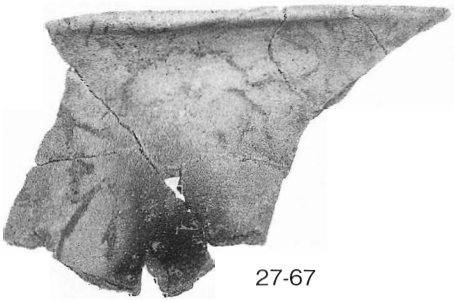

25-62

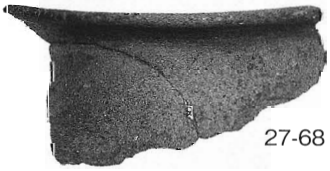
25-63

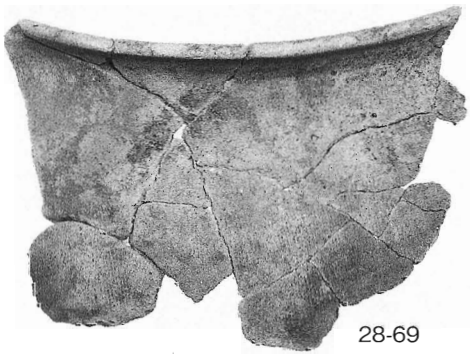
25-64

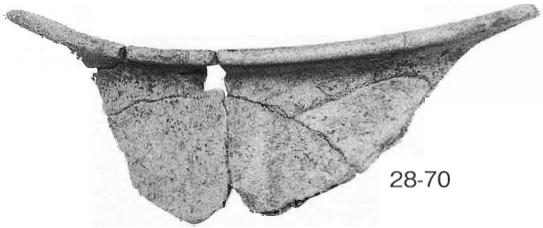

27-65


27-66


27-67


27-68

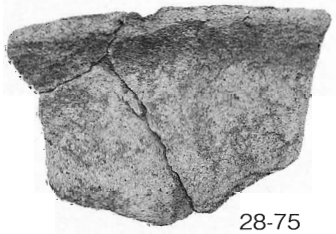

28-69

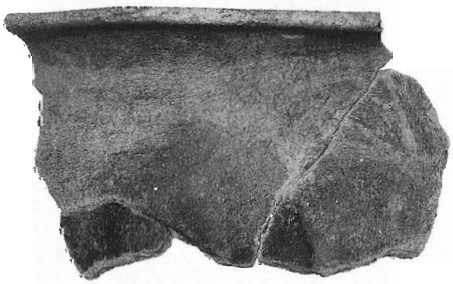

28-70

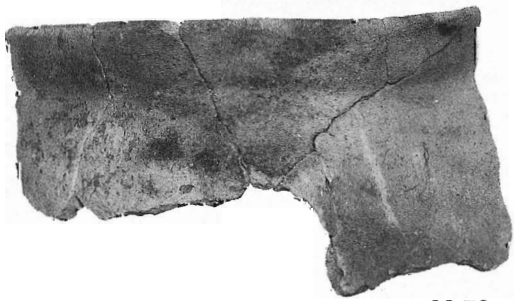
28-71

28-73

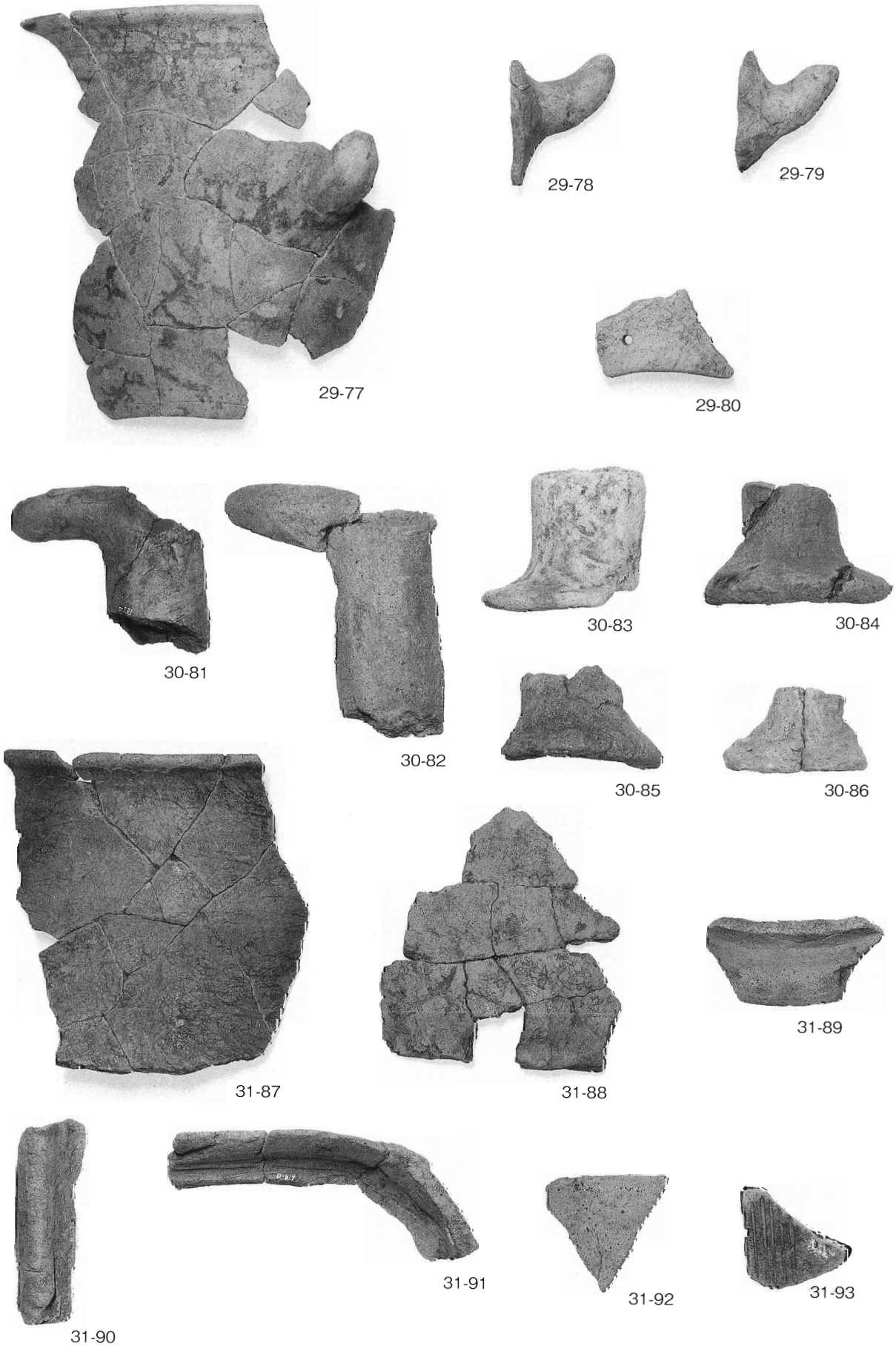
28-74


28-75

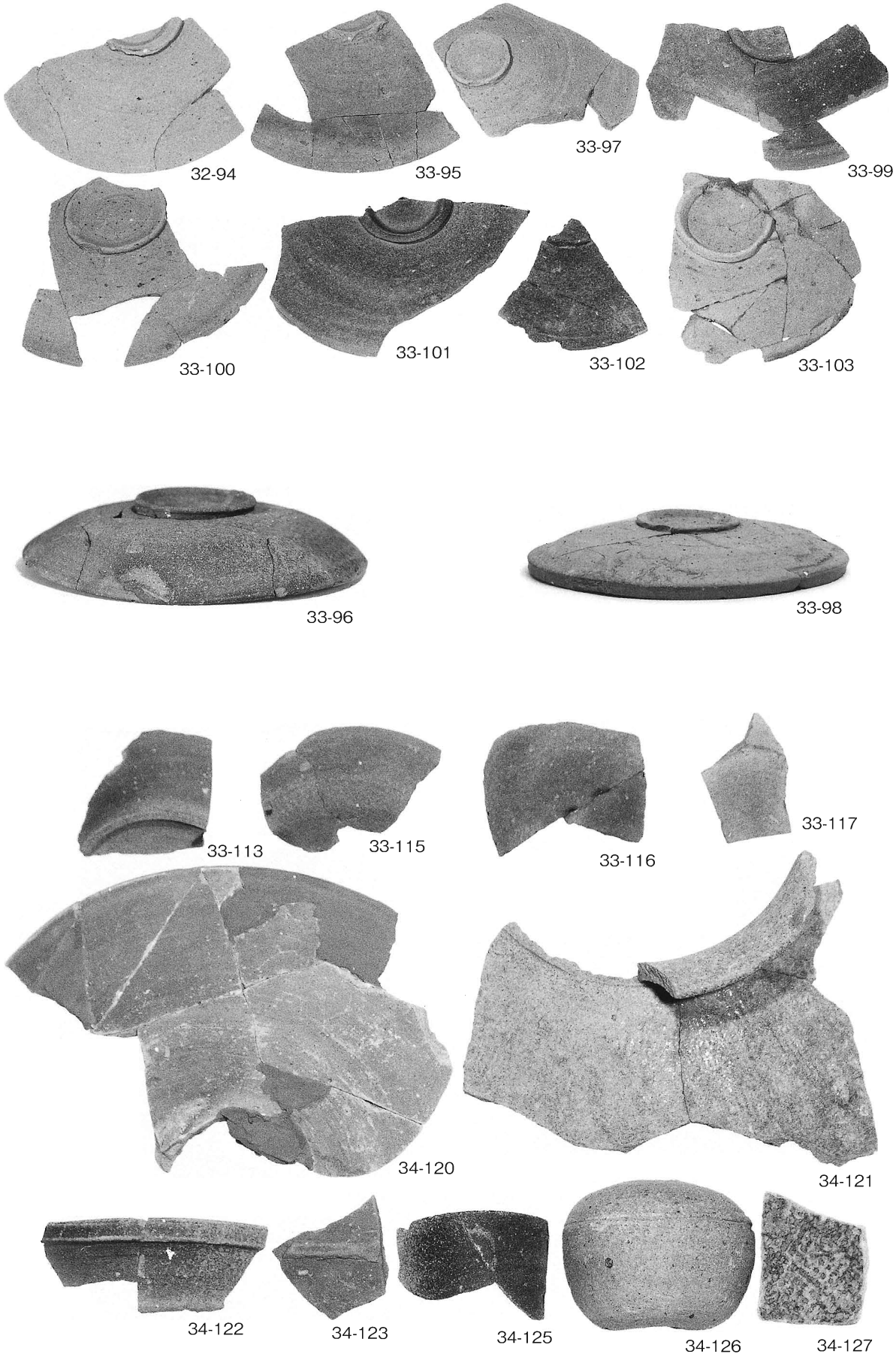

28-72


28-76

遺構外出土　弥生土器・土師器


29-77
29-78
29-79
29-80
30-81
30-82
30-83
30-84
30-85
30-86
31-87
31-88
31-89
31-90
31-91
31-92
31-93

遺構外出土　土師器


32-94
33-95
33-97
33-99
33-100
33-101
33-102
33-103
33-96
33-98
33-113
33-115
33-116
33-117
34-120
34-121
34-122
34-123
34-125
34-126
34-127

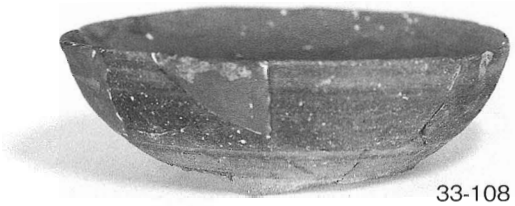
遺構外出土　須恵器

33-104

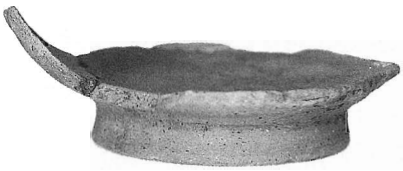
33-105

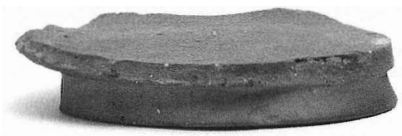
33-106

33-107


33-108

33-109


33-110


33-111

33-112

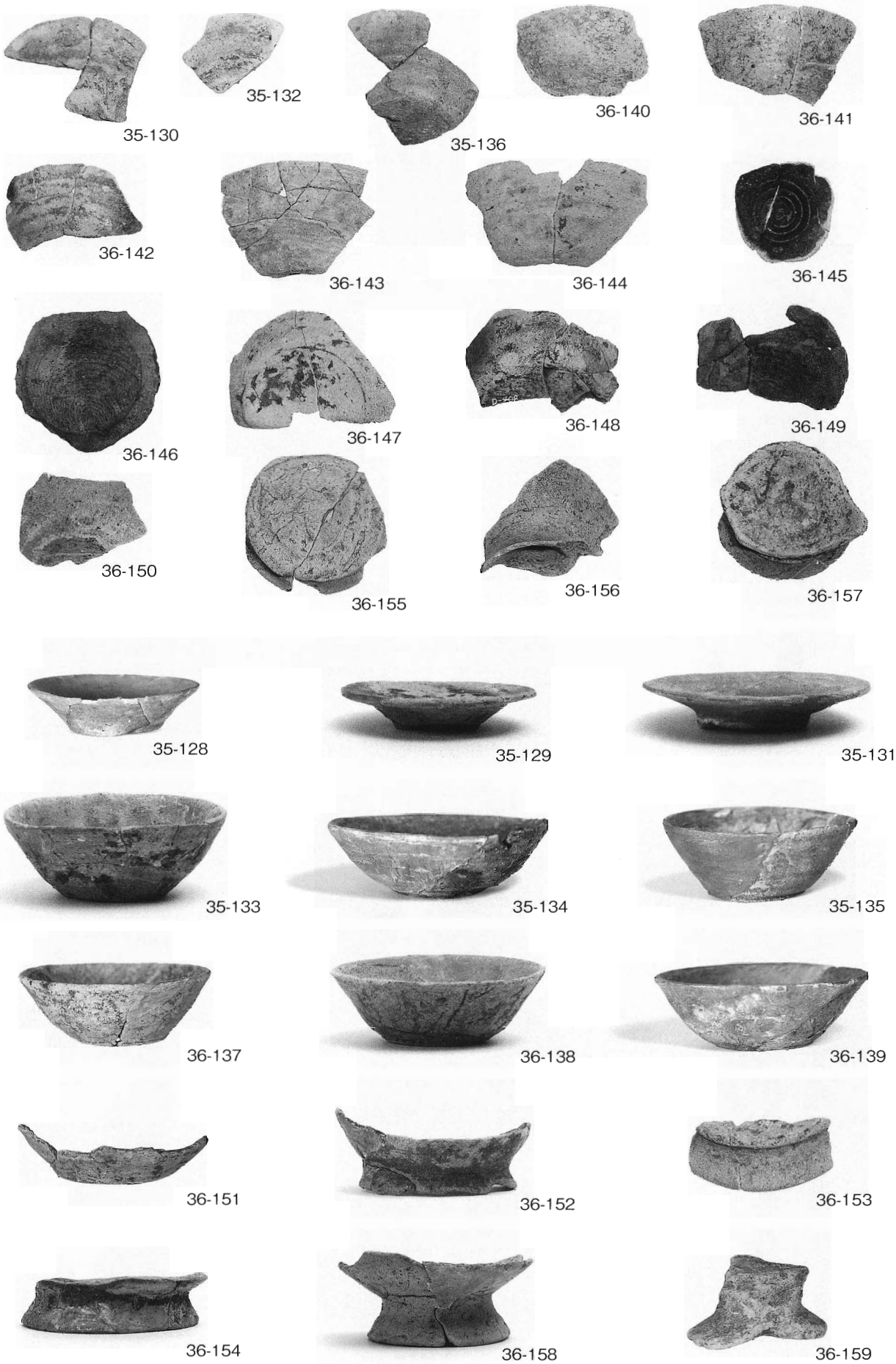
33-114

33-118

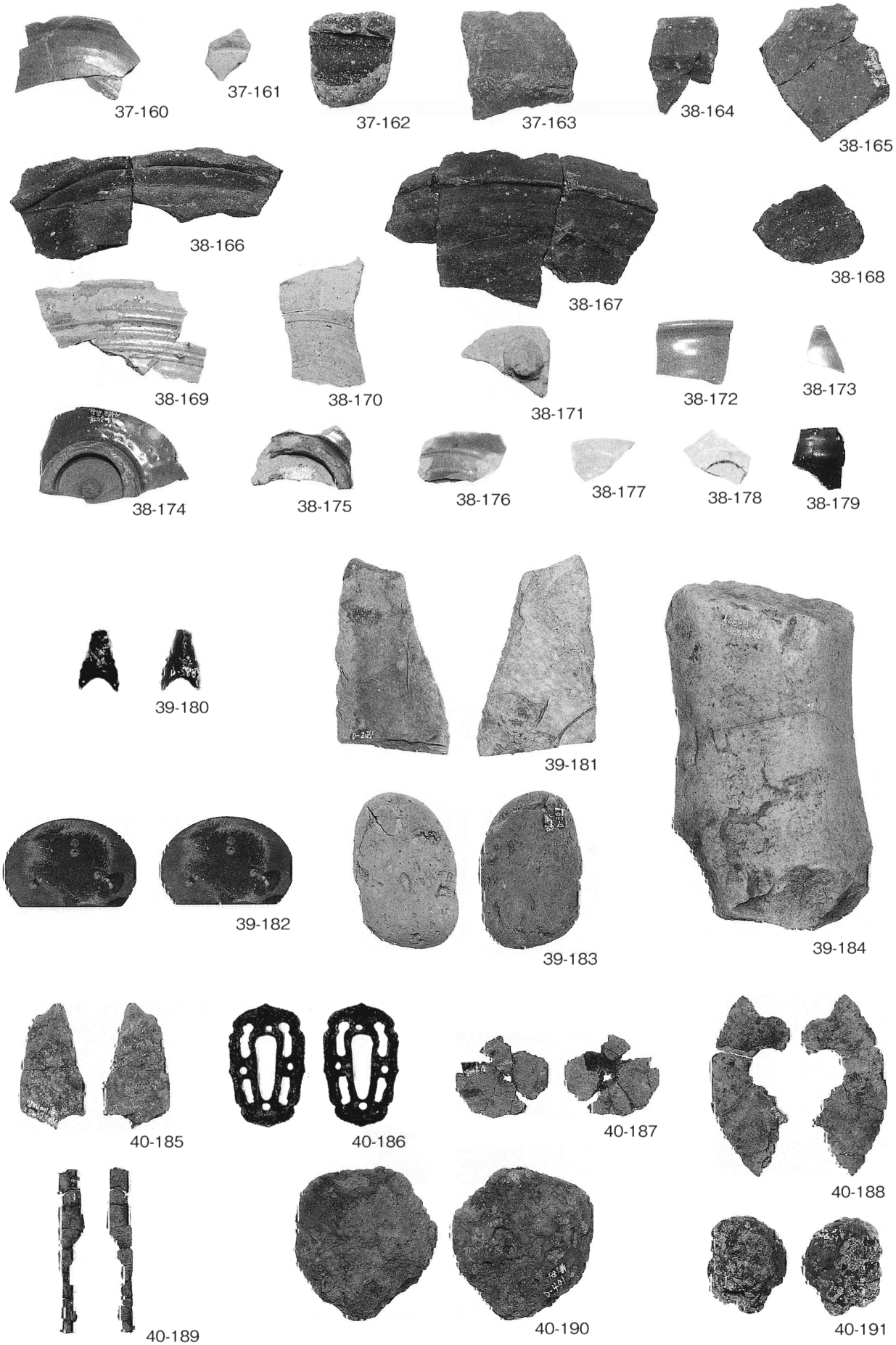
34-119

34-124

遺構外出土　須恵器

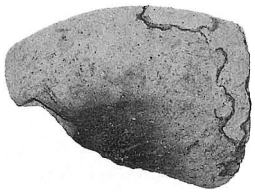

35-130
35-132
35-136
36-140
36-141
36-142
36-143
36-144
36-145
36-146
36-147
36-148
36-149
36-150
36-155
36-156
36-157
35-128
35-129
35-131
35-133
35-134
35-135
36-137
36-138
36-139
36-151
36-152
36-153
36-154
36-158
36-159

遺構外出土　土師質土器



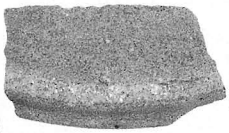
遺構外出土　陶磁器・石器・鉄器

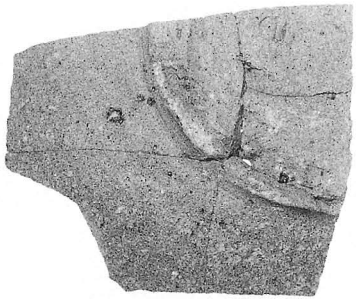
42-192

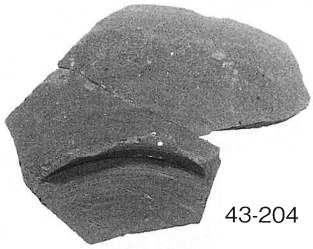

42-193

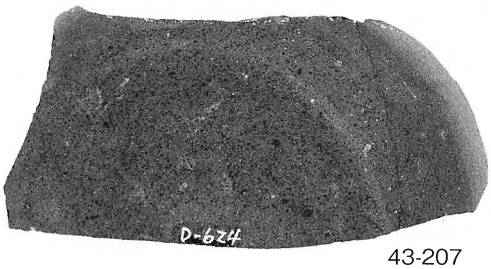
42-194

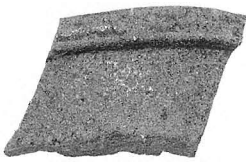
43-196


43-200


43-201


43-204


43-207

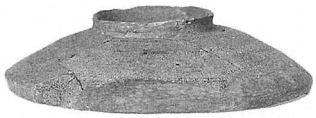

43-210

43-211

43-195

43-197

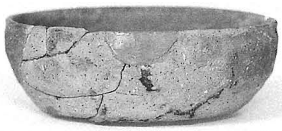
43-198


43-199

43-202

43-203

43-205


43-206

43-208

43-209

44-212

整理層出土遺物

図版 20（昭和58年度調査区）

発掘調査地全景（南西から）

A区調査後全景（南西から）

B・C区調査後全景（南西から）

図版 22（昭和58年度調査区）

第１加工段全景（南から）

第２加工段全景（南西から）